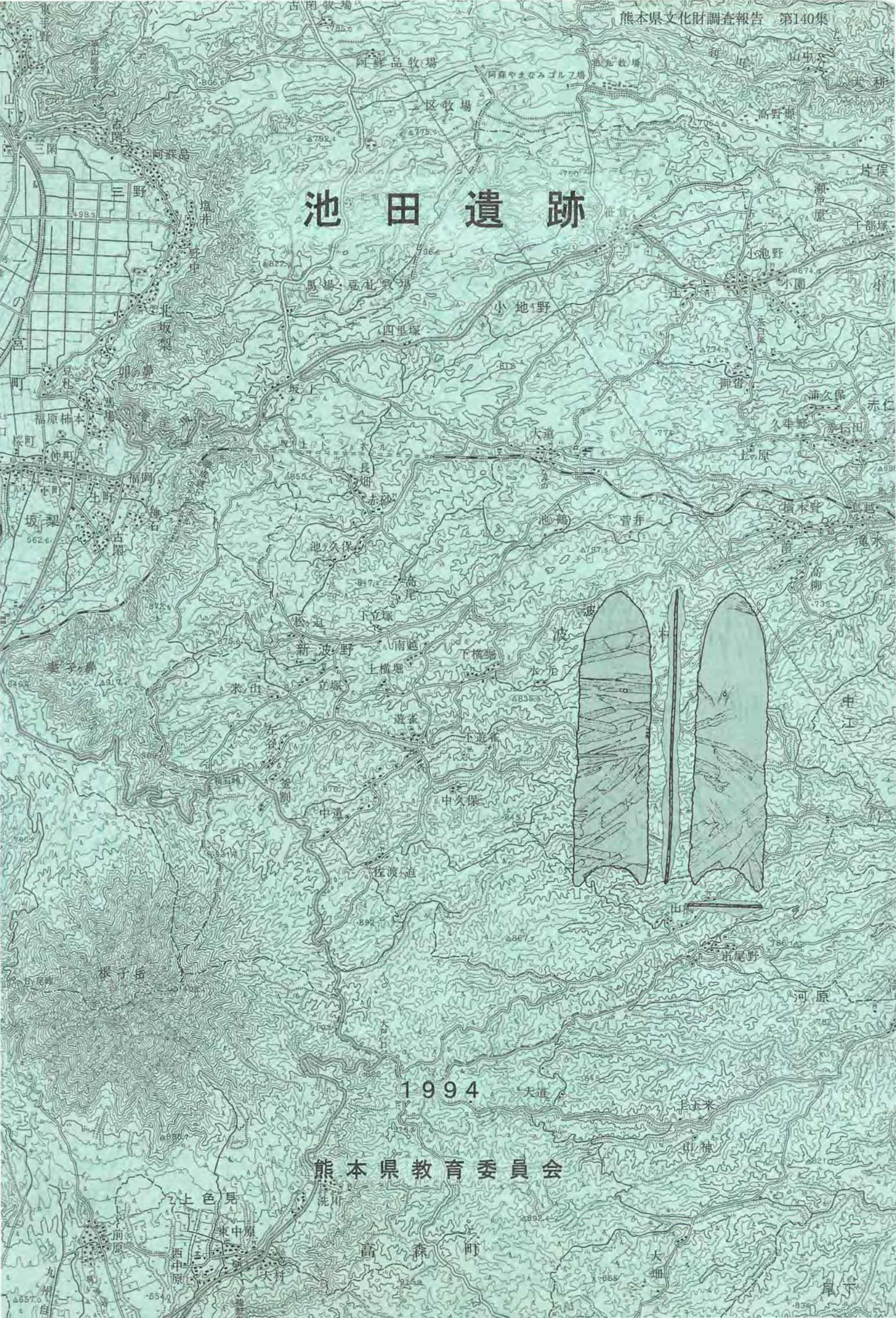
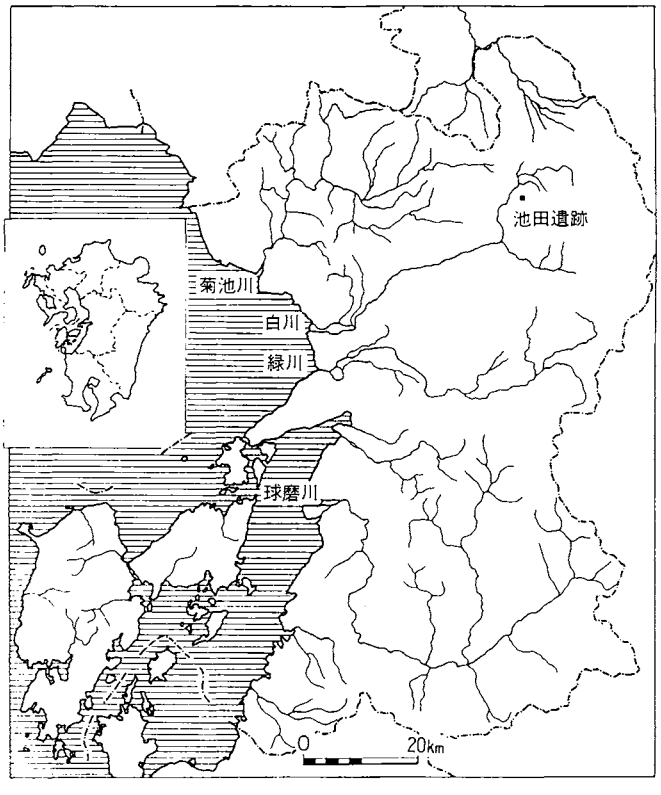
池田遺跡


阿蘇品牧場
阿蘇やまなみゴルフ場
一区牧場
高野原
三野
塩井
野中
馬場
厄札牧場
小地野
四里塚
北坂梨
坂上
大道
長畑
赤松
池鶴
菅井
池久保
高尾
下立塚
松迫
新波野
南迫
下横堀
上横堀
水尾
米山
立塚
遊雀
上遊雀
中久保
中道
佐渡迫
根子岳
河原
大日
大道
上玉来
切神
熊本県教育委員会
洗川
上色見
東中原
前原
西中原
大村
高森町
大畑
尾下
小池野
小園
御宮
浦久保
久牛野
赤石田
上原
損本野
滝水
高柳
中江
出尾野
坂梨
福原柿本
桜町
仲町
福岡
土町
古閑
三閑
阿蘇品
宮町
1994

池 田 遺 跡



1994

熊本県教育委員会

序　　文

熊本県には豊かな自然や歴史、風土のなかで培われた多彩な地域の伝統文化や文化遺産が多く残されています。県教育委員会では、県民の皆様の文化財に対する深い御理解と御協力を得て、文化財を守り、さらに新しい文化を創造し、後世に引き継いでいきたいと考えております。

本書は、阿蘇谷地区・県営圃場整備事業に先行して行った池田遺跡の発掘調査報告書であります。調査では弥生時代の土器・石器・鉄器を中心とするさまざまな遺物や、弥生人の生活の跡である。遺構が出土し、この地域の原始時代の生活の実体を知る貴重な資料が得られました。この報告書が、熊本県の歴史を学ぶうえで、また埋蔵文化財をより深く理解していただくうえで、御活用いただければ幸いです。

最後に、調査の円満な実施に、御理解と御協力をいただきました地元の方々、関係機関並びに調査の指導をいただきました諸先生に対し厚くお礼申し上げます。

平成６年３月

熊本県教育長　道　越　　温

例　　言

1．本書は、阿蘇谷地区・県営圃場整備事業に伴い、事前に実施した埋蔵文化財調査の調査報告書である。

2．発掘調査を実施した遺跡は、熊本県阿蘇郡阿蘇町大字狩尾字池田に所在する池田遺跡で、熊本県農政部からの依頼を受けて、熊本県教育委員会がおこなった。

3．遺物の整理は、熊本県文化財収蔵庫でおこなった。

4．遺跡の発掘調査は、平成４年度に実施し、平成５年度に整理をおこなった。

5．本書の地形図は、熊本県農政部からの提供を受けたものをもとにして作成した。

6．現地調査での実測および写真撮影は、吉田正一、北川賢次郎両調査員がおこなった。

7．遺構の製図は、中田弥生、丹生英里、藤原ゆり子、吉本清子、大塚磯子がおこなった。

8．遺物の実測は、吉田、木下俊恵、中田、丹生、吉本清子、平畑信子が主におこない、山下義満、重永照代、河野智子、徳永みどりが随時協力した。その分担は、遺物計測表の実測番号欄に記する通りである。

9．遺物実測における土器の色調観察には、主に農林水産技術会議・日本色彩研究所監修の標準土色帖帳を用いた。

10．遺物の写真撮影は、吉田、中田、丹生、吉本、平畑、重永でおこなった。

11．遺構および遺物の写真処理は、中田、丹生、吉本、平畑でプリントした。

12．本書の執筆は、主に吉田正一があたり、一部を島津義昭（第Ｉ章第１節および第２節）が担当した。

13．本書の編集は、熊本県教育委員会でおこない、吉田が担当した。

14．表紙には、国土地理院発行の地形図を用いた。

本文目次

序文
例言
第Ⅰ章　調査の概要……1
　第１節　調査にいたる経緯 ……1
　　１．調査の契機 ……1
　　２．周知の遺跡と試掘調査……1
　　３．調査の進捗 ……1
　　４．報告書の作成……1
　第２節　調査の組織……2
　第３節　調査の方法と経過 ……3
第Ⅱ章　調査の成果……5
　第１節　遺跡の概要……5
　第２節　遺構と遺物……5
　　１．竪穴住居跡と遺物……5
　　２．土坑群 ……30
　第３節　まとめ……

挿図目次

第１図　周辺地形図……4
第２図　池田遺跡遺構配置図……6
第３図　阿蘇谷を中心とする主要遺跡……7
第４図　周辺遺跡分布図……9
第５図　１号住居跡実測図……11
第６図　１号住居跡出土遺物実測図……12
第７図　２号住居跡実測図……13
第８図　３号住居跡実測図……14
第９図　４号住居跡実測図……15
第10図　５号住居跡実測図……17
第11図　６号住居跡実測図……18
第12図　６号住居跡出土遺物実測図……19
第13図　６号住居跡出土遺物実測図……20
第14図　６号住居跡出土遺物実測図……21
第15図　６号住居跡出土遺物実測図……22
第16図　６号住居跡出土遺物実測図……23
第17図　６号住居跡出土遺物実測図……24
第18図　７号住居跡実測図……25
第19図　８号住居跡実測図……27
第20図　９号住居跡実測図……28
第21図　９号住居跡出土遺物実測図……29
第22図　土坑配置図……31
第23図　土坑実測図……32
第24図　土坑実測図……34

表　目　次

第１表　狩尾遺跡群調査地一覧 ……1
第２表　阿蘇谷を中心とする主要遺跡地名表 ……8
第３表　出土遺物計測表（土器） ……36
第４表　出土遺物計測表（石器） ……37
第５表　出土遺物計測表（鉄製品） ……38

写真図版目次

図版１　１．遺跡全景……41
図版２　２．１号住居跡 ……42
　　３．１号住居跡（炉） ……42
図版３　４．２号住居跡 ……43
　　５．５号住居跡 ……43
図版４　６．３号住居跡（出土状況） ……44
　　７．３号住居跡（完掘） ……44
図版５　８．４号住居跡（出土状況） ……45
　　９．４号住居跡（完掘） ……45
図版６　10．４号住居跡（出土状況・土器）……46
　　11．４号住居跡（出土状況・炭化物）
　　……46
図版７　12．６号住居跡（出土状況） ……47
　　13．６号住居跡（完掘） ……47
図版５　14．６号住居跡（炉） ……48
　　15．６号住居跡（炉底の炭化物層断面）
　　……48
図版８　16．６号住居跡（炉底の炭化物層断面拡大）
　　……49
　　17．６号住居跡（出土状況・鉄滓）……49
図版９　18．６号住居跡（出土状況） ……50
　　19．６号住居跡（出土状況） ……50
図版10　20．６号住居跡（出土状況・鉄鏃）……51
　　21．６号住居跡（出土状況・刀子）……51
　　22．６号住居跡（出土状況・鉄鎌）……51
図版11　23．７号住居跡（出土状況） ……52
　　24．７号住居跡（完掘） ……52
図版12　25．７号住居跡（出土状況） ……53
　　26．８号住居跡 ……53
図版13　27．９号住居跡 ……54
　　28．９号住居跡（出土状況・土器）……54
図版14　29．９号住居跡 ……55
　　30．近世土坑群（北より） ……55
図版15　31．１号土坑……56
　　32．２号土坑……56
図版16　33．３号土坑……57
　　34．４号土坑……57
図版17　35．５号、６号、７号、13号、14号土坑
　　……58
　　36．８号土坑……58
図版18　37．９号土坑……59
　　38．11号土坑……59
図版19　39．12号土坑……60
　　40．12号土坑（近世陶器出土状況）……60
図版20　41．16号土坑……61
　　42．17号土坑……61
図版21　43．６号住居跡出土の壷形土器 ……62
　　44．３号住居跡出土の壷形土器 ……62
　　45．７号住居跡出土の壷形土器 ……62
図版22　46．７号住居跡出土の複合口縁壷（口縁）
　　……63
　　47．９号住居跡出土の複合口縁壷（口縁）
　　……63
　　48．９号住居跡出土の複合口縁壷（口縁）
　　……63

49. ９号住居跡出土の複合口縁壷
（口縁）……63
50. ６号住居跡出土の鉢形土器 ……63
図版23 51. ３号住居跡出土の長頸壷形土器 ……64
52. ８号住居跡出土の鉢形土器 ……64
53. ９号住居跡出土の台付鉢形土器 ……64
54. ６号住居跡出土の高杯形土器 ……64
図版24 55. ６号住居跡出土の甕形土器 ……65
56. ６号住居跡出土の甕形土器 ……65
図版25 57. ４号住居跡出土の甕形土器 ……66
58. ５号住居跡出土の甕形土器 ……66
59. ６号住居跡出土の甕形土器 ……66
60. ６号住居跡出土の甕形土器 ……66
61. ４号住居跡出土の甕形土器 ……66
図版26 62. ４号住居跡出土の甕形土器脚台部
……67
63. ６号住居跡出土の甕形土器脚台部
……67
64. ６号住居跡出土の甕形土器脚台部
……67
図版27 65. ６号住居跡出土の砥石 ……68
66. ６号住居跡出土の磨石 ……68
図版28 67. ６号住居跡出土の磨石 ……69
68. ６号住居跡出土の磨石 ……69
69. ６号住居跡出土の磨石 ……69
70. ６号住居跡出土の磨石 ……69
図版29 71. ６号住居跡出土の鉄製品 ……70
72. ６号住居跡出土の鉄製品 ……70
図版30 73. ６号住居跡出土の鉄製品 ……71
74. ６号住居跡出土の鉄製品 ……71
図版31 75. 出土鉄製品 ……72
76. 出土鉄製品 ……72
図版32 77. ９号住居跡出土の鉄製品 ……73

第Ⅰ章　調査の概要

第１節 調査にいたる経緯

１．調査の契機

池田遺跡を最東部として存在する一連の遺跡群は時代としても同一であり、しかも集落遺跡という共通性をもつ。すなわち弥生時代後期における地域的な共同体として纏まりえた集落群とみられるのである。したがって、これらをその存在する大字名をとり狩尾遺跡群と称することが可能である。

狩尾遺跡群を構成する諸遺跡については表1のとおりである。あくまでも調査の結果によるものであるが、さらにこの地域的な共同体は東に広がることも考えられる。

平成2年（1990)7月の豪雨は阿蘇地方に多大の損害を与えた。火山灰の軟弱土壌からなるこの地方では、ある一定の周期を以て、土石流が生じて生活地といわず、生産地といわず火山灰一色にしてしまうのである。

この時は阿蘇谷の東部、一の宮町を中心に被害が出た。阿蘇谷一帯の圃場はことごとく火山灰に埋もれてしまった。被害地には激甚災害指定がなされ、いろいろな復旧工事が計画されたが、今回の文化財調査は、この圃場の復旧工事が直接の契機になっている。

２．周知の遺跡と試掘調査

事業予定地区内の周辺の周知の遺跡は、今回報告する池田遺跡を始め、小無田・古園等があるが、とくに後者の古園では集落跡と考えられる箇所と石棺の発見場所があり、大規模な遺跡であることが予想された。

池田遺跡の南側の古園遺跡は、その立地からみて一連の遺跡と考えられるが、ここは今回の調査の契機になった、圃場整備事業に先立ち、激甚対策事業による整備が行われた。

この調査の経過及び結果については、すでに報告書を刊行している。

３．調査の進捗

事業名は県営災害復旧関連区画整備事業である。

発掘調査は平成4年６月から開始した。当初、新年度が始まってすぐに調査に入る予定であったが、激甚対策関連地区の調査で、予想以上の遺構・遺物が出土しその対応に時間がかかった。池田・古園地区は試掘時にも多くの遺物が出土し、遺跡が大規模であることは事前に予想され、狩尾遺跡群の中でも最重要地点であると判断されたので、事業をおこなう農政部との協議により大幅に計画の変更をおこなった。調査はやむを得ず削平する部分のみを対象としたため変則的な形になっている。勿論激甚対策関連事業においても、調査区は水路の部分のみおこなった。

第１表　狩尾遺跡群調査地一覧

名　称	調査面積（㎡）	所 在 地
狩尾湯ノ口	6,140	阿蘇郡阿蘇町大字狩尾湯ノ口
狩尾無田	7,146	阿蘇郡阿蘇町大字狩尾無田
狩尾前田	2,796	阿蘇郡阿蘇町大字狩尾前田
池　田	3,299	阿蘇郡阿蘇町大字狩尾池田
古　園	831	阿蘇郡阿蘇町大字狩尾古園

４．報告書の作成

池田遺跡は古園遺跡と直接関連する遺跡であることは前述のとおりであるが、さらに激甚対策事業に先の調査に主力を置き、調査の翌年、平成4年度末には報告書を刊行した。足架け2年、5遺跡に及ぶ遺跡の調査報告書を作成するのは極めて困難な事業で

あったが、力を併せてこれを成し遂げた。池田遺跡については、この大きな作業に平行して報告書作成を行う余裕が無く、平成5年度に遺物の整理と報告書の刊行を行った。以上述べきたように池田遺跡は狩尾遺跡群の一角を占める遺跡であり、その内容は共通するものが多い。したがって、報告書の利用にあたっても、『狩尾遺跡群』において報告した諸遺跡とも有機的な関連をもつものであるので、これと併せて行われることを望むものである。

第２節　調査の組織

整理事業責任者	大塚　正信（文化課長）	発掘事務担当	高浜　保子（参事）
発掘調査責任者	大塚　正信（文化課長）	整理総括	島津　義昭（調査第一係長）
	平野　芳久（教育審議員）	発掘総括	島津　義昭（調査第一係長）
	隈　　昭志（教育審議員）	報告書作成	吉田　正一（嘱託）
	松崎　厚生（課長補佐）	調査担当	吉田　正一（嘱託）
整理事務担当	木下　英治（主幹・経理係長）		北川賢次郎（嘱託）
発掘事務担当	木下　英治（主幹・経理係長）		吉本　智明（嘱託）

現地作業員	市原いつみ	中村タツ子	井本ナナエ
	五嶋千枝子	柳川　義夫	芹川　貞子
	山本キミ子	山本　桂子	本田トミ子
	山本　節子	山本　信子	本田チズ子
	山本　香代	市原　紀子	本田　堅二
	江入　律子	本田　睦男	芹川チズエ
	江入　栄子	本田　茂光	
	柳川ミエト	白川　アイ	

整理作業員	後藤　直美	重永　照代	荒牧　陽子
	小山　正子	後藤ちず子	河崎　節子
	水本寿美子	今福　英子	宇野　玲子
	米倉　五月	吉本　清子	山元　友子
	江島　園子	大塚　磯子	

第３節　調査の方法と経過

調査は、重機による表土剥ぎから開始し、さらに表面清掃をしつつ遺構の検出を行う。地山は黄褐色土で遺構は暗褐色ないし黒褐色土であり検出は比較的に容易である。このあと実測図ならびに遺構配置図の作成に供するため10m×10mを単位にグリッドを設定する。グリッドの方位は任意であり、調査区の長軸に概ね合わせた。

発掘は遺構確認後ただちに入らず、引き続き本遺跡の所在する丘陵地の西、北の試掘調査を行う。狩尾遺跡群の狩尾・前田遺跡の調査を先行し、これの完了後に池田・古園遺跡と平行して発掘に入る。

住居跡は、平面形態や切り合いの状況を考慮し、確認後に土層の堆積を観察すべき土手を十字状ないし１条残して発掘し、断面の実測図作成と写真撮影で行った。遺物は、遺構の埋土を除去し、分布状況を写真撮影したあと、平面の分布図を作成し、各個ごとに出土レベルを記録しつつ取り上げた。

土坑も概ね同様の記録を行ったが、著しい削平により遺構の残りが悪い。

実測図の縮尺は、住居跡を20分の１、土坑を10分の１である。調査の経過は次のとおりである。

1992年６月19日、前調査地である狩尾・前田遺跡の調査をほぼ終え、調査器材を本遺跡に搬入を行うとともに吉田、北川調査員が調査に着手する。同日、雨天に備え全長10mのビニールハウスの仮設小屋を調査地の脇に建設し調査の拠点とする。

６月20日、遺跡全域の表面清掃と遺構検出を行い、竪穴住居跡１基を新たに検出し、また精査した結果、土坑群は全部で17基であると確定し、竪穴住居跡から発掘作業を始める。調査区の北の方から順次南へ発掘作業と実測を交互に繰り返しつつ調査を進めた。北に高い丘陵地のため、調査区の北半は削平が著しく、調査はハイピッチで進むかに見えたが折からの梅雨が本格化し、急遽、竪穴住居跡の上に鉄パイプとシートで覆い屋を架設して調査を続行する。

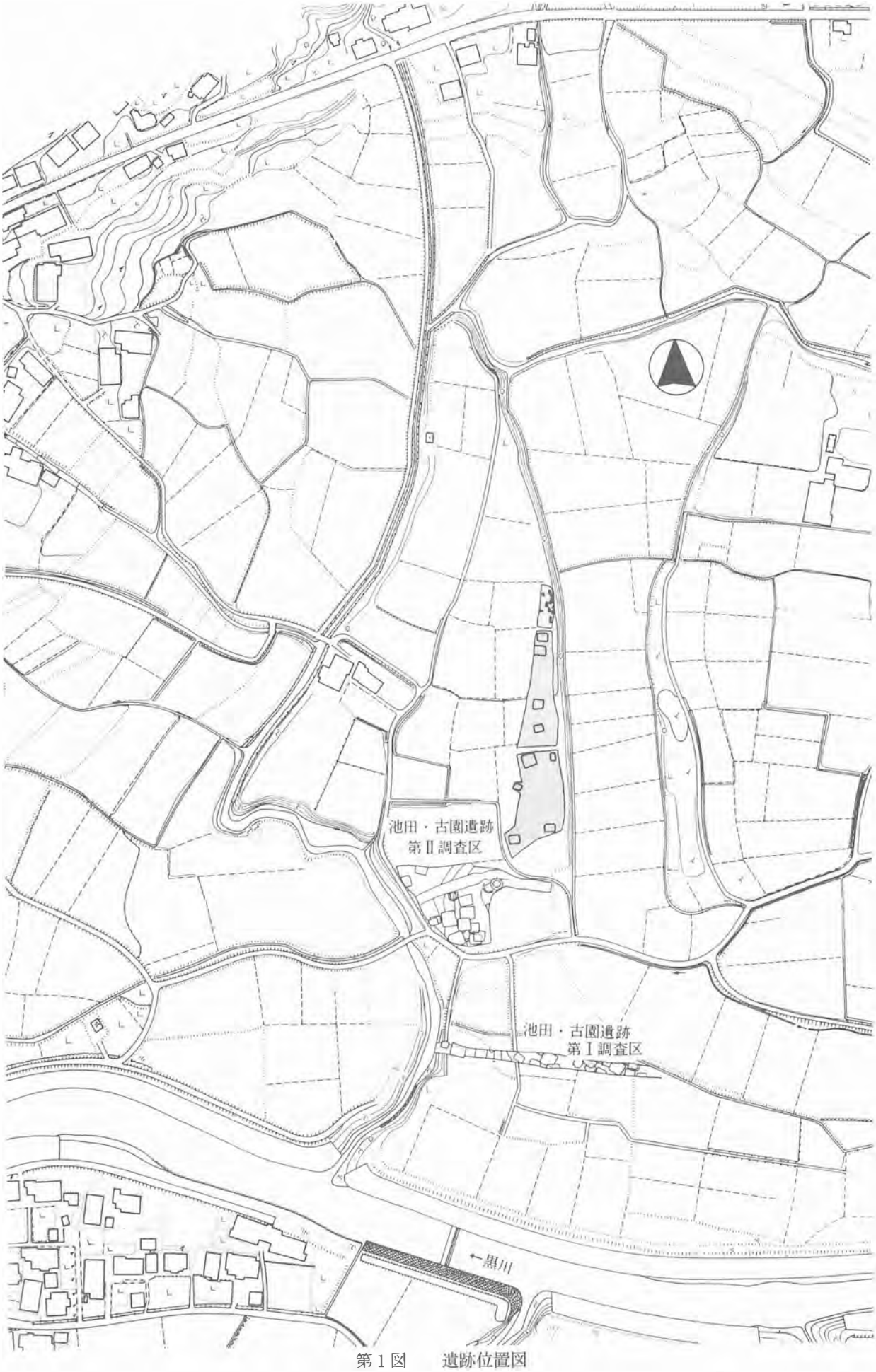
６月25日、梅雨がいよいよ本格化する中で、本遺跡で最大の、鉄製品の工房である６号住居跡の調査に着手する。中層まで発掘したところで焼土やベンガラとは若干色調の異なる藤色の粒子が点々と黒い土に混じりはじめ鉄滓であると判明する。下層から床面まで進むと鉄製品の数が夥しくなり、なんと鉄滓が投棄された姿で壁から床面に伝い落ちた状況である。すぐ隣に鍛冶遺構である大型住居があろうことは狩尾遺跡群の調査の経験から歴然としているのだが残念ながら調査区はここで途切れる。

７月２日、６号住居跡と平行して発掘作業をしていた４号住居跡の炭化した家屋の骨組みが全貌を現す。検出状況ではぼんやりと粉状の炭化物の広がりが放射状に観察されていた。当初、火災住居と思われていたが、主柱に相当する炭化物がなく、しかも柱穴内には炭化物が入っており、廃絶後に良材を予め抜き取った後の焼却とみられることが判明した。建築構造の探究に資するため炭化物は判断できる限り各部材ごとに割竹製の応急容器に収容した。

７月８日、梅雨末期の豪雨が時折襲うなか、土坑群の調査を行う。降雨への構えは十分であったが、遺構の水没の被害はしばしばであった。冠水するほどの豪雨時には、ハウス内に自噴井戸の水を用いて出土遺物の水洗いと整理を行う。

７月17日、雨中、平板にて遺構配置図を制作し全調査を終える。

７月20日、ビニールハウスを解体し資材を撤収する。折しもこの日が梅雨明ける。翌日、打ち明けの小宴を開き調査完了を祝う。



第１図　　遺跡位置図

第Ⅱ章　調査の成果

第１節　遺跡の概要

池田遺跡は、熊本県阿蘇郡阿蘇町大字狩尾字池田に所在する。背後に外輪山が迫る黒川右岸の独立した丘陵地である。標高は474mでわずかに北が高いが上面はほぼ平坦である。

阿蘇外輪山の麓には阿蘇盆地の内壁に沿って形成された小丘陵に弥生時代の遺跡が連なるが、本遺跡も年度に調査された狩尾遺跡群に属する遺跡の一つである。

調査地は丘陵の南東の縁辺部分で、1992年度調査の池田・古園遺跡は丘陵の南麓部分に所在し、ほぼ隣接地である。

次に、今回の調査結果の概要を記す。

調査では弥生時代後期の竪穴住居跡９基を確認し、これに伴う土器型式は一般に野辺田式といわれてきた土器で、「狩尾遺跡群」（1993）で設定した狩尾Ⅲ期に相当する。このうち鉄製品の加工を主体にした鍛冶施設とみられる６号住居跡では多量の鉄製品と鉄滓の広がりを確認した。鉄製品の出土数は、１住居跡としては狩尾遺跡群で群を抜く数である。また４号住居跡では、当時の家屋構造を復元しうる焼却住居跡を検出した。

このほか近世の土壙墓群と思われる土坑を４群で17基検出した。

調査に先立っては、試掘を実施した結果、丘陵地の全体に弥生時代後期の竪穴住居跡が密に分布することが判明しており、今回の調査区は大規模な集落の周縁の一角であろう。試掘では弥生時代後期以外にも奈良・平安時代、中世の遺物も出ており、近世までほぼ連綿と生活の営みがあり、近年の洪水ではこの丘陵だけ島状に水没を免れているように、ここが自然の嘉した良好な地であることがわかる。

第２節　遺構と遺物

１．竪穴住居跡と遺物

１号住居跡（第４図）

調査区の北端にある住居跡である。平面形態は長方形をなし、主軸の方向はＮ－37°－Ｗを測る。長軸方向は5.66m、短軸方向は4.80mである。壁高は良好な部分で11cmで削平が著しい。主柱穴は２本であり、住居跡の中央より南東壁に偏して長円形の炉を有し、その規模は93cm×84cm、深さは13cmである。

炉の周囲は盛り上がりその壁は硬化している。炉内の埋土は下層以下に厚さ約５cmの草本類の炭化物を充たす。ベッド状遺構は南西壁、北隅および南隅に設けに設け、床面との比高差は概ね８cmをなすが北隅のベッドは上面をやや削平されている。南東壁の中央に接し、入口施設とみられる不整形の浅い掘り込みがあり、内に２カ所の小柱穴を穿つ。

床面には北隅のベッド近くにベンガラの付着部分がある。また北西壁近くに台石１点（４）を遺存するが背面にはわずかにベンガラが付着する。

このほかの遺物は、安山岩製の磨石（３）および鉈とみられる鉄製品１点（２）が出土した。

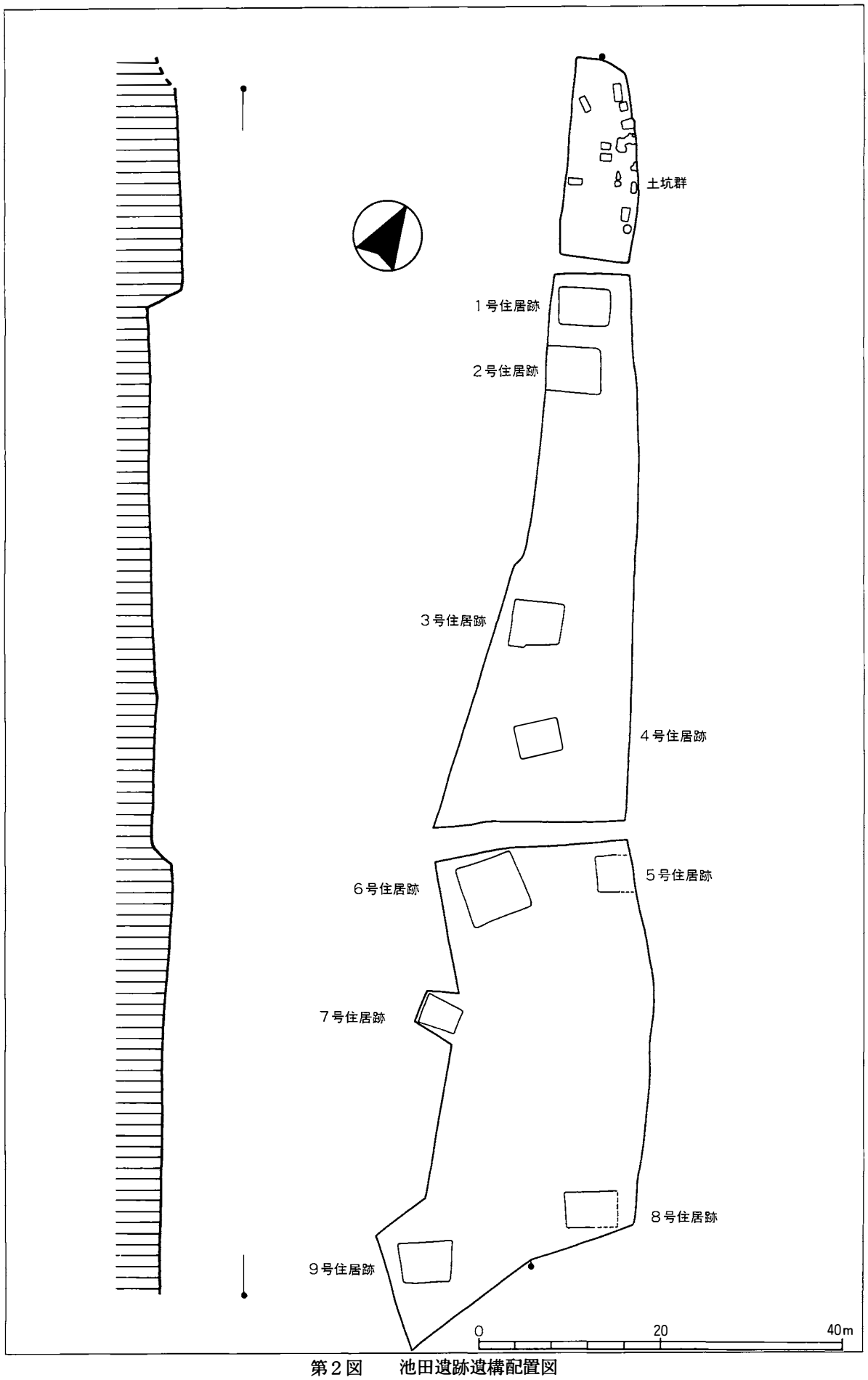
【土器】（第４図）

１は、胴部下位を欠く甕形土器である。口縁部は、内面に稜線をなしつつ胴部より「く」の字に屈曲し、外反して開き、口縁端部は平坦である。外面はタタキを下地にしたハケ目調整、内面はやや細かいハケ目調整を施す。

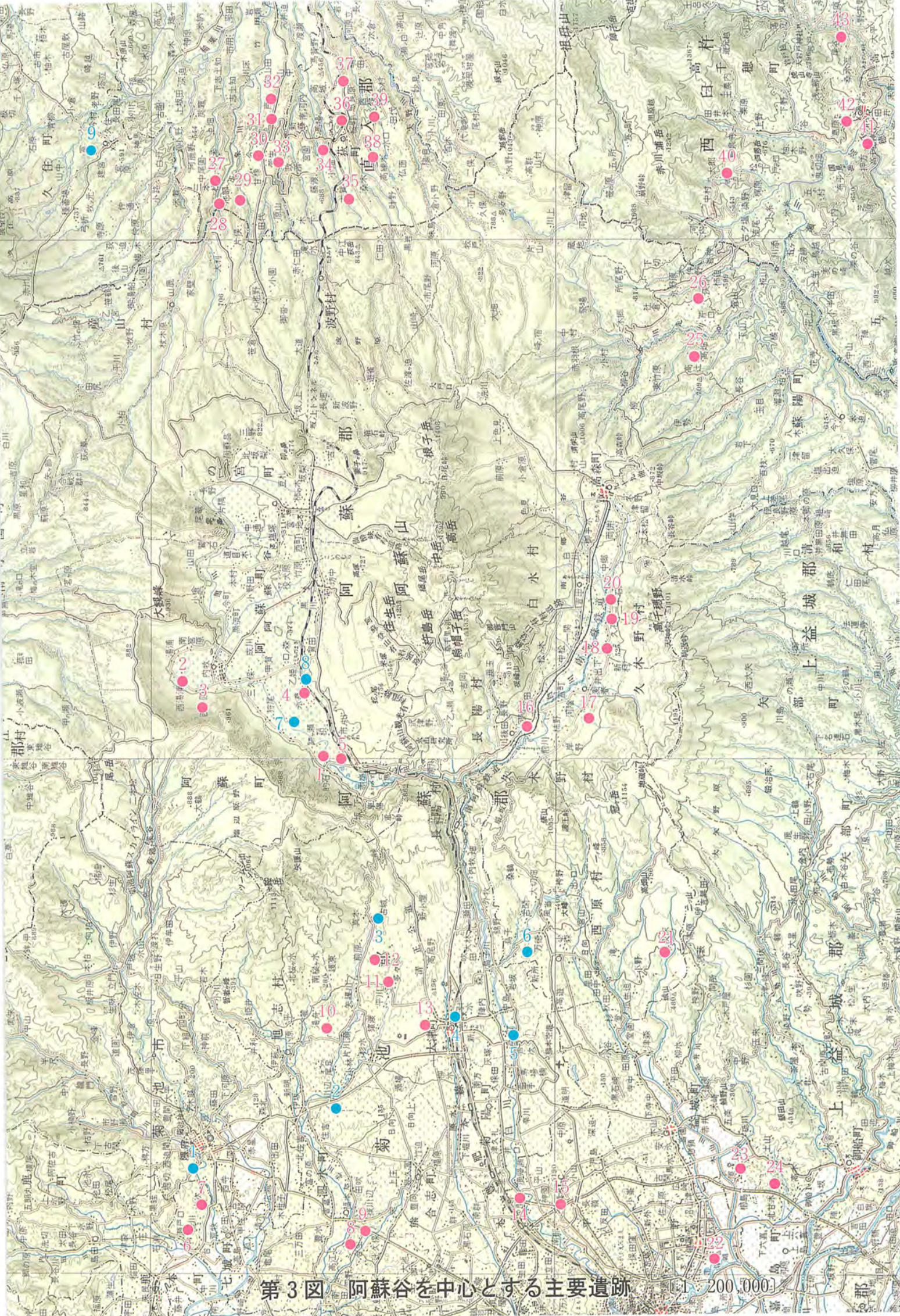
２号住居跡（第６図）

住居跡の西端は調査区外である。削平が著しく床面から削られ、辛うじて残存する壁溝から平面形態が長方形であるとみられる。主軸の方向はＮ－30°－Ｗを測る。長軸方向は残存5.90m、短軸方向は5.12mである。

主柱穴は４本であり、このうち北壁に平行する２柱穴の脇にはそれぞれ建て替えの柱穴あるいは副柱



第2図　池田遺跡遺構配置図



第3図　阿蘇谷を中心とする主要遺跡

第２表　阿蘇谷を中心とする主要遺跡地名表

阿蘇谷を中心とする主要弥生時代関係の遺跡

〔調査遺跡〕

1　狩尾　（熊本県阿蘇郡）
2　陣内　（　〃　　〃　）
3　前田　（　〃　　〃　）
4　下山西　（　〃　　〃　）
5　宮山　（　〃　　〃　）
6　うてな　（　〃　七城町）
7　岡田　（　〃　　〃　）
8　八反田　（　〃西合志町）
9　高木原　（　〃　　〃　）
10　無田　（　〃　大津町）
11　水の山　（　〃　　〃　）
12　日向　（　〃　　〃　）
13　西弥護　（　〃　　〃　）
14　梅ノ木　（　〃　菊陽町）
15　石原・亀甲　〃　熊本市）
16　陽丘　（　〃　長陽村）
17　原口　（　〃　久木野村）
18　柏木谷　（　〃　　〃　）
19　東一丁目　（　〃　　〃　）
20　西　（　〃　　〃　）
21　谷頭　（　〃　西原村）
22　神水　（　〃　熊本市）
23　秋永　（熊本県益城町）
24　二子塚　（　〃　嘉島町）
25　高畑　（　〃　蘇陽町）
26　椎屋　（　〃　　〃　）
27　上畑　（大分県竹田市）
28　内河野　（　〃　　〃　）
29　池田　（　〃　　〃　）
30　ネギノ　（　〃　　〃　）
31　石井入　（　〃　　〃　）
32　小園　（　〃　　〃　）
33　平井　（　〃　　〃　）
34　政所西　（　〃　　〃　）
35　古賀　（　〃　　〃　）
36　谷尻原　（　〃　　〃　）
37　恵良　（　〃　　〃　）
38　中山　（　〃　　〃　）
39　北原　（　〃　　〃　）
40　薄糸平　（　〃　　〃　）
41　押方Ｃ　（　〃　　〃　）
42　宮の前第２（　〃　　〃　）
43　梅ノ木原　（　〃　　〃　）

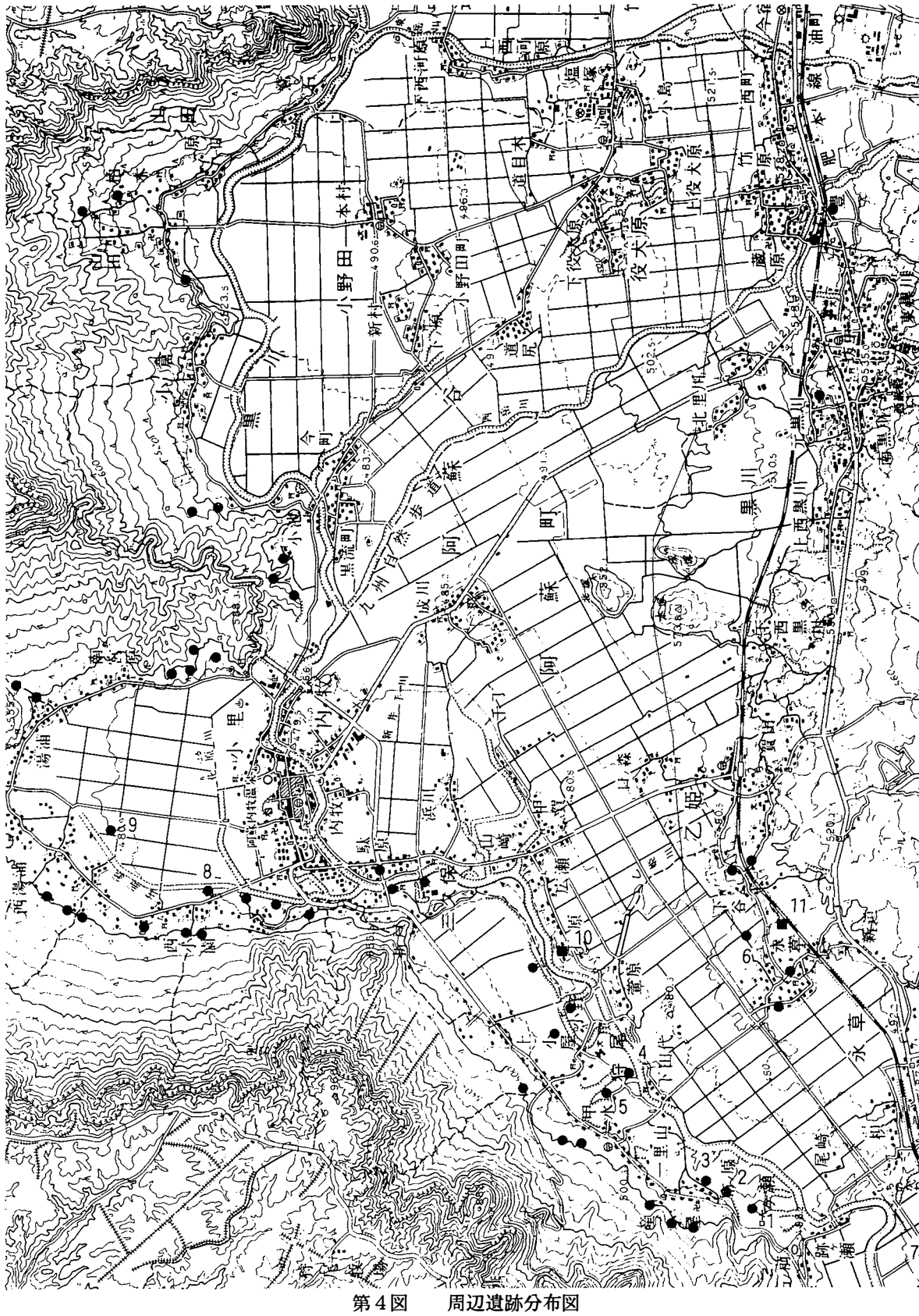
〔武器形祭器〕

1　玉祥時寺　（熊本県菊池市）中細矛
2　西原　（　〃　旭志村）中宏矛
3　西津留　（　〃　大津町）中細戈２
4　大山内　（　〃　　〃　）中細戈２
5　二百　（　〃　　〃　）広矛１
6　伝鳥子神社（　〃　西原村）中宏矛
7　北請　（　〃　阿蘇村）中宏矛
8　鏡山　（　〃　　〃　）中広戈１
9　鉾ノ木　（　〃　久住村）中広戈３

（周辺遺跡分布）

1　狩尾・
2　狩尾・方無田　〃　）
3　狩尾・前田　（　〃　）
4　古園　（　〃　）
5　池田　（　〃　）
6　下山西　（　〃　）
7　宮山　（集落遺跡）
8　前田　（　〃　）
9　陣内　（　〃　）
10　北請　（武器形祭器出土遺跡）
11　鏡山　（　〃　　〃　）

穴が穿たれている。住居跡の中央より南壁に偏して長方形の炉を有し、その規模は115cm×68cm、残存する深さは７cmである。炉内の埋土は底面に木炭片が数点あるが下層以上には石が数点落ち込み廃絶後の投げ込みの状況である。ベッド状遺構は削平のため明らかでない。南壁の中央からやや東よりに、入口施設とみられる不整形の浅い掘り込みがあり、内部は若干の起伏がある。遺物は炉内の出土物のみで



第４図　　周辺遺跡分布図

ある。

３号住居跡（第７図）

平面形態は一部に突出部を有する長方形をなし、主軸の方向はＮ－25°－Ｗを測る。長軸方向は5.81ｍ、短軸方向は4.69ｍ、壁高は良好な部分で18㎝である。主柱穴は２本であり、住居跡中央より南壁に偏して長方形の炉を有し、その規模は96㎝×80㎝、深さは５㎝である。炉内の埋土は下層以下に若干の炭化混じり土を有する。

ベッド状遺構は北西、南東隅に設け、床面との比高差は概ね８㎝をなす。このほか南西隅から入口施設あたりにかけて奥行き60㎝の突出部があり、突出部内およびその前面に張り出してベッド状遺構を設ける。南壁の中央に接し、入口施設とみられる浅い掘り込みがあり、同壁に平行して内に３カ所の小柱穴を穿つ。また西壁ぎわ中央に不整形の掘り込みがある。

住居跡の床面には、北壁ぎわに台石を遺存し、また床面から下層にかけて炭化物混じりの土層があり住居跡の中央あたりには形状を留める炭化物と焼けた土塊が出土した。このほかの遺物は土器、鉄製品および微粉状の鉄滓である。

鉄製品は２点（９、10）とも有茎の鉄鏃で、前者は柳葉式、後者は圭頭斧箭式である。

【土器】（第７図）

５は、直口する口縁を有する壷形土器である。丸底の底部をなし、胴部はかなり高い位置に最大径をなし、わずかに外傾し直線状に立ち上がり、やや長めの口縁を有する。外面は口縁部に縦方向のハケメを有するが、胴部は平滑にナデられ下位には若干の削りが見られる。

６は、口縁部のみの複合口縁を有する壷形土器である。頸部から外反して開き口縁部をなし、端部にかけて断面は三角形をなし先端は尖る。内外面は丁寧にナデを施し器面は平滑化されている。頸部外面には櫛描きした平行文の一部が残り、その下位には流水文が配されたと思われる。８は、口縁部のみの複合口縁を有する壷形土器の小破片である。頸部から外反して開き、口縁の断面は三角形をなしやや突出した外面の稜線上に刻目文を施す。内外面は丁寧にナデる。

７は、長頸の壷形土器である。偏平な丸底の胴部をなし、最大径は胴部中位やや下に置く。さらに長頸を有する口縁部は胴部よりわずかに外傾して直立する。器壁は概して薄く、精製した胎土にて丁寧に仕上げる。外面は口縁部を縦方向に稠密に磨き、胴部はハケメを施すが大半をナデにて仕上げる。内面はナデである。

４号住居跡（第８図）

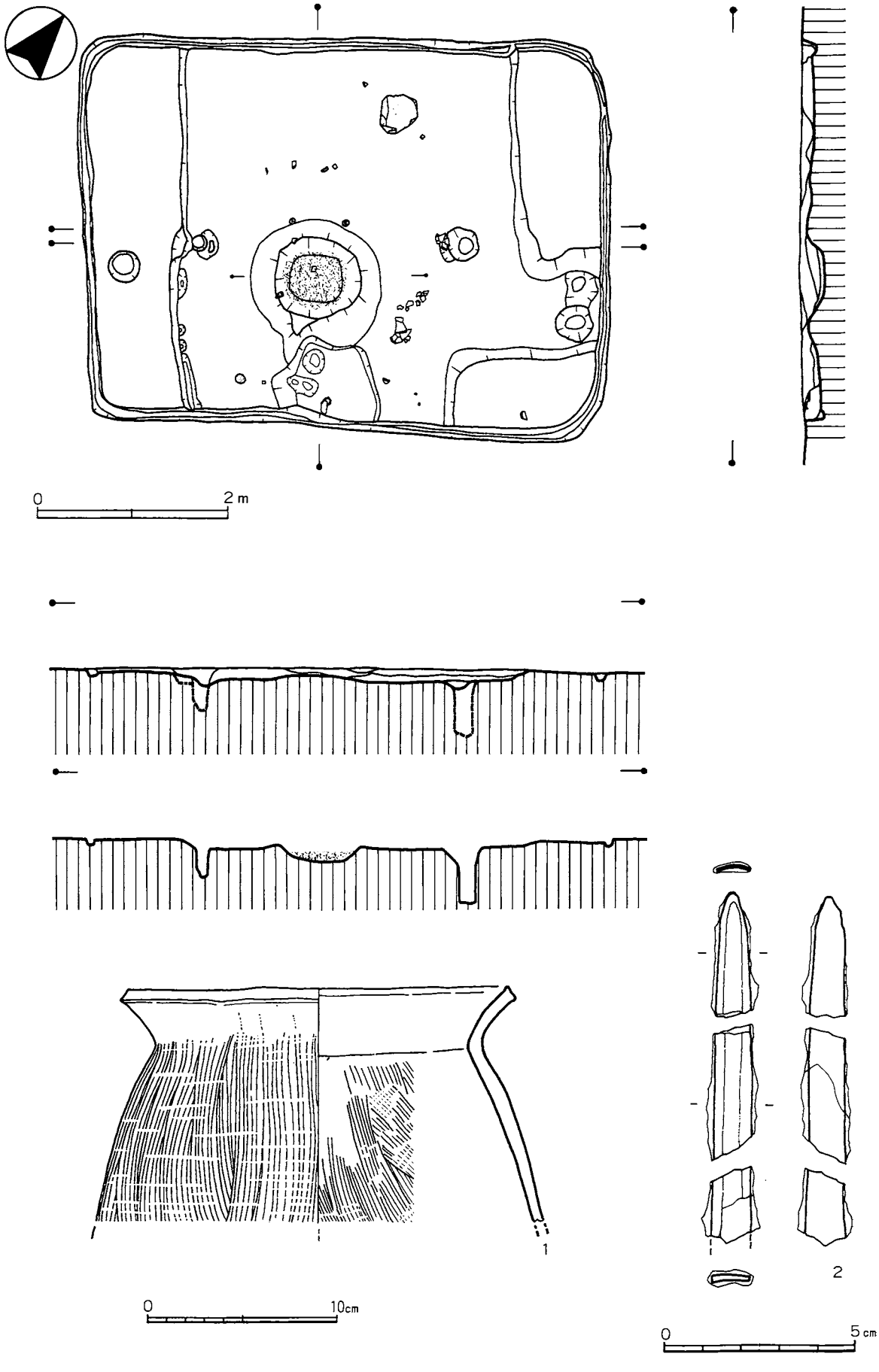
廃絶後の焼却がなされた住居跡で、夥しい炭化物が床面に分布する。

平面形態は隅丸の長方形をなし、主軸の方向はＮ－44°－Ｗを測る。長軸方向は5.52ｍ、短軸方向は4.00ｍ、壁高は良好な部分で14㎝である。主柱穴は２本であり、住居跡の中央より南東壁に偏して円形の炉を有し、その規模は80㎝×81㎝、炉の周囲はやや盛り上がりがみられ、深さは25㎝である。炉内の埋土は３層に分けられ下層は地山と似た締まりのない土、中層は粉状の炭化物、上層は住居跡の床面のものと同じ炭化物である。下層以下に炭化物を充たす。

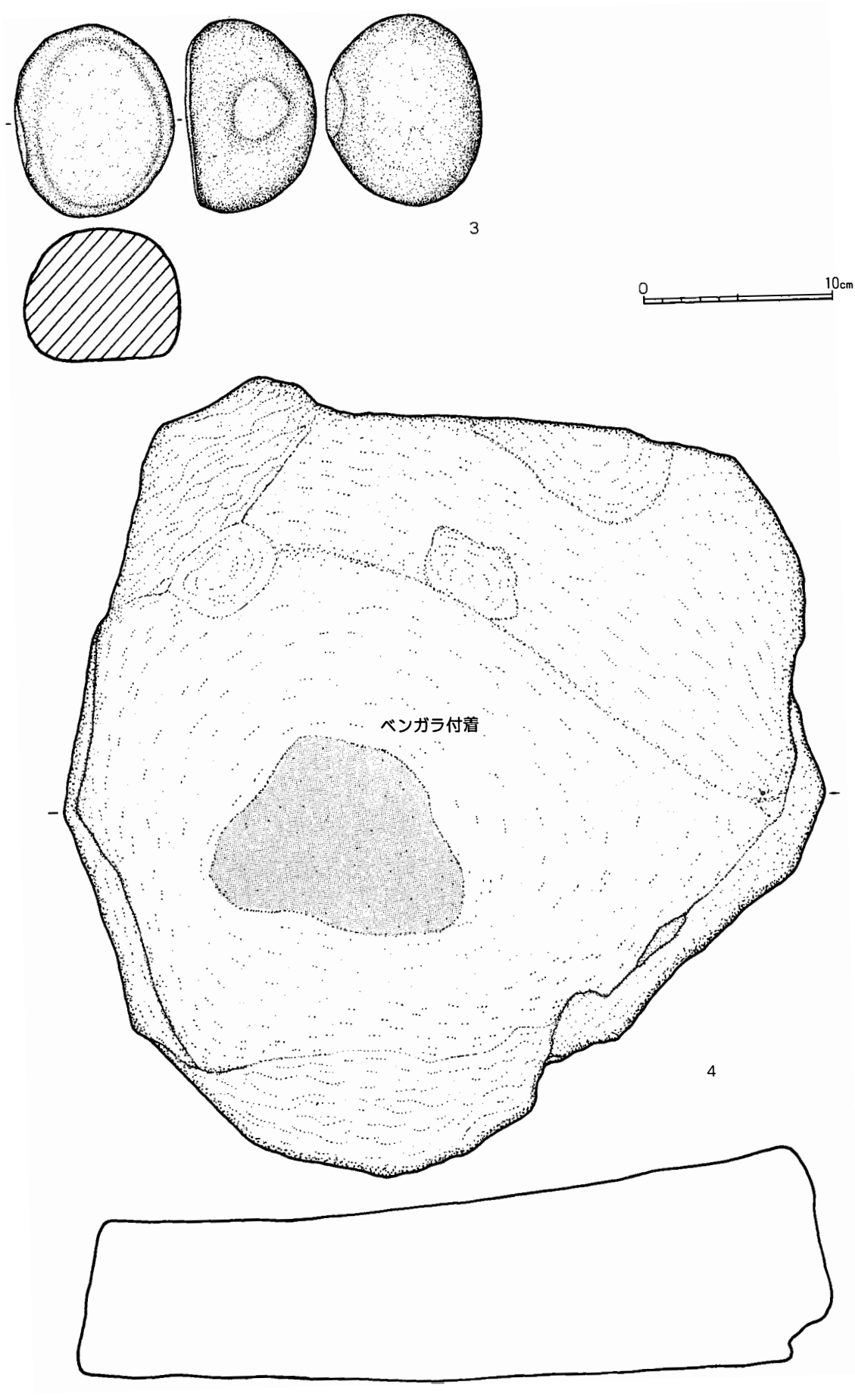
ベッド状遺構は西、北隅に設け、床面との比高差は概ね８㎝をなす。このほか南隅に撤去された同遺構の痕跡がある。いずれも、矢板状のもので囲みベッド状遺構を築いたものとみられ周囲に溝が残る。南東壁の中央に接しては、入口施設とみられる浅い掘り込みがあり、同壁に平行して炉との間に一対の小柱穴を穿つ。

床面には６カ所にベンガラの付着がみられる。また鉄滓の小塊および微細な粉末がみられる。台石は北東壁の近くに遺存するが表面が火を受け著しく剥離している。このほかの遺物は脚部だけの甕形土器の破片があり、いかにも廃絶後の投げ込みの様相である。

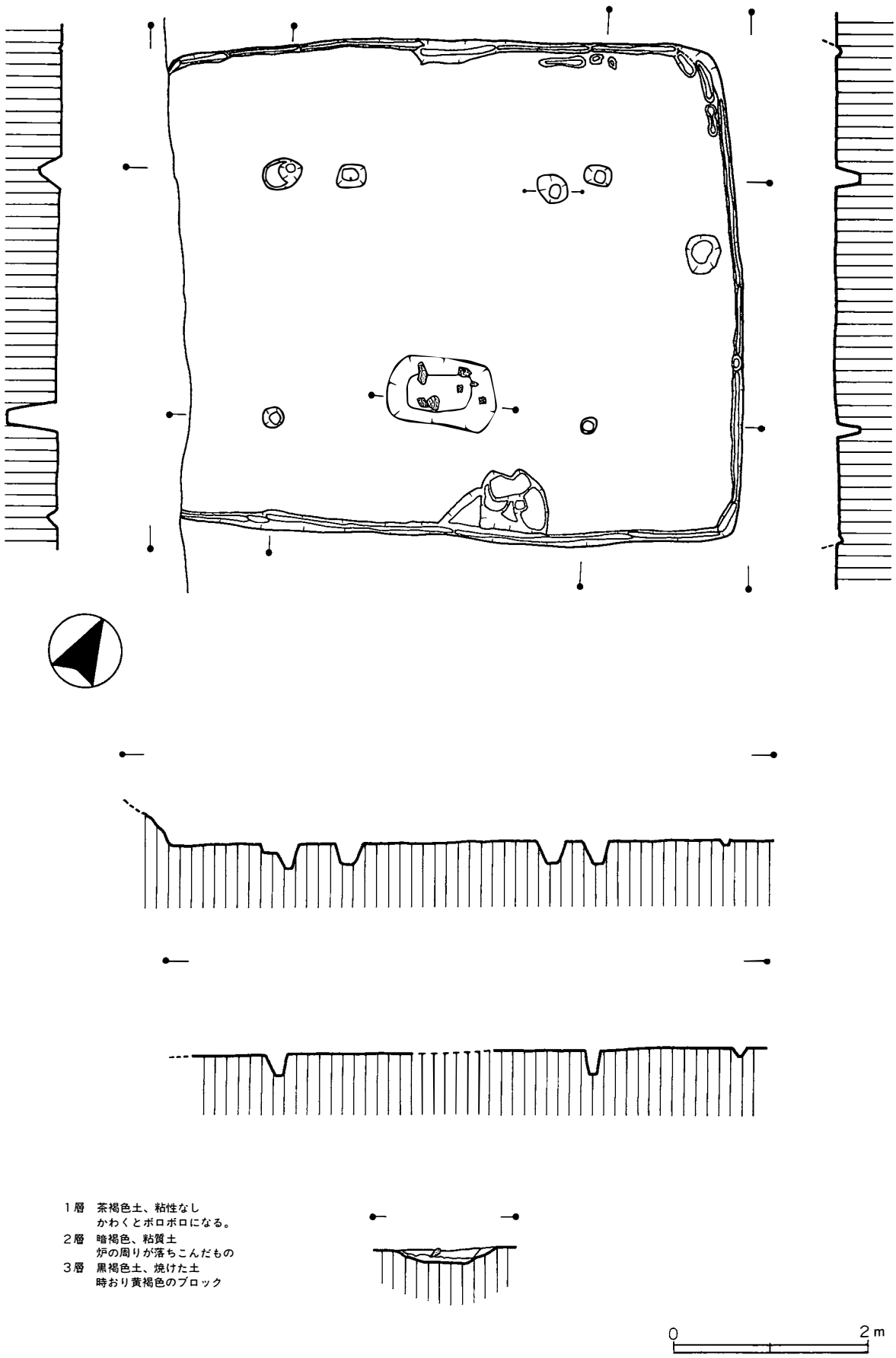
床面の炭化物は、約40本の炭化木材が２柱穴を中心に放射状に分布し、これらに直交して細い炭化木材を散見する。主柱穴に相当する材は見当たらず、また柱穴内の埋土は著しく炭化物を含むことから柱を抜き取ったあと焼却したとみられる。



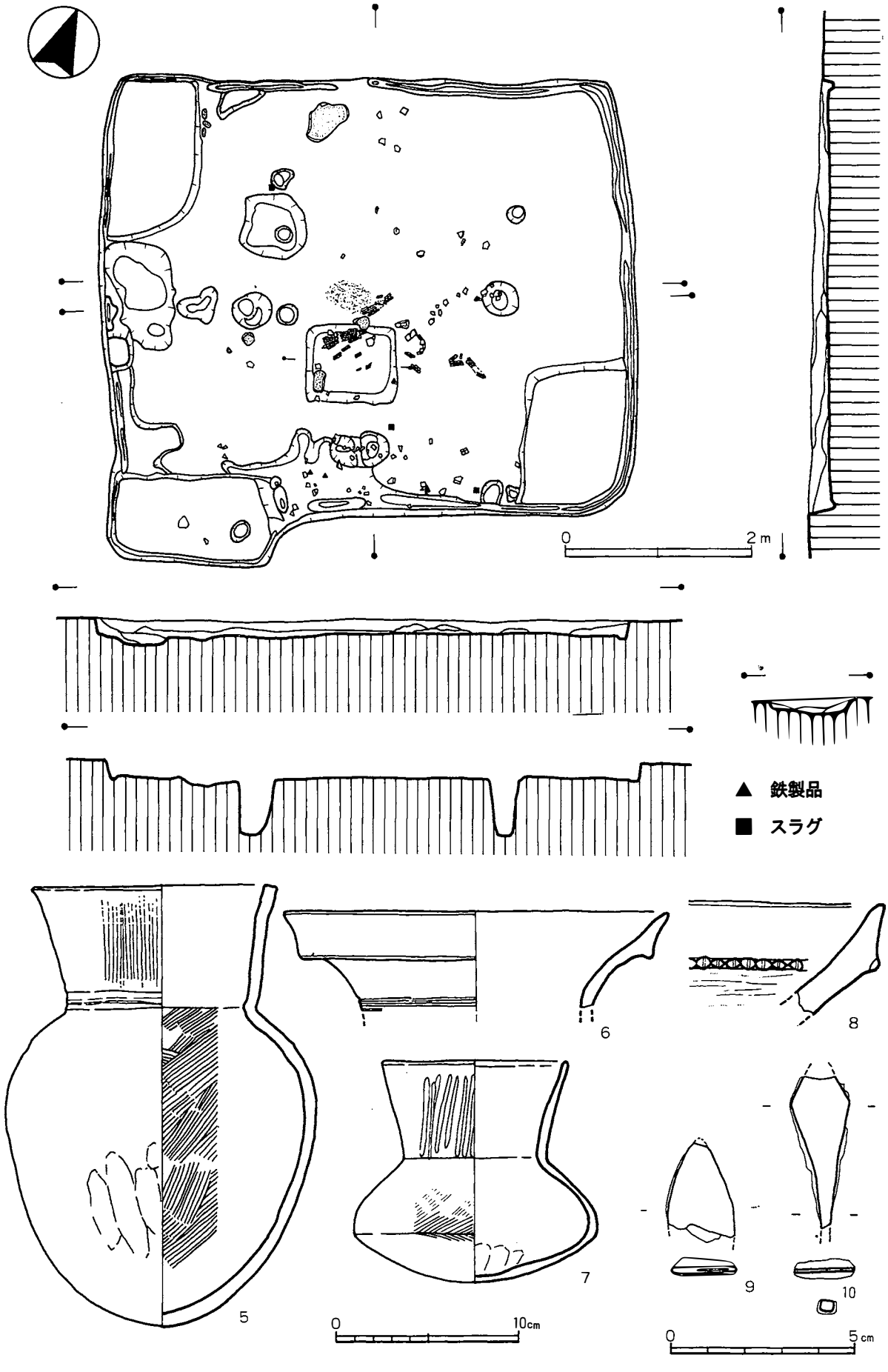
第５図　　１号住居跡



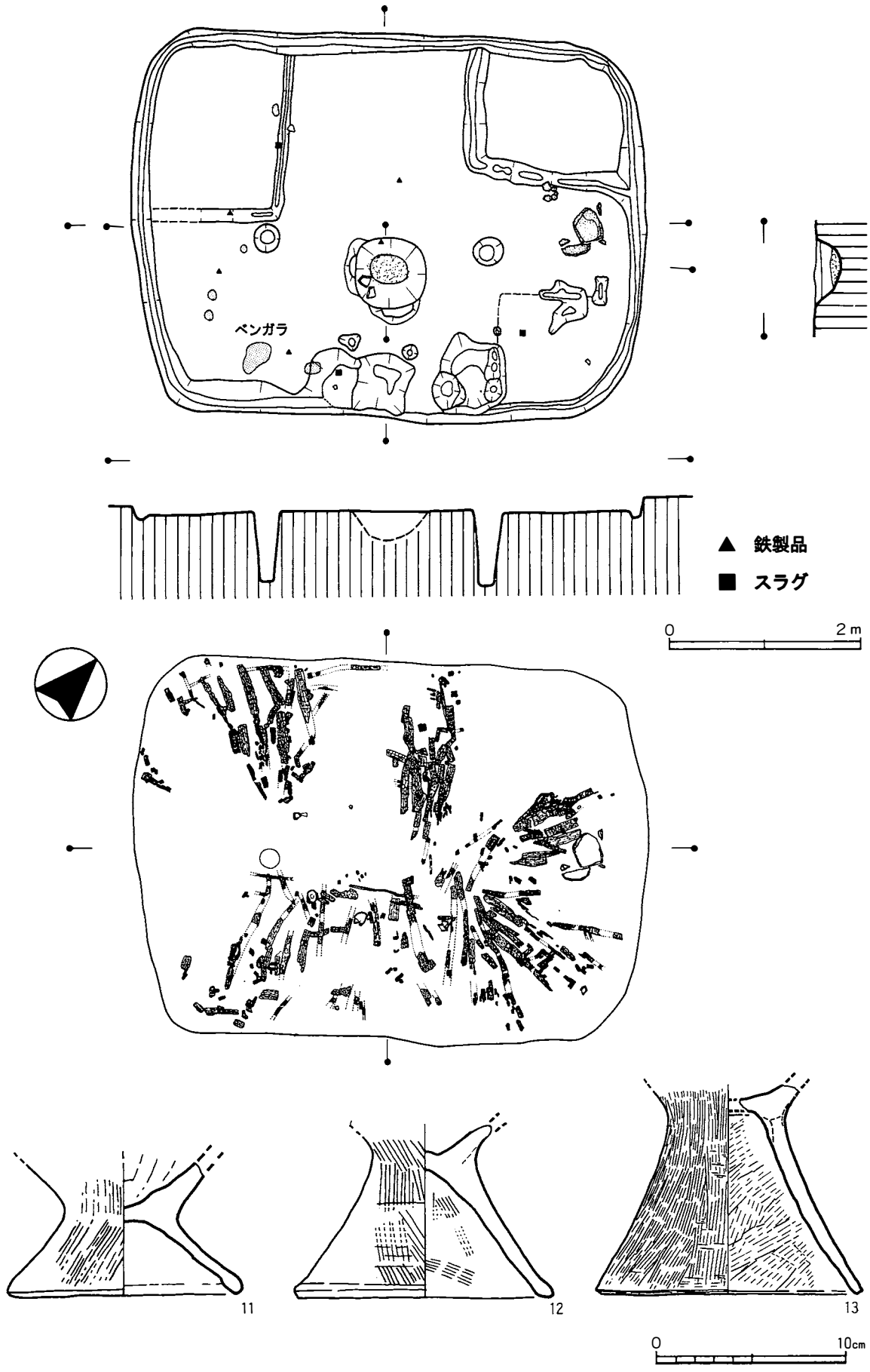
第6図　　1号住居跡出土遺物


1層　茶褐色土、粘性なし
かわくとボロボロになる。
2層　暗褐色、粘質土
炉の周りが落ちこんだもの
3層　黒褐色土、焼けた土
時おり黄褐色のブロック
0
2m

第７図　　２号住居跡



第８図　　３号住居跡実測図



第９図　　４号住居跡実測図

【土器】（第８図）

11～13は、甕形土器の脚台部のみの資料であるが相互にやや時期差があるとみられる。11は、低い脚台部を有し、古いタイプである。13は、裾にかけて外反しつつ高く伸びる脚台部を有し、内外面は稠密なハケメを施す。

５号住居跡（第９図）

東がわ半分を撹乱で失い、また著しく削平を受け残りが悪い住居跡である。平面形態は長方形をなし、主軸の方向はＮ－60°－Ｗを測る。残存する長軸方向は2.32m、短軸方向は4.04m、壁高は良好な部分で２㎝である。主柱穴は２本とみられるが１本が残存する。住居跡の中央より南壁に偏して楕円形の炉を有し、その規模は６㎝×６㎝、深さは17㎝である。炉内の埋土は下層以下に炭化物を充たす。

ベッド状遺構は西隅に１カ所を確認し、床面との比高差は概ね４㎝をなす。南東壁の中央に接し、入口施設とみられる浅い不整形の掘り込みがあるが撹乱により全貌は不明である。

出土遺物は若干の土器片と有茎の鉄鏃である。

鉄製品は、有茎の鉄鏃（16）であるが他の鉄片が錆着している。

【土器】（第９図）

14は、胴部下半を欠く鉢形土器の資料である。偏平な丸底の胴部が想定される。胴部最大径より内傾を強め頸部に到りて「く」の字に強く外反し直線状に開く。外面は細かいハケメのあと大半をナデ消し、内面はナデを施す。丁寧な仕上げである。

15は、甕形土器の破片である。胴部上半から「く」の字に屈曲する頸部までの資料である。屈曲部位は、外面では鈍く長胴化した甕形土器の特徴を有する。内面には明瞭な稜線を残す。外面の調整は著しいタタキ痕を残し、さらに上にハケメを施す。内面の調整は疎らなハケメを施す。

６号住居跡（第10図）

本遺跡で最大の住居跡で、床面からかなりの鉄製品を出土し鍛冶操業の可能性のある遺構である。

平面形態は正方形をなし、主軸の方向はＮ－51°－Ｗを測る。長軸方向は7.05m、短軸方向は6.68m、壁高は良好な部分で51㎝である。主柱穴は４本であり、住居跡の中央より南東壁に偏して炉を有し、その形状は周囲が円形に盛り上がり内に長方形に深く掘り込まれた炉穴である。その規模は116㎝×110㎝、深さは29㎝である。炉内の埋土は深く掘り込みれた下層以下に軟質の炭化物を多く含む。ベッド状遺構は４隅に設け、床面との比高差は概ね10㎝をなす。南東壁の中央に接し、入口施設とみられる浅い掘り込みがあり、同壁に平行して内に一対の小柱穴を穿つ。

床面には６カ所にベンガラの付着があり、また２カ所に粘土塊の高まりがみられる。本住居跡の注目すべき点は大量の鉄製品の出土で42点を数え狩尾遺跡群の遺跡の中では最大である。堅固な炉の状況と併せてこの住居跡が鍛冶施設であることを示している。住居跡の南隅には中層から下層にかけて多量の鉄滓が投げ込まれ、すぐ近くに別の鍛冶施設が存在するとみられる。

出土遺物は土器、石製品、鉄製品のほかに床面に屋根押さえとみられる柱状に割られた石材があるが１点を除き小片に割れている。

石製品では、砥石（28）、台石（34）、磨石（29～33）が出土した。

【土器】（第11～12図）

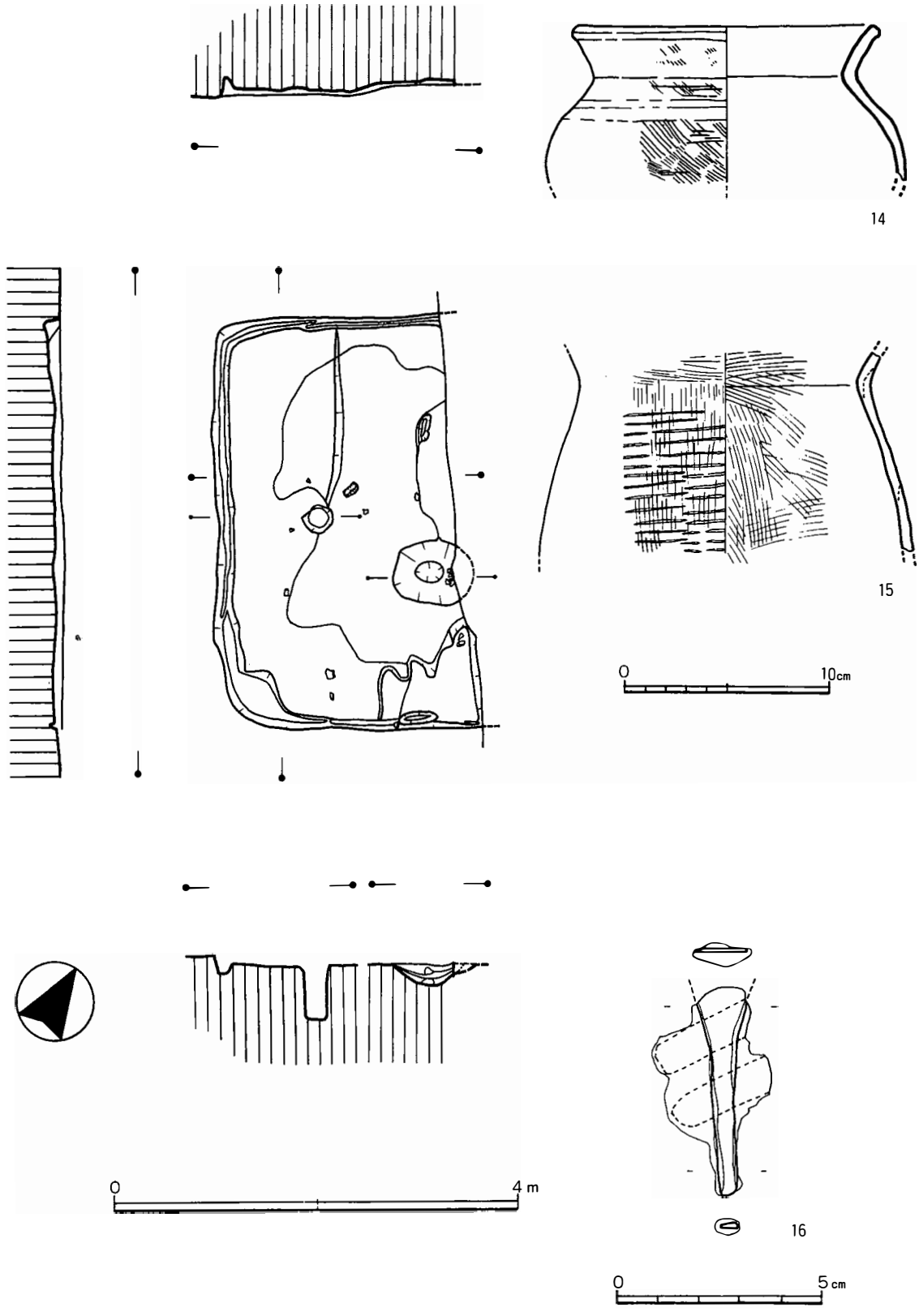
17は、壷形土器である。倒卵形の胴部を呈し、頸部にて外反し、水平位に到りて開き口縁をなす。外面の調整は、全面にハケメを施したあと頸部に櫛描の平行文と流水文を描く。内面はナデで仕上げる。

18は、鉢形土器の胴部のみの資料である。下膨れの球形をなす。外面はハケメを施し、内面はナデにて平滑化し若干の指頭圧痕を残す。

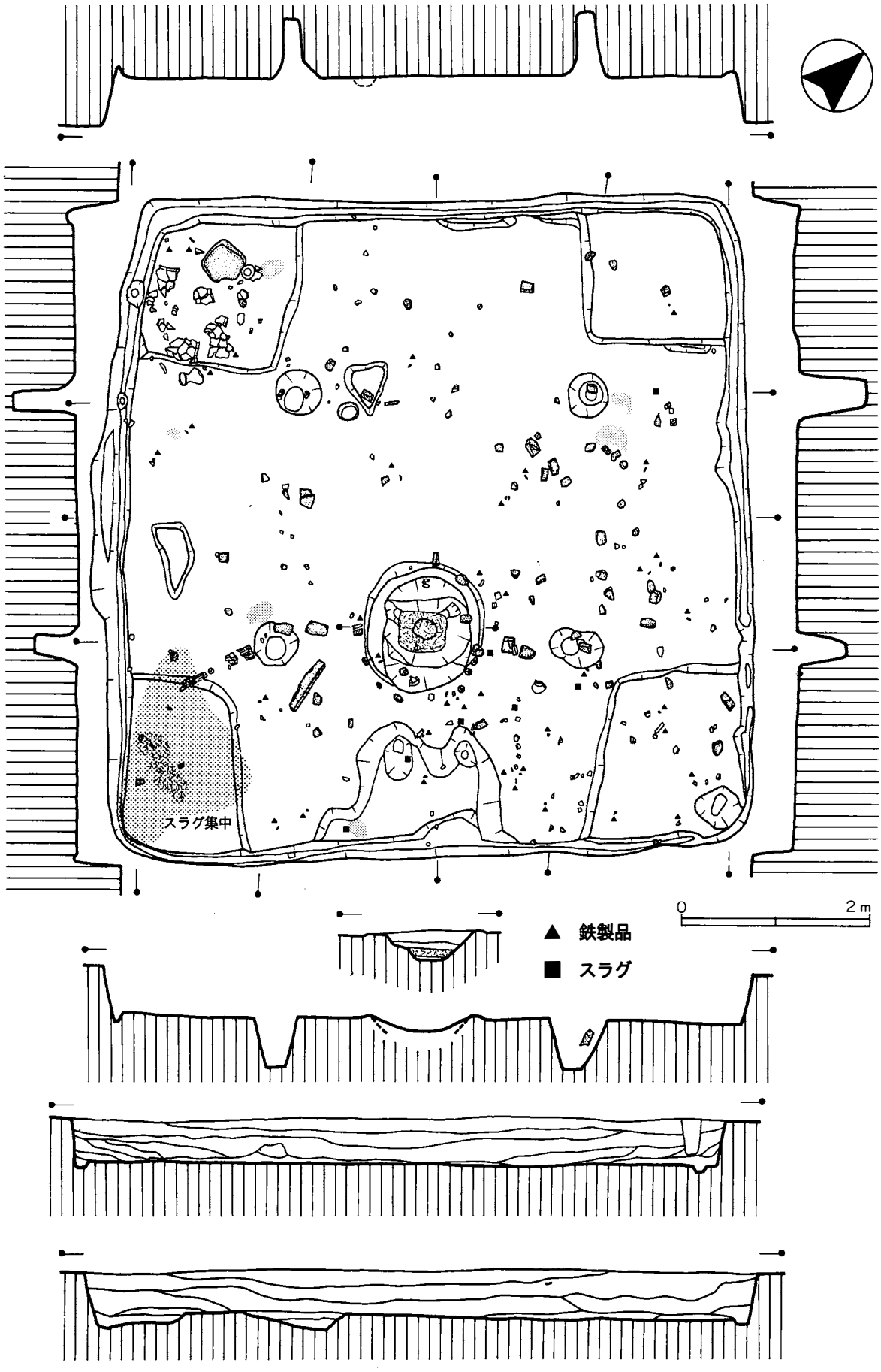
19は、高杯形土器の脚台部の破片である。外面にわずかにハケメを半ば撫で消した調整が認められる。内面には成形の際の荒い削り痕が残る。

20～26は、有脚の甕形土器である。

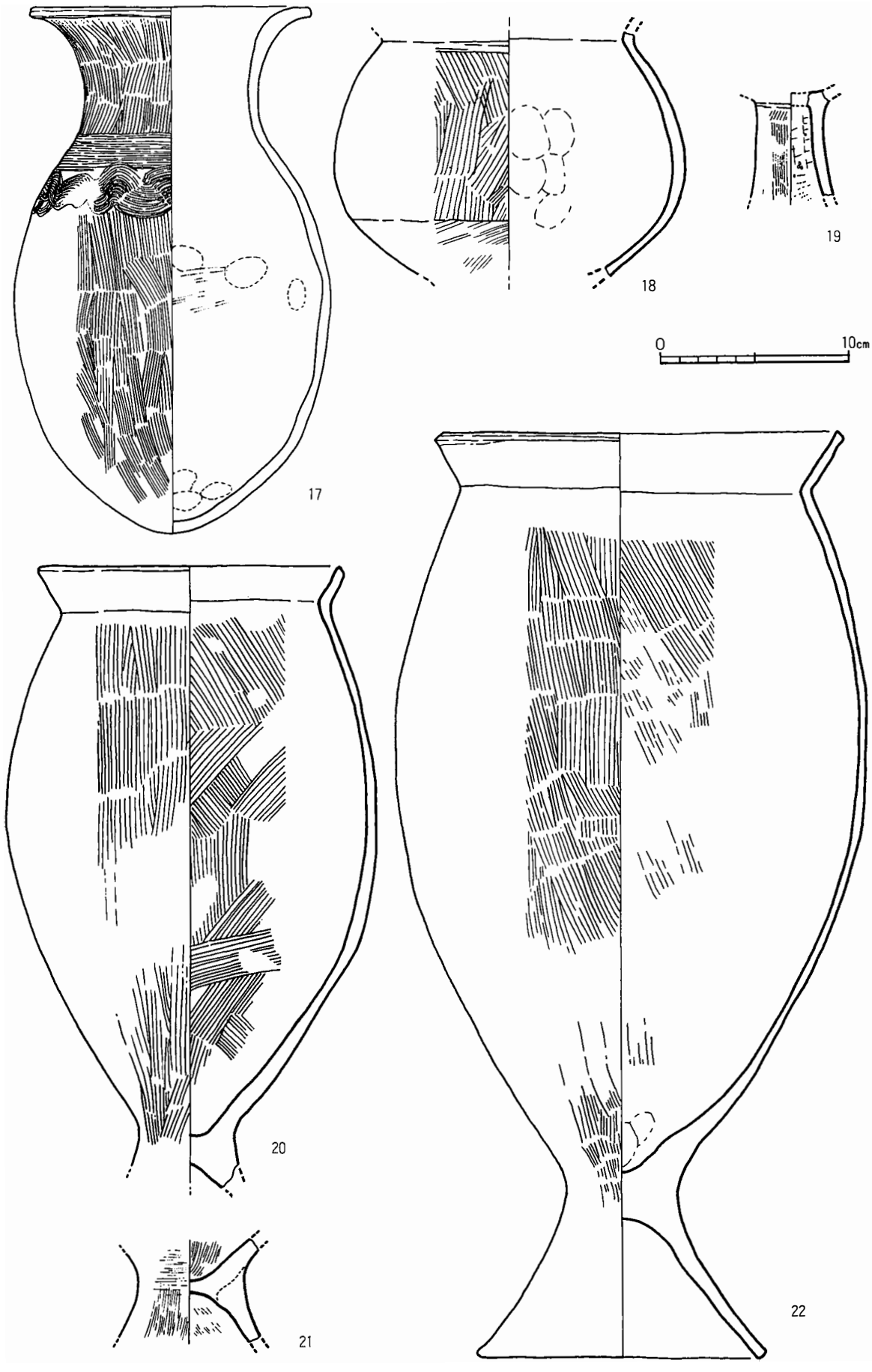
22は、わずかに外反を呈する高い脚台部を有し、胴部は中央位よりやや高い位置に最大径を置き、口縁部は内外面に明瞭な稜線をなして、「く」の字に屈曲し、直線状に開き、端部はわずかにつまみ上げの技法がみられる。器壁は概して薄い。内外面はハケメ調整で仕上げる。20は、脚台部のほとんどを欠



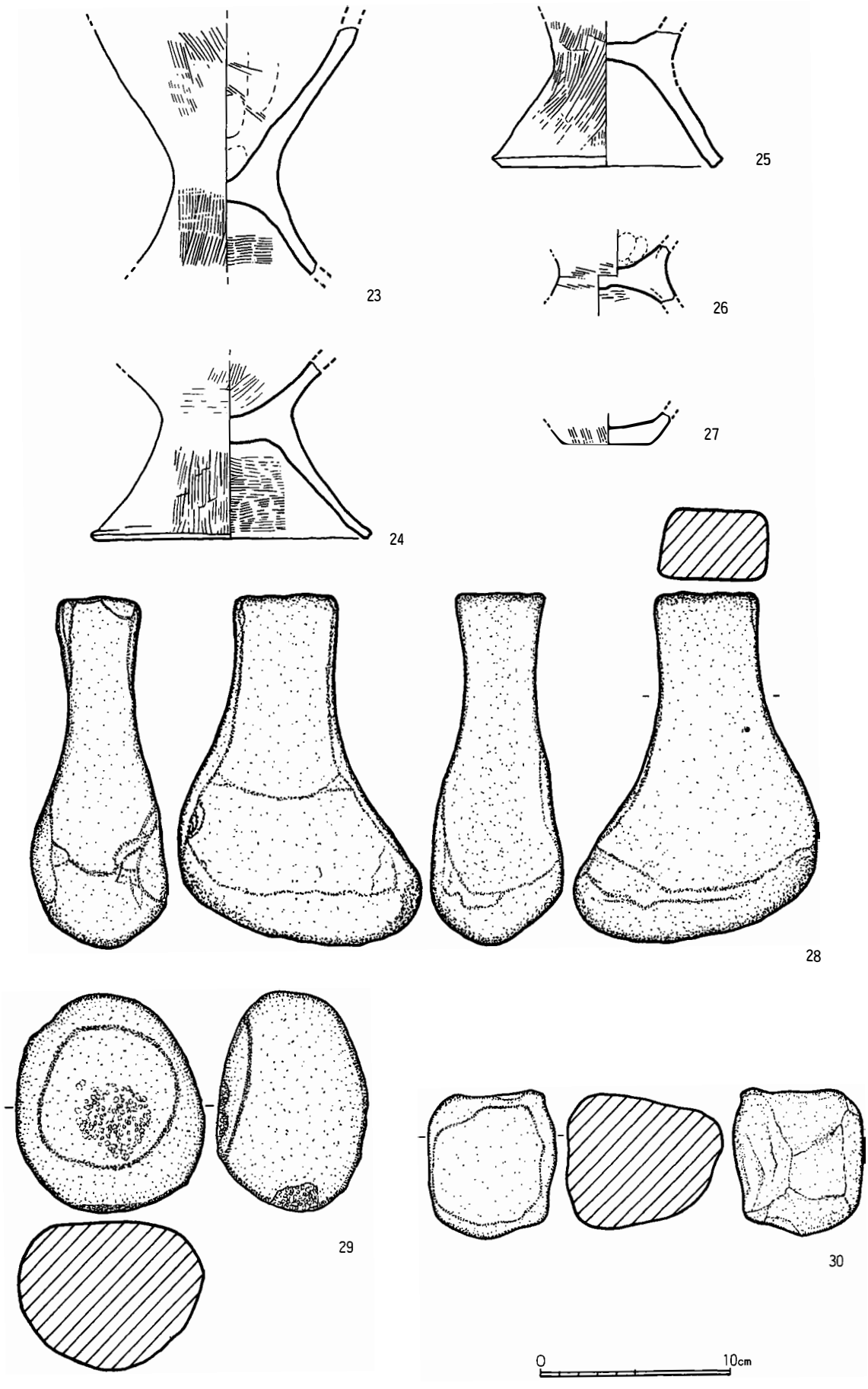
第10図　　5号住居跡実測図



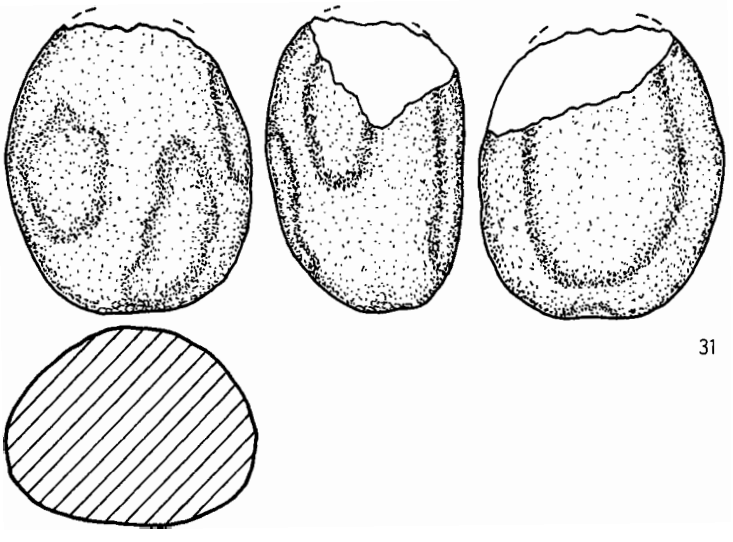
第11図　　6号住居跡実測図

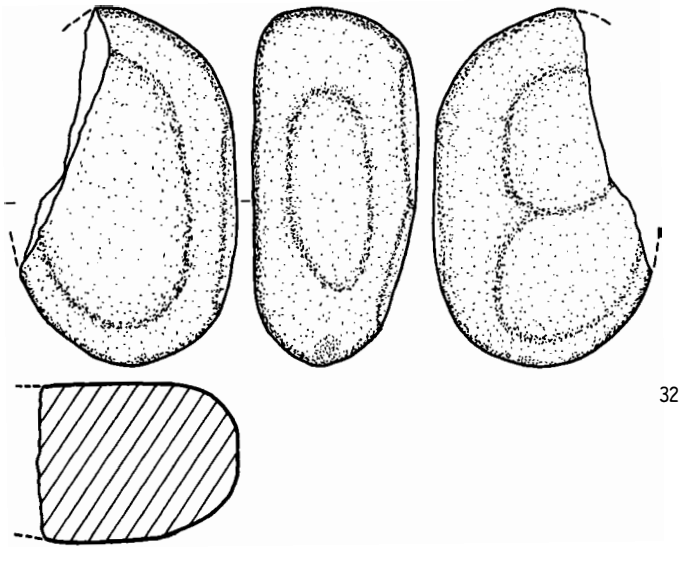


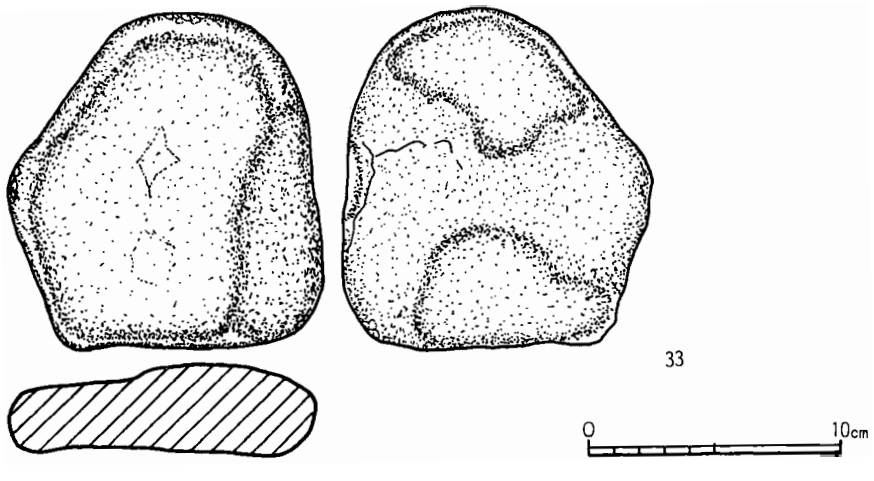
第12図　　6号住居跡出土遺物



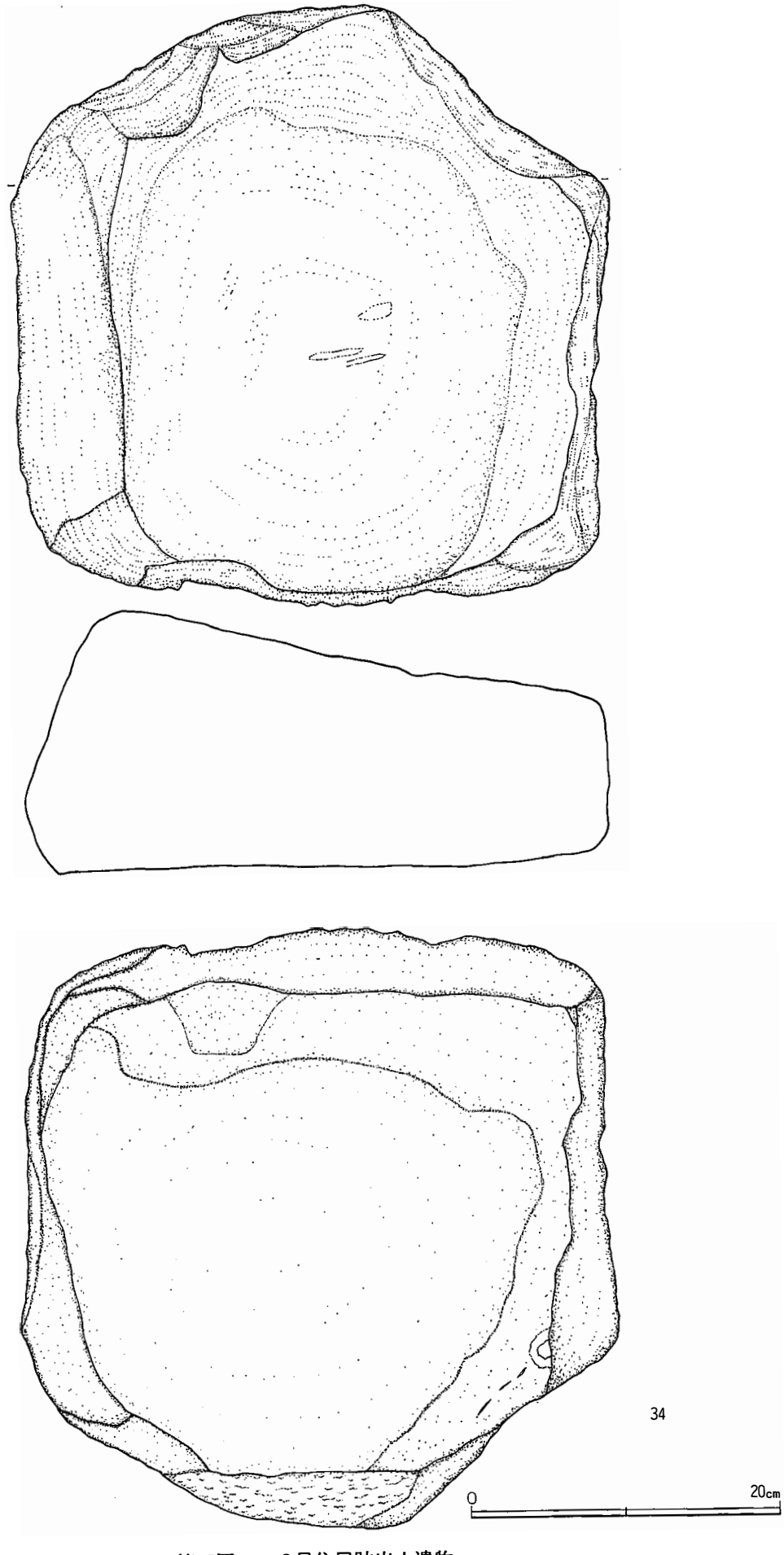
第13図　　6号住居跡出土遺物



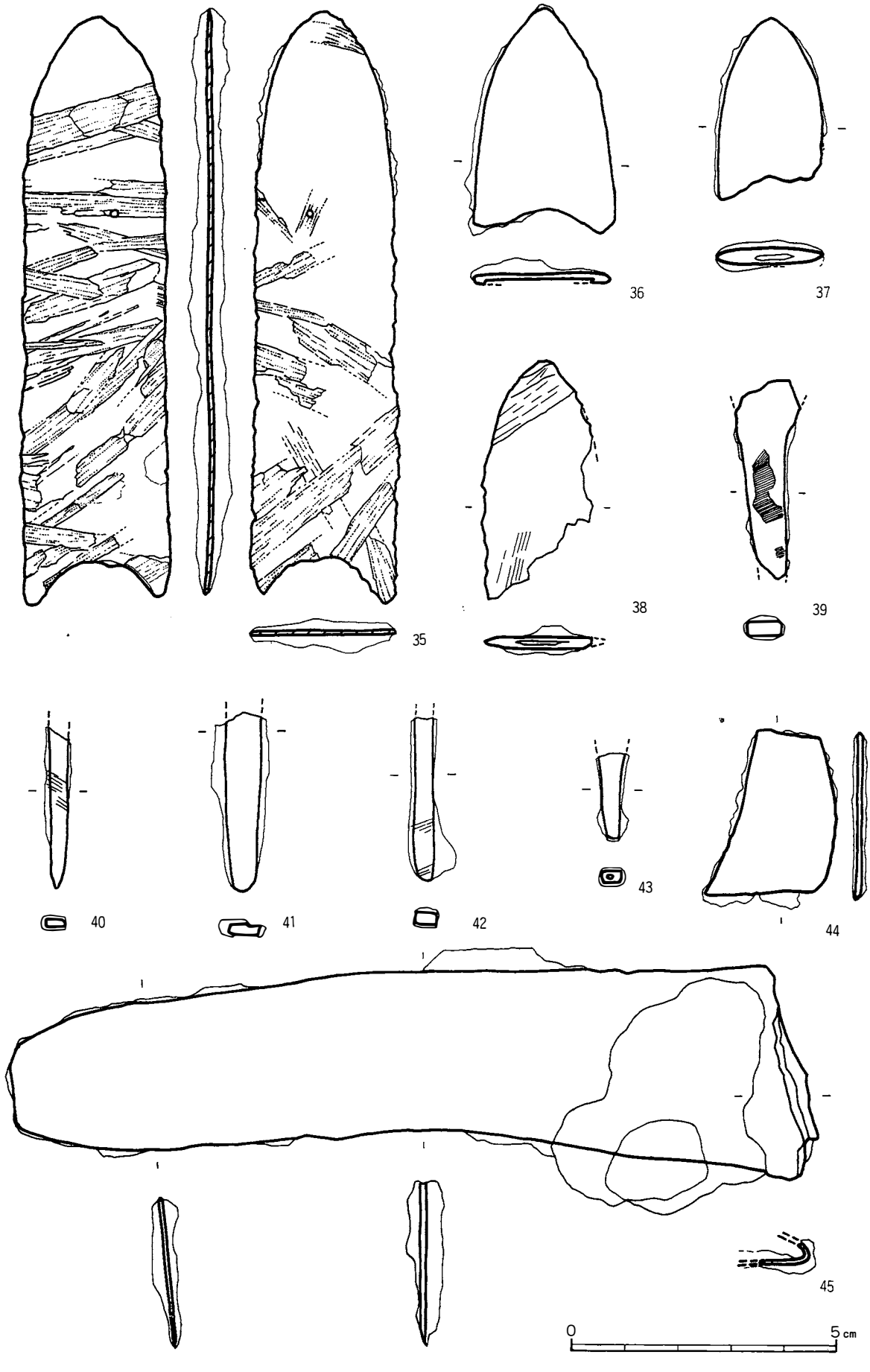




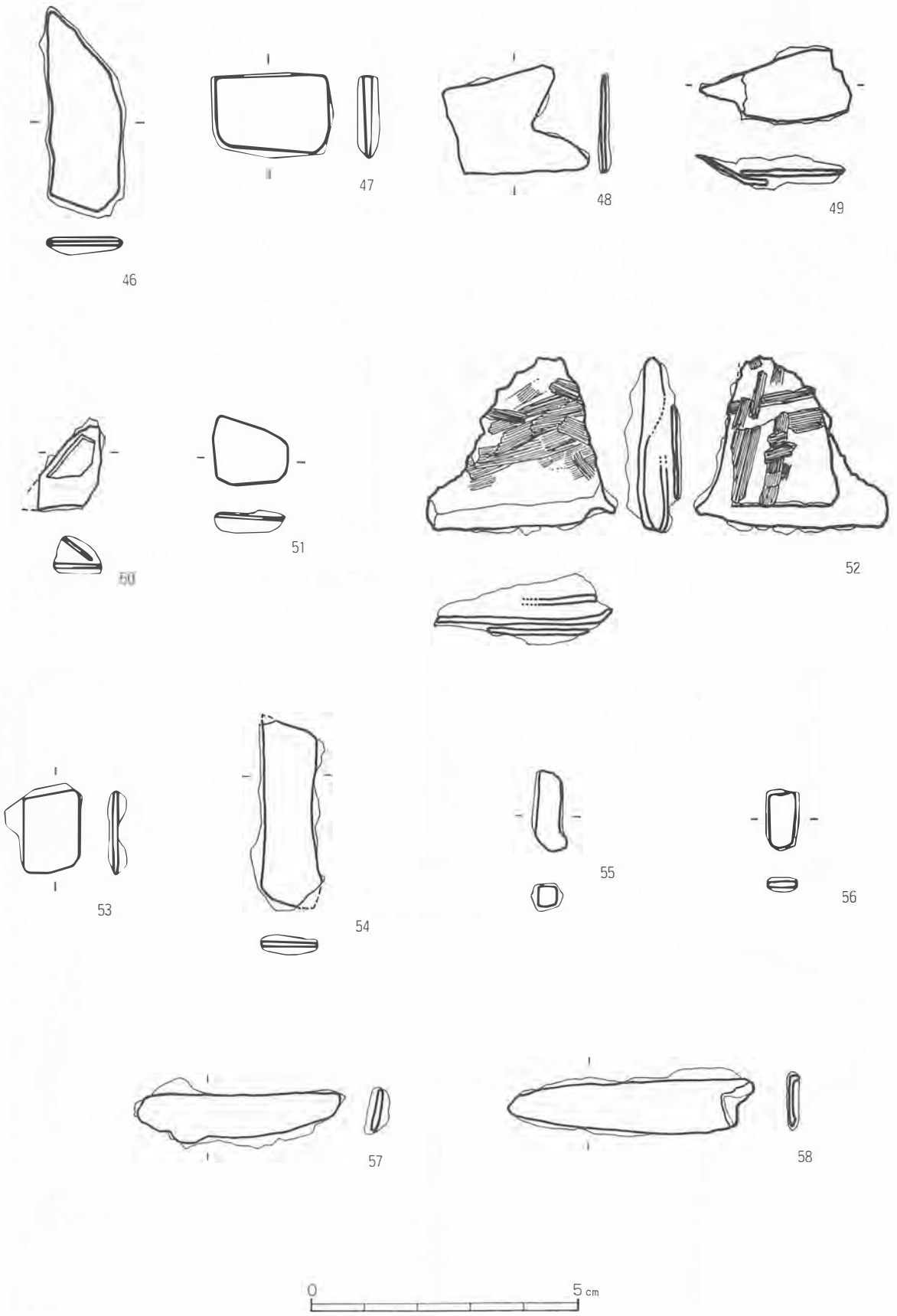
第14図　　6号住居跡出土遺物



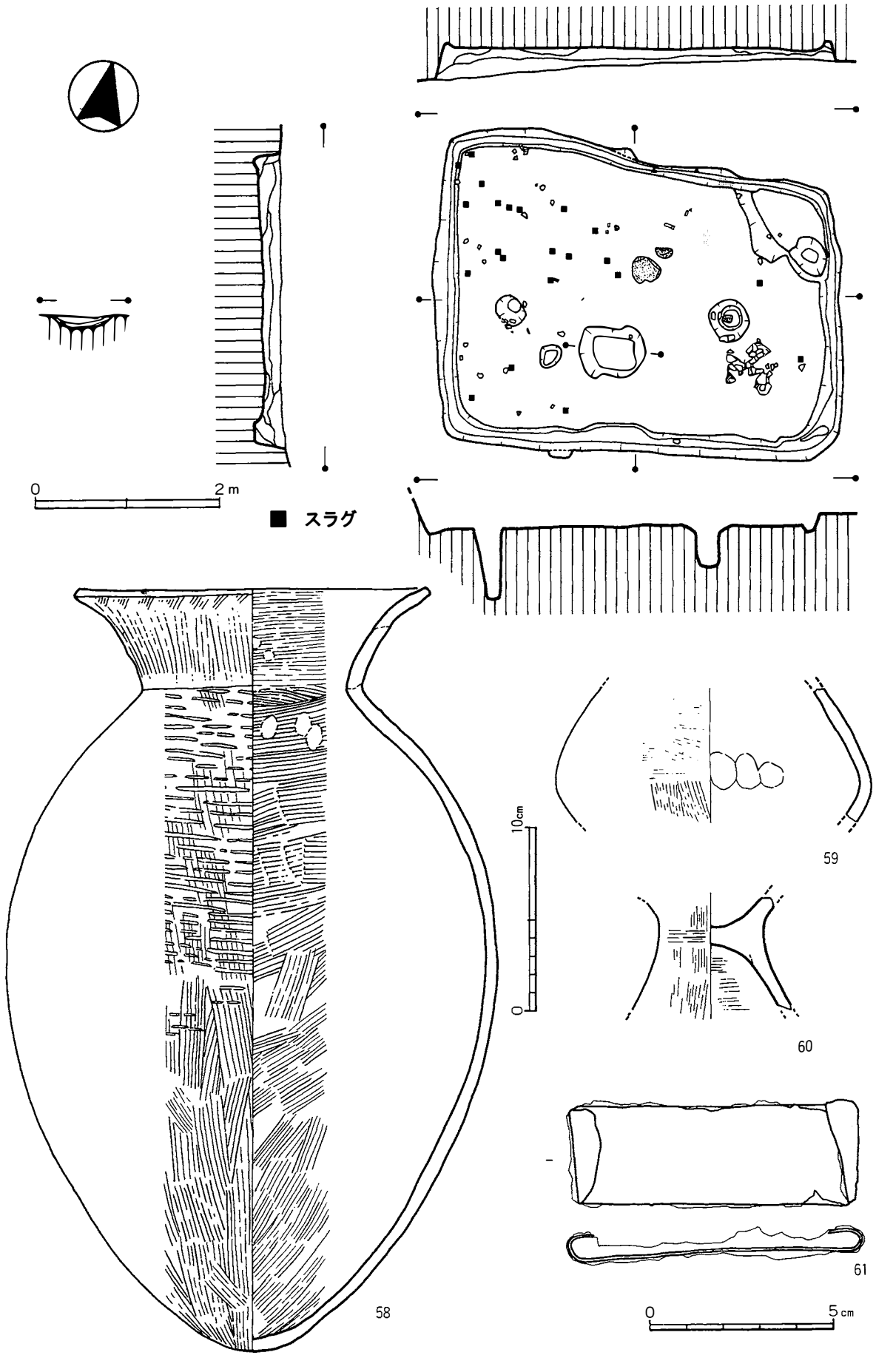
第15図　　6号住居跡出土遺物



第16図　　6号住居跡出土遺物（鉄製品）



第17図　　6号住居跡出土遺物（鉄製品）



第18図　　7号住居跡実測図および出土遺物

くが、残存部分から推定すると高い脚台部であったとみられる。胴部は中央位よりやや高い位置に最大径を置くが、成形の際に胴部に歪みを生じている。口縁部は「く」の字に屈曲し、直線状に開き端部はわずかにつまみ上げる。内外面はハケメにて調整を加える。23は、胴部下位のみの資料である。脚台部は裾の端部を欠くが、外反ぎみの高脚とみられる。内外面はハケメにて仕上げる。24、25は脚台のみの資料である。とくに24は、天井部が下に凸を呈する。

27は、脚台のない甕形土器の底部で、平底を呈する。外面にわずかにハケメが窺われる。

【鉄製品】（第15～16図）

35～37は無茎鉄鏃である。35は、繊維質の紐の付着圧痕が残る長大な鉄鏃で保存のために巻かれたとみられる。中央部に４カ所の孔が穿たれている。36、37は大型の鉄鏃である。38も無茎鉄鏃とみられるが破損が著しい。一部に繊維質の紐の付着圧痕が残る。

39～43は、有茎鉄鏃の茎部のみの資料である。このうち35、40、42には口巻糸らしい繊維質が残る。

45は、鉄鎌である。わずかに内弯ぎみの直刃である。先端は方頭をなし尖らない。基部は装着部位をなすＬ字状の折り曲げを施す。

46～58は鉄片である。46、47、48は直線状の切断面を有する。49～52は集塊状の鉄片である。52は繊維質の付着圧痕がある。

７号住居跡（第17図）

平面形態はやや歪んだ長方形をなし、主軸の方向はＮ－13°－Ｅで本遺跡の中で唯一主軸が東偏してする。長軸方向は4.44m、短軸方向は3.14m、壁高は良好な部分で14cmである。主柱穴は２本であり、住居跡中央より南壁に偏して長方形の炉を有し、その規模は70cm×52cm、深さは14cmである。炉内の埋土はおもに黒褐色土を充たす。ベッド状遺構は北東隅に設けるが形が崩れている。床面との比高差は概ね９cmをなす。通常みられる入口施設の浅い掘り込みは見当たらない。

床面には２カ所ベンガラが付着し、床面から中層にかけては微細な鉄滓が出土する。住居跡の北東部に多く分布することから６号住居跡の鉄滓と同一給源からの流れ込みと思われる。土器以外の遺物は住居跡の中央に据えられた台石および鉄製手鎌（66）１点である。

【土器】（第17図）

58は、壷形土器である。丸底にして倒卵形の胴部をなし、口縁部は内傾する肩部から弱く「く」の字に屈曲し、外反しつつ開く。外面はハケメのあと胴部の上半にタタキを施す。内面はハケメで仕上げる。

59は、鉢形土器である。胴の一部のみの資料である。最大径は低めに位置し下脹れの器形とみられる。外面は最大径の上位はハケメをほとんど撫で消しで仕上げ、下位はやや荒いハケメである。内面はナデで仕上げ、指頭圧痕が著しく残る。

60は、甕形土器の脚台部である。外半ぎみに裾に流れる高脚の器形である。ハケメが全面に疎らに残る。

８号住居跡（第18図）

住居跡の東がわに撹乱を受けている。平面形態は長方形をなし、主軸の方向はＮ－30°－Ｗを測る。残存する長軸方向は5.52m、短軸方向は4.31m、、壁高は良好な部分で６cmである。主柱穴は１本が撹乱で失われているが４本とみられる。住居跡の中央より南壁に偏して長方形の炉を有し、その規模は88cm×80cm、深さは11cmである。ベッド状遺構は北東隅に１基を確認するが上面が削平を受けており、床面との残存する比高差は概ね13cmをなす。入口の浅い掘り込みは当該部分に撹乱が及んでおり不明である。

出土遺物は、若干の土器片であり、実測に耐えうる遺物は１点である。

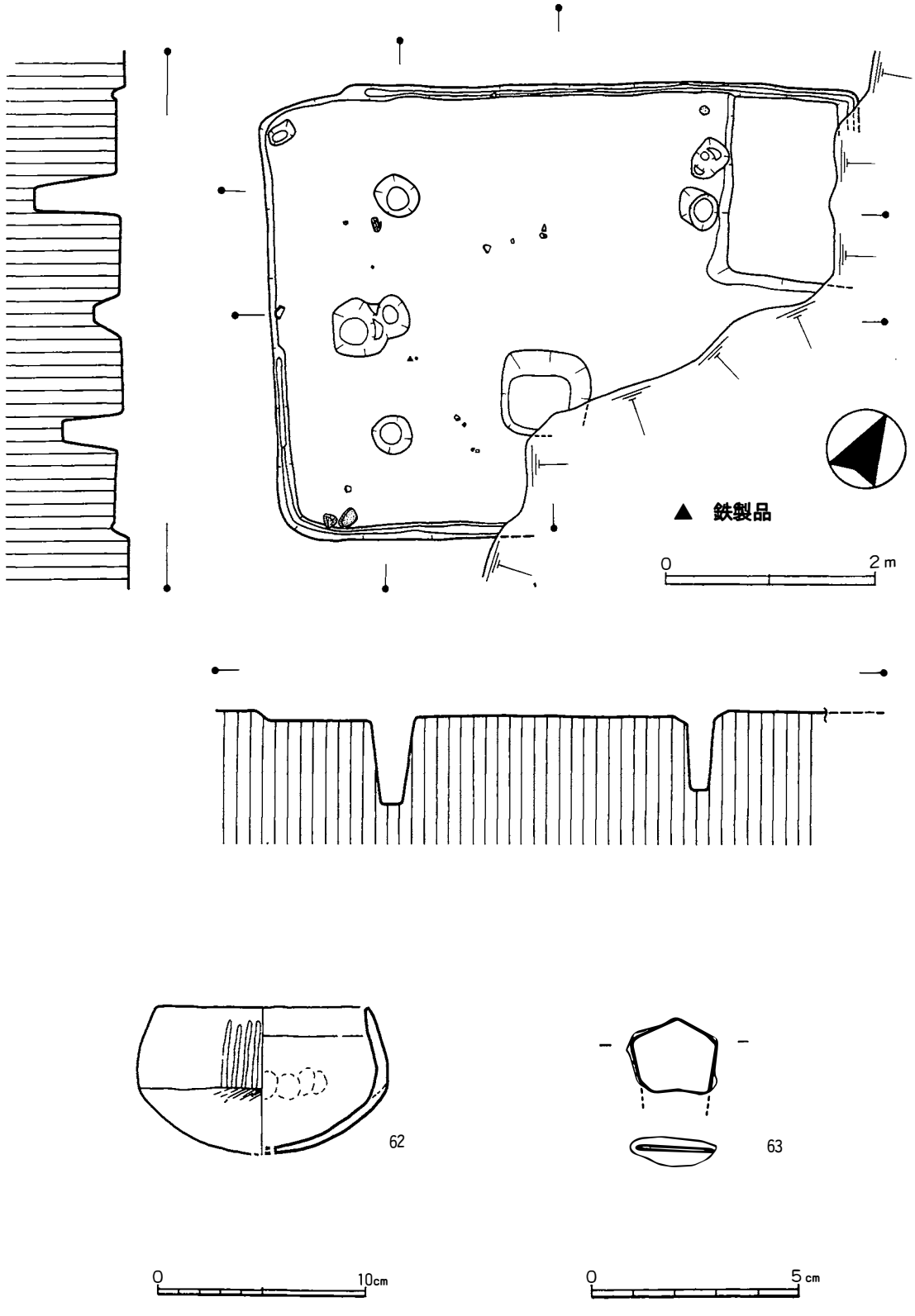
鉄製品は圭頭斧箭式の有茎鉄鏃の先端部分の破片１点（63）である。

【土器】（第18図）

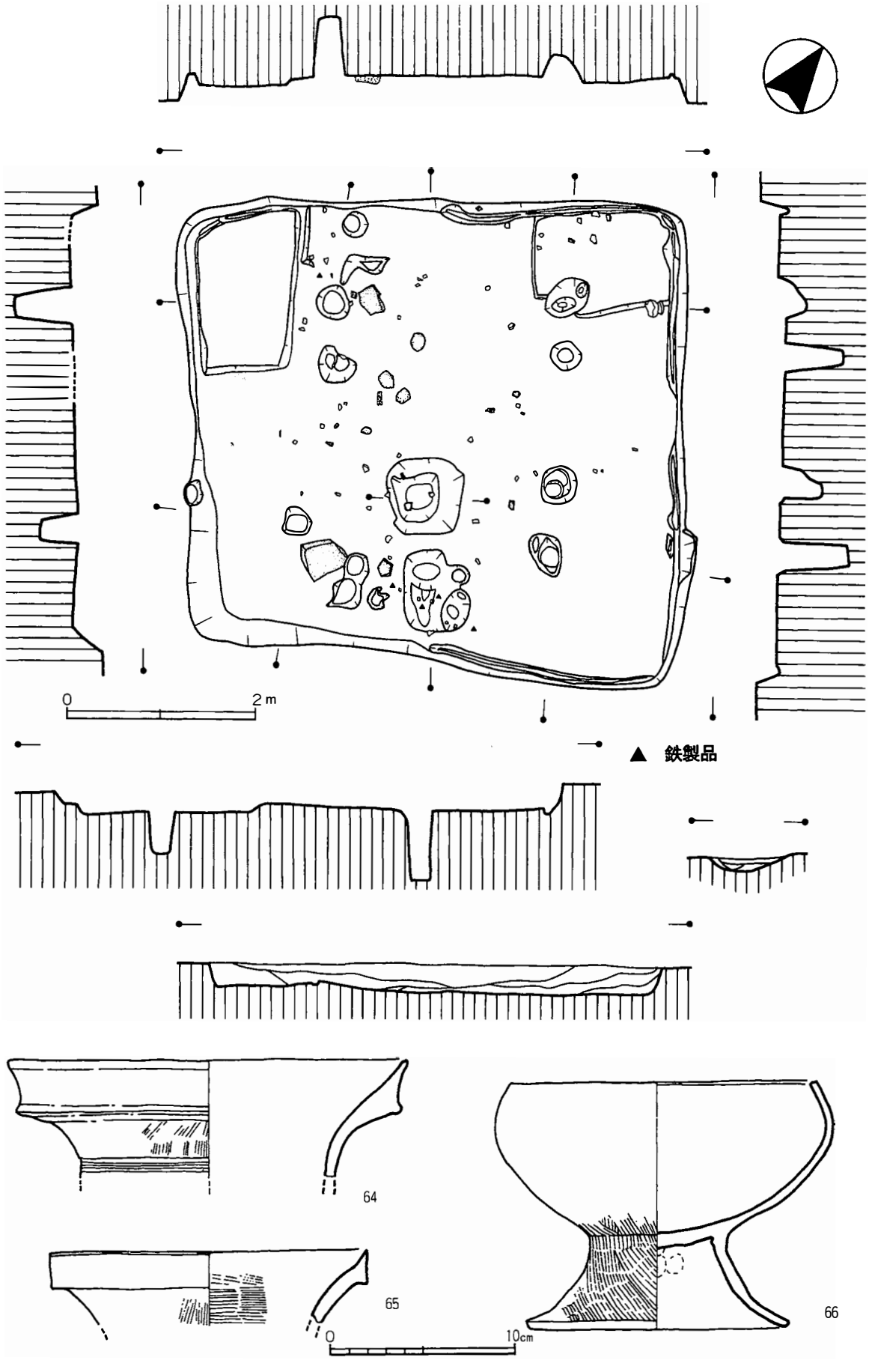
62は、素口縁の鉢形土器である。丸底の底部をなし器高の中央位に最大径を置き、これよりわずかに内傾して直線状に立ち上がり口縁となす。精製した胎土を用い、外面の調整は、上半を縦方向に丁寧に磨き下半はハケメで仕上げる。内面は撫でられ、わずかに最大径のあたりに指頭圧痕を残す。

９号住居跡（第19図）

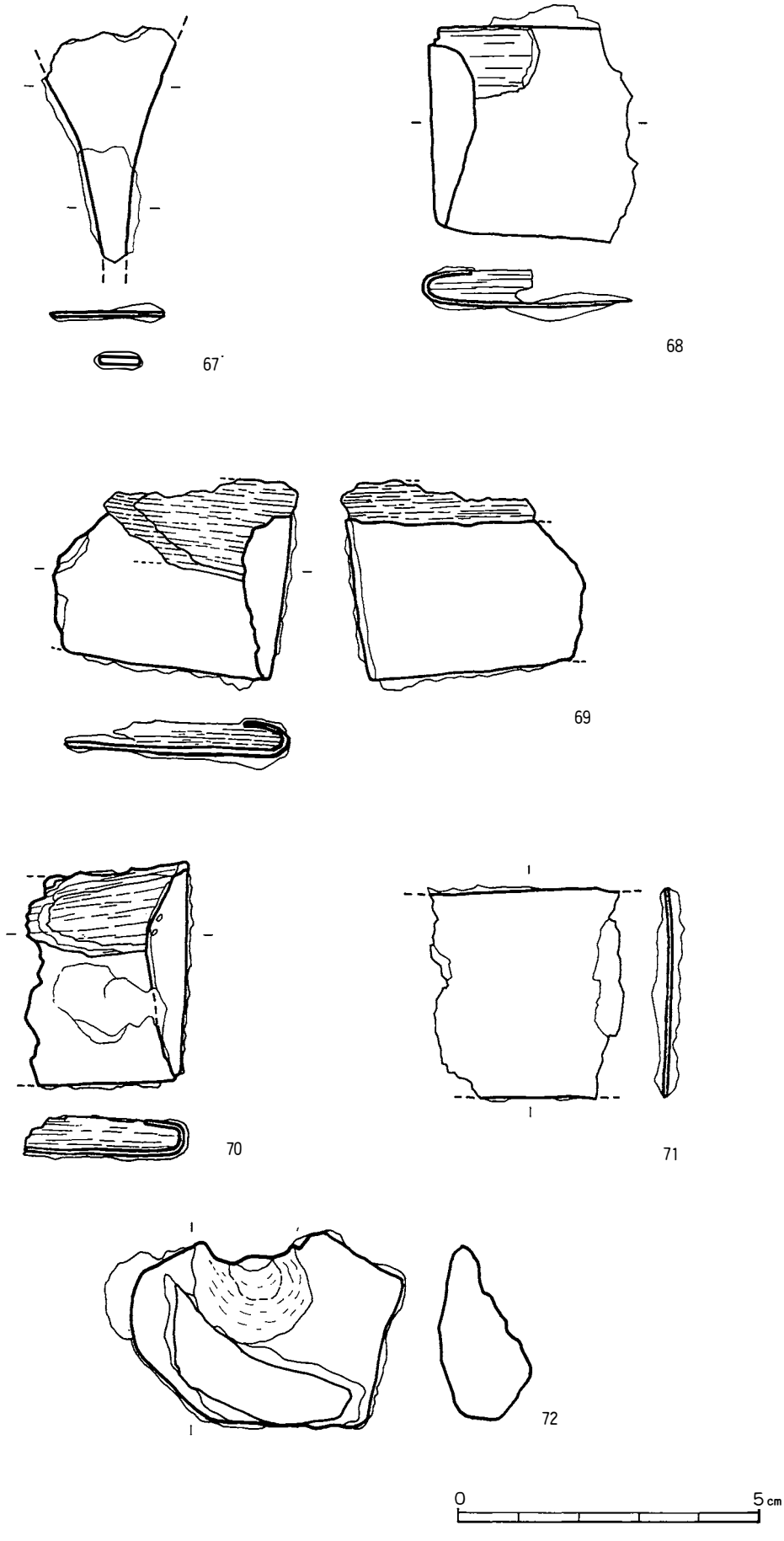
平面形態はほぼ正方形をなし、主軸の方向はＮ－



第19図　　8号住居跡実測図



第20図　　9号住居跡実測図



第21図　　9号住居跡出土遺物実測図（鉄製品）

40°－Wを測る。長軸方向は5.48m、短軸方向は4.68m、壁高は良好な部分で22cmである。主柱穴は４本であり、住居跡の中央より南東壁に偏して長方形の炉を有し、その規模は80cm×80cm、深さは14cmである。炉内の埋土は下層以下に炭化物混じりの土を残す。ベッド状遺構は西、北隅に設け、床面との比高差は概ね５cmをなす。南東壁の中央に接し、入口施設とみられる床面に起伏のある浅い掘り込みがあり、同壁に平行して内に一対の小柱穴を穿つ。

床面の５カ所にベンガラの付着があり炉の傍らに台石を遺存する。また主に入口施設の掘り込みから鉄製品６点を出土した。

【土器】（第19図）

64は、複合口縁の壷形土器の口縁部のみの資料である。頸部より外反して開き断面が三角形の口縁に到る。口縁端部は薄く鋭く尖る。頸部には櫛描の平行文がみられる。内外面は丁寧に撫でる。65は、同じく複合口縁の壷形土器の口縁部のみの資料である。内外面にハケメがわずかに残るがナデを施す。

66は、脚台を有する鉢形土器である。脚台部は強く外反し、体部は丸底の偏平な素口縁の鉢形土器である。最大径は高い位置にあり、これより内傾して短くのび口縁をなす。器壁は薄く精製した胎土を用い丁寧な作りである。脚部の外面にハケメがみられ他はナデで仕上げる。

【鉄製品】（第20図）

67は、有茎鉄鏃である。先端と茎部下端を欠く。68～70は鉄製手鎌であるがいずれも破損している。前３者には木質部分が残存する。

72は、鉄片であるが錆による膨張が著しく原形は不明である。

２．土坑群

調査区の北端の平坦な高まり部分に17基が偏在する（第21図）。いずれも土坑の床面すれすれまで削平され、遺物の出土した遺構は１基のみである。遺構の時期は出土した陶器から近世であり、他の遺構も埋土の類似から大きい時期差はないとみられる。

遺構の性格は決め手を欠くが、形状や遺構の立地状況から墓坑であろう。

すぐ東は丘陵の縁辺で、いくつかの土坑が崖に切られており、遺構の分布は東へ広がる傾向をみせる。浅い小谷の対岸には近世から存続する墓地が所在する。この小谷は外輪山からの沢に源流があり、かつて土石流を起こしたとみえ工事のさい夥しい巨石が現れた．土石流が分断する前には現存する墓地と遺跡は同一丘陵だったとみえる。しかし地元にはここに墓地があった伝承は残っておらず、近世も早い時期に営まれ、切り合いがほとんどないことから存続期間は短かったとみられる。

平面形態と主軸の方向で４群に分類が可能である。Ａ群は、長方形で南北に主軸をとるもので、１号～３号土坑の３基である。Ｂ群は、長方形で東西に主軸をとるもので４号～10号土坑の７基である。Ｃ群は、長方形で東西に主軸をとるもので11号、12号、17号の３基である。Ｄ群は、円形で散漫な分布をする13号～16号の４基である。

１号土坑（第22図）

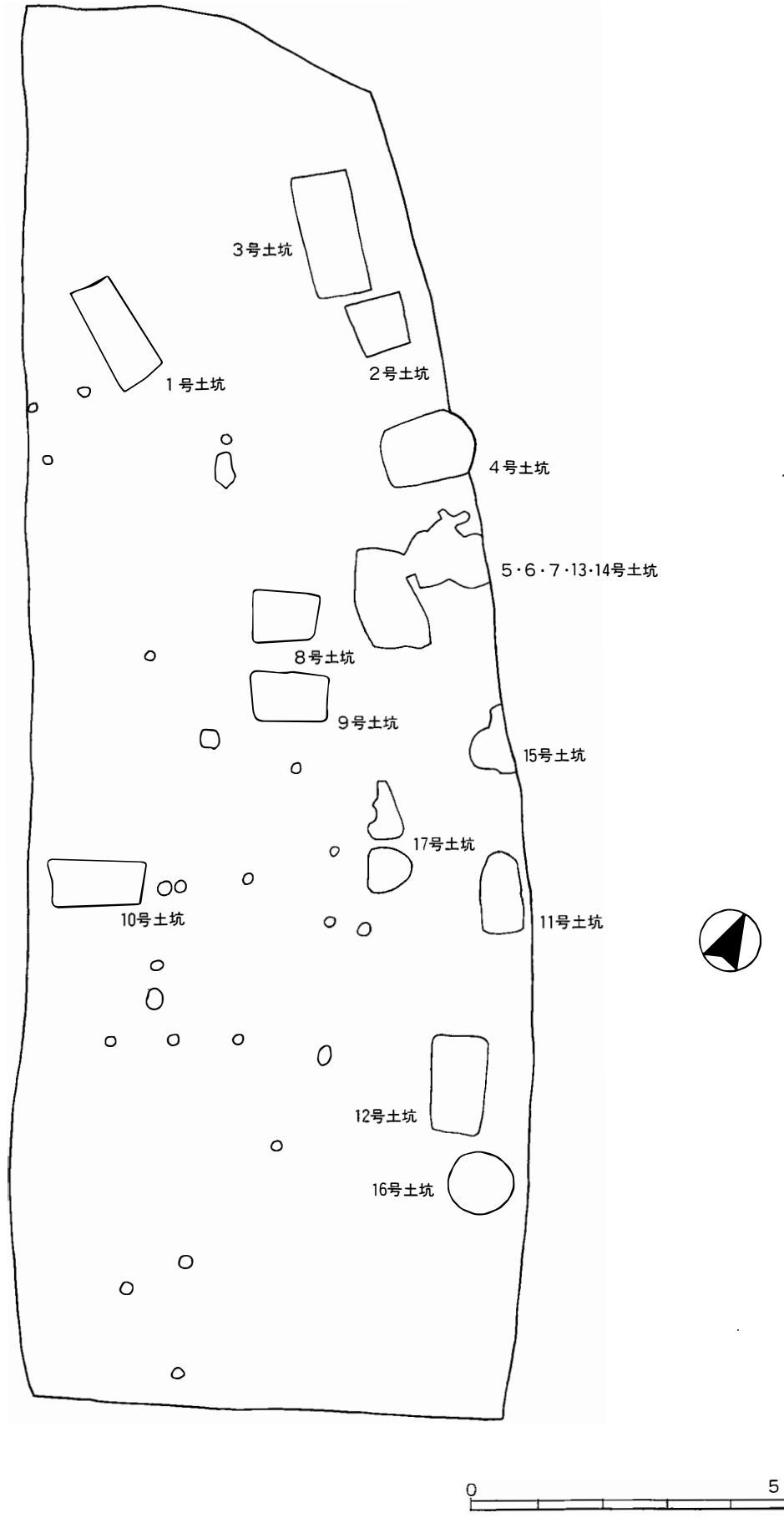
長方形の平面形態であり、長軸方向は108cm、短軸方向は47cm、残存する比高差は16cm、主軸の方向はＮ－64°－Wを測る。遺構の埋土は２層あり、下層は黄褐色粘性土を多く含む黒褐色土で硬く締まっている。上層は黒褐色土で柔らかく黄褐色粘性土のブロックを多く含む。遺物は出土しなかった。

２号土坑（第22図）

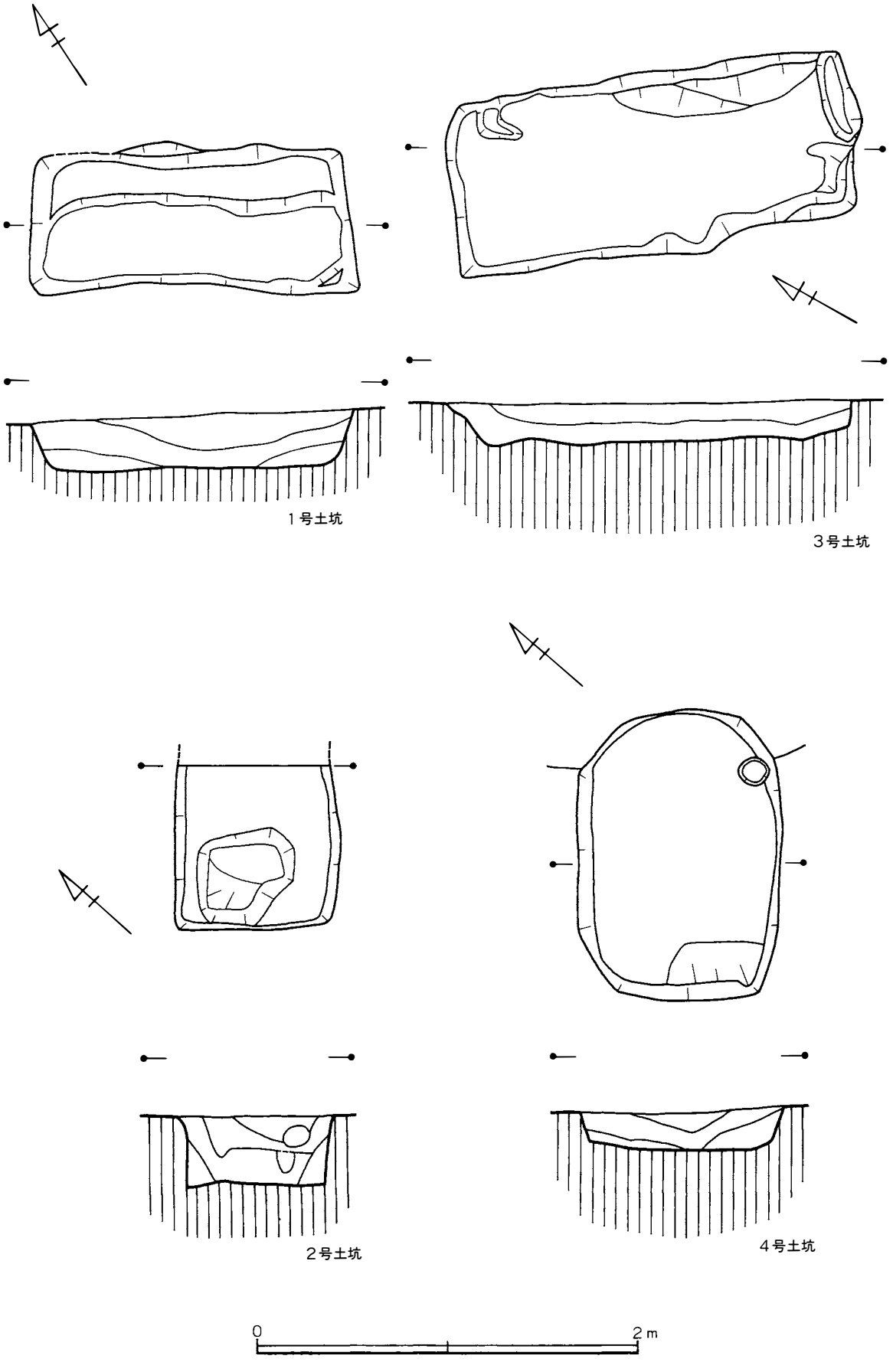
ほぼ正方形の平面形態であり、長軸方向は42cm、短軸方向は41cm、残存する比高差は26cm、主軸の方向はＮ－34°－Wを測る。遺構の埋土はおもに３層あり、下層は黄褐色粘性土を多く含む黒褐色土で硬く締まっている。中層は黒褐色土で柔らかい。上層は締まった黒褐色土である。遺物は出土しなかった。

３号土坑（第22図）

長方形の平面形態であり、長軸方向は83cm、短軸方向は34cm、残存する比高差は35cm、主軸の方向はＮ－47°－Wを測る。遺構の埋土はおもに２層あり、下層は黒褐色土で柔らかく上層は黄褐色粘性土を多く含む黒褐色土で硬く締まる。黒褐色土で柔らかく黄褐色粘性土の小粒を多く含む。遺物は出土しなかった。


3号土坑
1号土坑
2号土坑
4号土坑
5・6・7・13・14号土坑
8号土坑
9号土坑
15号土坑
17号土坑
10号土坑
11号土坑
12号土坑
16号土坑
0
5m

第22図　　土坑配置図



第23図　　土坑実測図

４号土坑（第22図）

隅丸の長方形の平面形態であり、長軸方向は75cm、短軸方向は52cm、残存する比高差は22cm、主軸の方向はＮ－49°－Ｅを測る。遺構の埋土はおもに３層あり、下層は黄褐色粘性土を多く含む黒褐色土で硬く締まる。中層は黒褐色土で柔らかい。上層は柔らかい黒褐色土で硬い。遺物の出土はない。

５号土坑（第23図）

５，６，７号土坑は切り合う群である。削平が著しい撹乱のため新旧関係は不明である。

５号土坑は、長方形の平面形態であり、長軸方向は77cm、短軸方向は残存54cm、残存する比高差は22cm、主軸の方向はＮ－70°－Ｅを測る。床面は平坦である。遺構の埋土は黒褐色土で柔らかく黄褐色粘性土のブロックを多く含む。遺物は出土しない。

６号土坑（第23図）

５、７土坑と両側から切り合い形状が崩れているが長方形の平面形態であり、長軸方向は95cm、短軸方向は残存52cm、残存する比高差は24cm、主軸の方向はＮ－62°－Ｅを測る。遺構の埋土は柔らかく黄褐色粘性土のブロックを多く含む黒褐色土である。床面は皿状である。遺物は出土しない。

７号土坑（第23図）

東がわを６号土坑と切り合う。長方形の平面形態であり、長軸方向は94cm、短軸方向は70cm、残存する比高差は16cm、主軸の方向はＮ－55°－Ｅを測る。遺構の埋土は黄褐色粘性土のブロックを多く含む多く含む黒褐色土である。床面は平坦である。遺物は出土しない。

８号土坑（第23図）

隅丸長方形の平面形態であり、長軸方向は109cm、短軸方向は76cm、残存する比高差は15cm、主軸の方向はＮ－25°－Ｅを測る。遺構の埋土は黄褐色粘性土のブロックを多く含む黒褐色土で、床面はほぼ平坦である。遺物は出土しない。

９号土坑（第23図）

長方形の平面形態であり、長軸方向は120cm、短軸方向は77cm、残存する比高差は20cm、主軸の方向はＮ－65°－Ｅを測る。遺構の埋土は一面に黄褐色粘性土の小粒を含むを黒褐色土で、床面は平坦である。遺物は出土しない。

10号土坑（第24図）

ほとんど削平された遺構である。長方形の平面形態であり、長軸方向は142cm、短軸方向は71cm、残存する比高差は5cm、主軸の方向はＮ－25°－Ｗを測る。遺構の埋土は黒褐色土で柔らかく、床面は平坦である。遺物は出土しない。

11号土坑（第24図）

東がわを崖面で失い、かつ削平が著しい遺構である。隅丸長方形の平面形態であり、長軸方向は131cm、短軸方向は61cm、残存する比高差は13cm、主軸の方向はＮ－66°－Ｗを測る。遺構の埋土は柔らかい黒褐色土で、床面はやや起伏があり中央に浅い窪みがある。遺物は出土しない。

12号土坑（第24図）

隅丸長方形の平面形態であり、長軸方向は167cm、短軸方向は101cm、残存する比高差は25cm、主軸の方向はＮ－64°－Ｗを測る。遺構の埋土は３層あり、壁は受熱により煉瓦色に焼ける。下層は炭化物を含む黒褐色土である。中層から上層にかけては柔らかい黒褐色土で、上層の一部は黄褐色粘性土のブロックを多く含む黒褐色土である。床面は平坦で、遺物は南端近くに近世陶器の碗蓋が１点出土した。13号土坑（第24図）

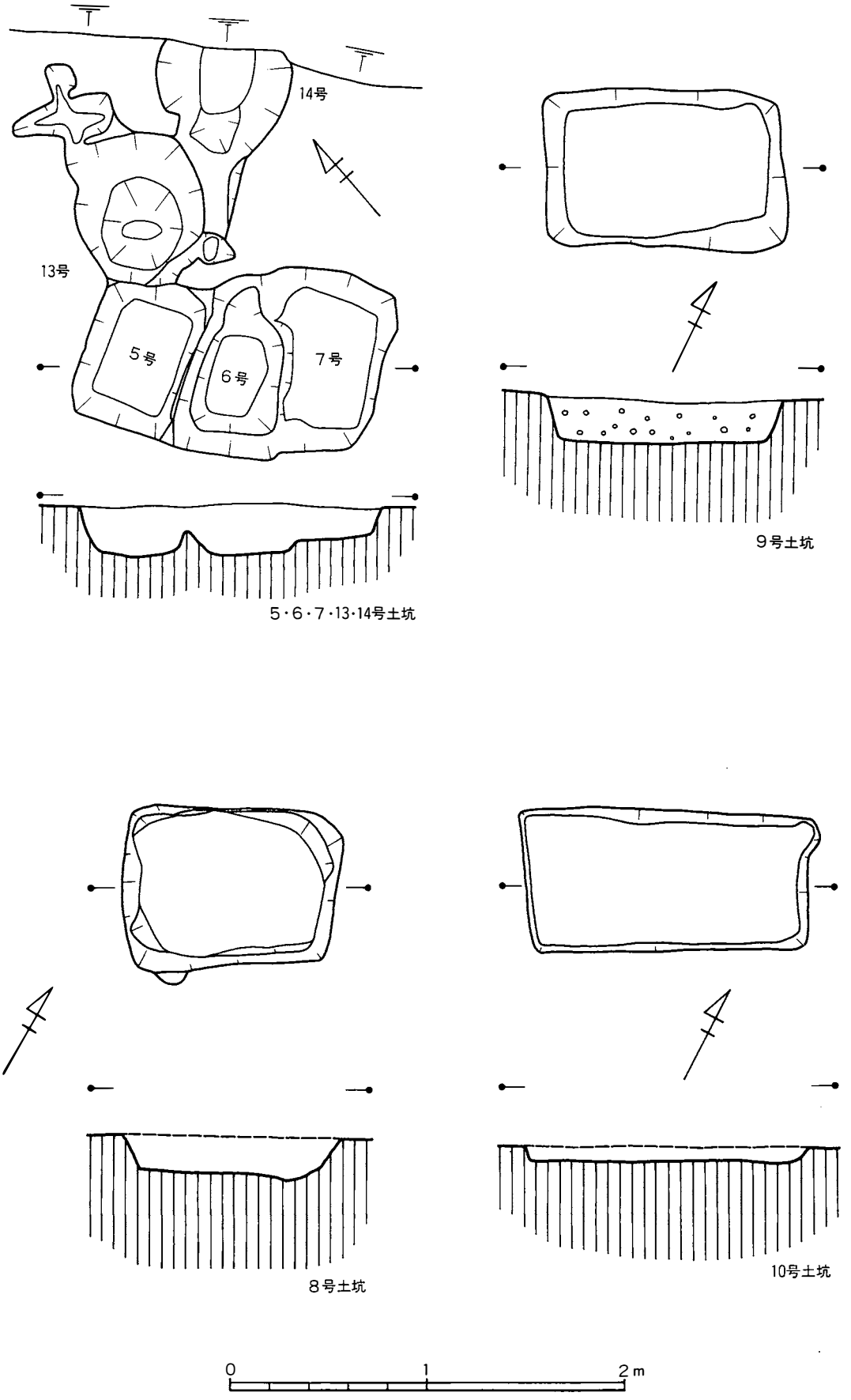
円形の平面形態であるが撹乱が著しい。長軸方向は76cm、短軸方向は66cm、残存する比高差は13cm、主軸の方向はＮ－45°－Ｅを測る。遺構の埋土は黄褐色粘性土のブロックを多く含む黒褐色土である。床面は皿状である。遺物の出土はない。

14号土坑（第24図）

北がわを崖面で失うが長方形の平面形態であり、長軸方向は68cm、短軸方向は残存52cm、残存する比高差は14cm、主軸の方向はＮ－45°－Ｅを測る。遺構の埋土は柔らかい黄褐色粘性土のブロックを多く含む黒褐色土である。遺物は出土しない。

15号土坑（第24図）

不整形な円形の平面形態である。削平により基底部のみ残したものであろう。長軸方向は62cm、短軸方向は52cm、残存する比高差は７cm、主軸の方向はＮ－55°－Ｅを測る。床面は起伏が大きいが概ね皿



第24図　　土坑実測図

状である。

16号土坑（第24図）

正円形の平面形態であり、長軸方向は98㎝、短軸方向は96㎝、残存する比高差は36㎝、主軸の方向はＮ－66°－Ｅを測る。遺構の埋土は両壁から床面にかけ、大粒のブロック状黄褐色粘性土を多く含む黒褐色土が占める。主として２層あり、下層は黄褐色粘性土の微細な粒子を含む黒褐色土で、上層は同じく小粒のブロックを多く含む黒褐色土である。遺物は出土しない。

17号土坑（第24図）

削平のため正確な平面形態は不明であるが、不連続な２つの掘り込みからみて、長方形の平面形態とみたてて長軸方向は175㎝、短軸方向は62㎝、残存する比高差は７㎝、主軸の方向はＮ－66°－Ｗを測る。各床面は起伏が大きい。遺物は出土しない。

第３節　まとめ

池田遺跡は、弥生時代後期の集落を主体にする遺跡であり、同年度に調査を実施した狩尾遺跡群とほぼ同時期の遺跡である。竪穴住居跡はおよその傾向として、小規模のものは長方形の平面形態で柱数は２本、大規模のものは正方形の平面形態で柱数は４本である。また炉の形態は、円形ないし方形で１号、６号住居跡の炉は周堤状の高まりがみられ、一部は、底部にやわらかい炭化物の層が観察される。

調査区の範囲が狭小であるため住居跡の分布の特徴について多くを言及することは困難であるが、住居跡の主軸の方位は１基を除き入口を南東位に位置し、散漫に分布するが。最大規模の６号住居跡の周囲は、若干、住居跡の特異な分布状況を読み取ることができる。本遺跡で鉄滓の出土する住居跡は３号、４号、６号、７号であるが、このうち小規模の４号、５号、７号の各住居跡が最大規模の６号住居跡を囲み、いずれもから鉄滓が出土していることから両タイプの住居跡は相互に鉄生産に関わるコンビネーションの可能性が考えられる。かかる事例は狩尾・湯の口遺跡の大型住居のあり方にもみられた。ただし６号住居跡は必ずしも他と隔絶した規模の大型住居跡ではなく、多量の鉄滓が住居跡の西側から投棄されている出土状況から判断してすぐ近くに本格的な大型住居があるとみられる。

住居跡の時期については、土器の特徴から狩尾Ⅲ期に属し、狩尾遺跡群の各遺跡での鉄生産が最盛期を迎えるころであり、本遺跡でも同様の傾向を見ることができる。

土　器

番号	遺構名	器種	口径（反転復元）	器高（残存高）	胴部最大径（反転復元）	脚台径（反転復元）	脚台高（残存高）	色調（外面、内面の順）	備考	実測番号	登録番号
1	1住	甕形土器	(200)	(123)	—	—	—	褐色		山下3	34住8
5	3住	壷形土器	131	235	166			灰白色	ほぼ完形	中田5	36住一括38
6	3住	壷形土器	(206)	(51)				10YR 8/4浅黄橙	複合口縁	吉本3	36住58,64
7	3住	壷形土器	100	119	(131)			外 にぶい黄橙 内 灰色	長頸 ていねいなつくり	木下5	36住1,2,5,31,33,34,38
8	3住	壷形土器		(29)				外 10YR 5/2灰黄褐 内 7.5YR 5/3 にぶい褐	複合口縁 刻目文	吉田276	36住一括
11	4住	甕形土器		69		119	43	明黄褐色	脚台	重永1	37住201
12	4住	甕形土器				133	75	淡黄灰白色		木下6	37住203
13	4住	甕形土器		111		131	93	にぶい褐色	脚台	吉本1	37住202,204
14	5住	鉢形土器	(145)	(76)	(177)			淡黄白色	ていねいなつくり	木下4	38住2
15	5住	甕形土器		(98)				外 10YR7/4 にぶい黄橙 内 10YR6/6 明黄色		吉田275	38住10
17	6住	壷形土器	145	276	(167)			外 にぶい褐色	櫛かきの平行文、流水文	吉田80	39住土器集中
18	6住	鉢形土器	—	126	188			外 灰褐色 内 にぶい黄橙	脚台	木下9	39住47,88,89,142165,189,190
19	6住	高坏形土器	—	(57)	—	(57)		外 2.5YR8/3淡黄 内 2.5YR5/1黄灰		吉田277	39住162
20	6住	壷形土器	160	324	198			黄灰色		吉本	39住土器集中
21	6住	甕形土器	—	(55)	—	—	(32)	10YR6/4 にぶい黄橙 10YR5/3 にぶい黄橙		吉田289	39住155
22	6住	甕形土器	207	485	248	145	90	にぶい黄橙		山下4	39住
23	6住	甕形土器						にぶい黄橙		木下3	39住70一括
24	6住	甕形土器				144	(92)	橙色	脚台	木下2	39住37
25	6住	甕形土器				111	53	明黄褐色	脚台	中田6	39住一括
26	6住	甕形土器		(20)			(18)	7.5YR7/4にぶい橙色 外底　5YR7/6橙色 内底　10YR7/1黒色	欠けた脚台端を擦り磨く	吉田288	39住17
27	6住	壷形土器		(17)	底径(46)			7.5YR6/4にぶい黄橙 黒色	カーボン付着著しい	吉田285	39住140
58	6住	壷形土器		415	268			にぶい橙色		吉田81	44住一括 44住59
59	7住	壷形土器		(72)	(174)			外 2.5YR7/3浅黄 内 10YR7/4にぶい黄橙		吉田284	44住45
60	7住	甕形土器						外 5YR7/6橙色 内 10YR7/3 にぶい黄橙		吉田287	44住59
62	8住	鉢形土器	(102)	(71)	(122)			外 7.5YR6/4にぶい橙 内 10YR7/4 にぶい黄橙	ていねいなつくり	河野1	40住一括
64	9住	壷形土器	(210)	62				灰白色	複合口縁	木下7	41住49
65	9住	壷形土器	(168)	(39)				10YR8/4浅黄橙		吉本2	41住11
66	9住	鉢形土器	165	132	182	137	51	灰白色	脚台完形	徳永2	41住67

第3表　出土遺物計測表

石　器

番号	遺構名	器種	材質	長さ mm	幅 mm	厚さ mm	重さ g	備考	実測番号	登録番号
3	1住	磨石	輝石安山岩	100	69	70	881.2		山下24	34住16
5	1住	台石	輝石安山岩	402	395	112		片面にベンガラ付着	吉田 丹生	34住
28	6住	砥石	砂岩	181	128	33			中田58	39住
29	6住	磨石	輝石安山岩	114	97	78	1312.9		丹生128	39住205
30	6住	磨石	輝石安山岩	76	68	81			平畑136	39住181
31	6住	磨石	輝石安山岩	(104)	102	81	846.6		平畑133	39住158
32	調査区一括	磨石	輝石安山岩	141	(85)	62			平畑	調査区一括
33	6住	磨石	輝石安山岩	133	123	35			平畑137	39住194
34	6住	台石	輝石安山岩	421	429	198			吉田	39住

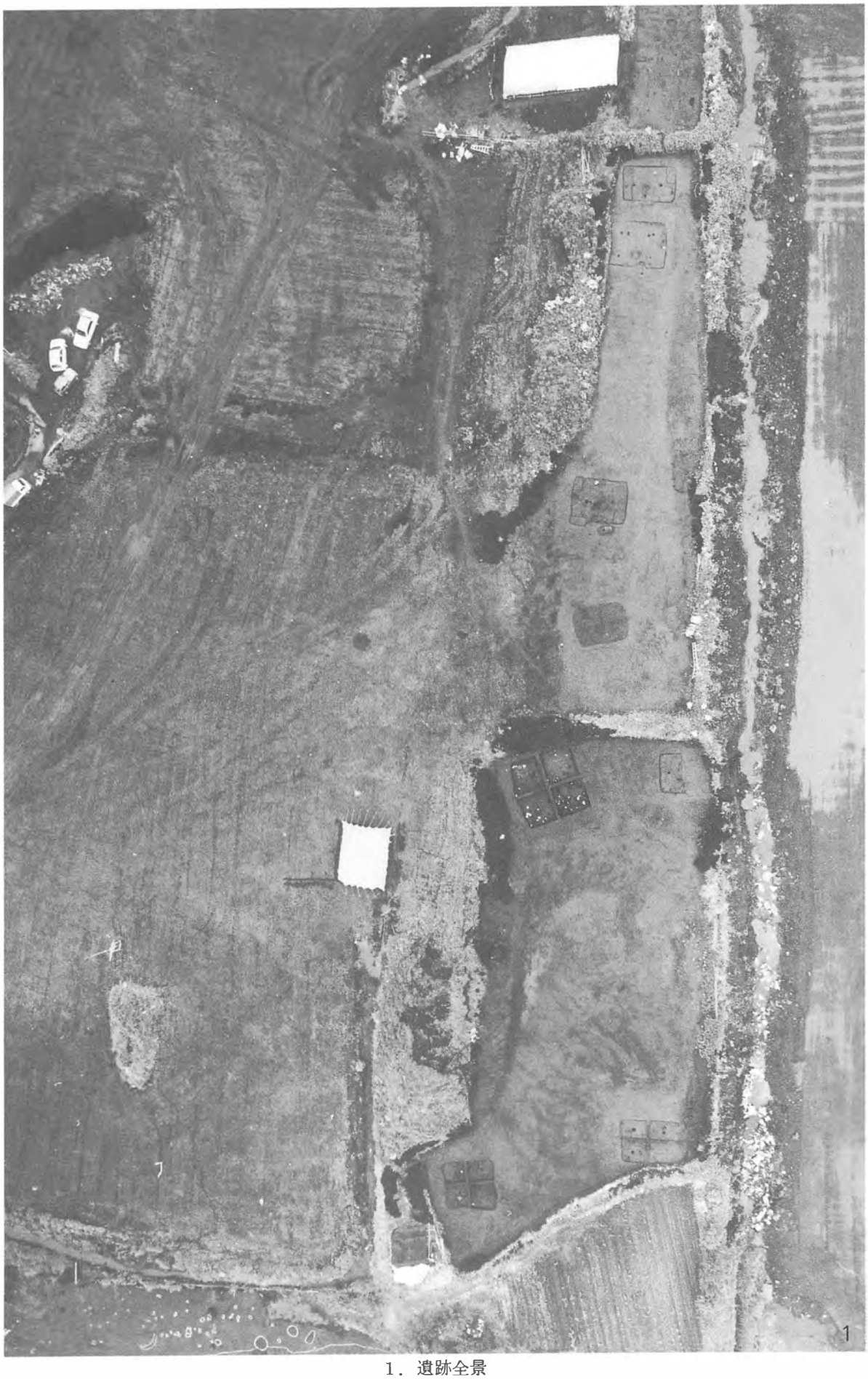
第4表　出土遺物計測表

鉄製品

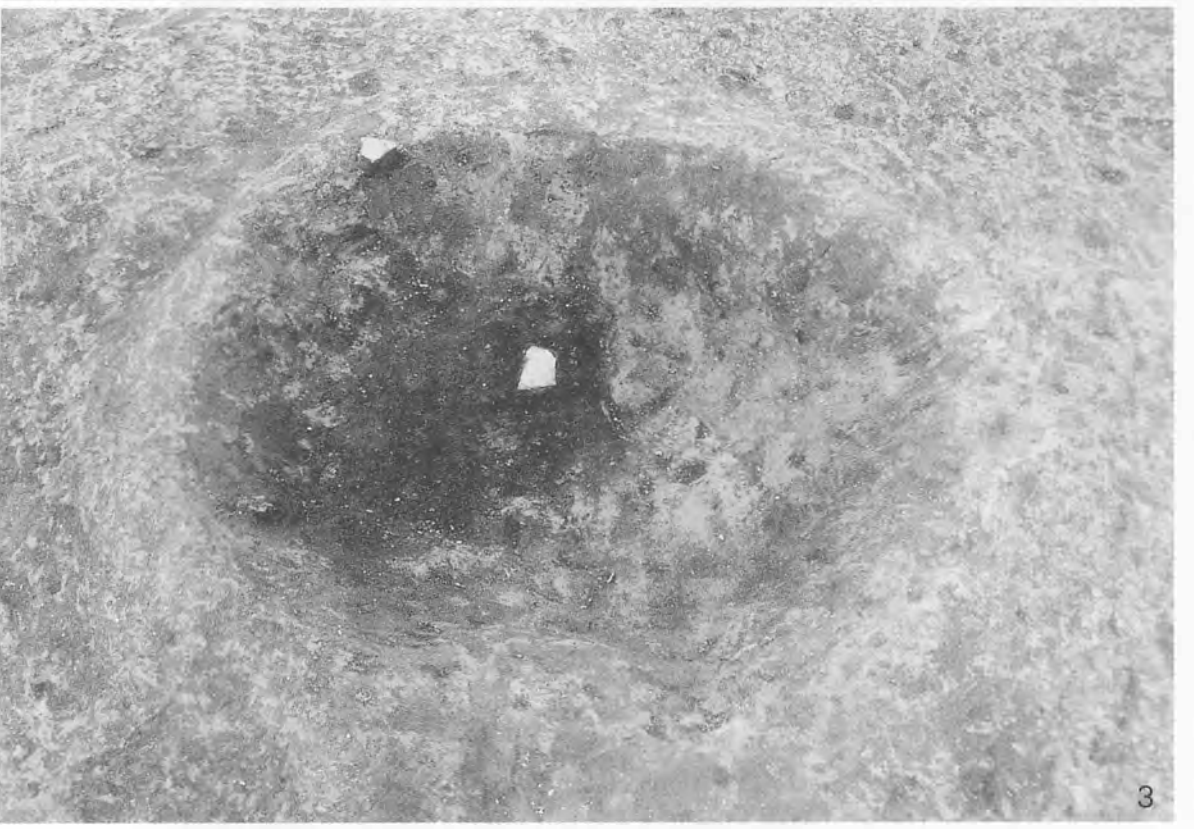
番号	遺構名	器種	長さ mm	幅 mm	厚さ mm	重さ g	備考	実測者	登録番号
2	7住	鉋	94	13	3	7.3	鍛接	吉田45	44住7
9	3住	鉄鏃	38	18	4	2.2		吉田48	36住65
10	3住	有茎鉄鏃	41	17	4	4.4		吉田37	36住40
16	5住	鉄鏃	52	27	6	8.6		吉田42	38住7
35	6住	無茎鉄鏃	111	27	7	23.9	穿孔あり	吉田308	39住137
36	6住	無茎鉄鏃	42	27	4	8.3		吉田39	39住202
37	6住	鉄鏃	34	21	2	4.3		吉田31	39住16
38	6住	鉄鏃	(46)	(22)	2	6.2	繊維圧痕	吉田25	39住2
39	6住	鉄鏃茎部分	38	12	4	2.8		吉田35	39住49
40	6住	鉄鏃茎部分	30	5	2	1.12	糸巻痕有り	吉田50	39住211
41	6住	鉄鏃茎部分	34	11	3	2.6		吉田41	39住27
42	6住	鉄鏃茎部分	31	5	3.5	6.8		吉田43	39住209
43	6住	鉄鏃茎部分	17	5	3	7.8		吉田44	39住10
44	6住	鉄片	34	21	3	3.9		吉田29	39住204
45	6住	鉄鎌	157	41	2	72.3	柄装着部分	吉田21	39住9
46	6住	鉄片	39	14	4	2.2	直線状の切断あと	吉田28	39住41
47	6住	鉄片	15	21	4	3.7		吉田49	39住211
48	6住	鉄片	18	28	3	2.3		吉田40	39住202
49	6住	鉄片集塊	28	14	7	1.7		吉田52	39住203
50	6住	鉄片集塊	16	12	6	9.0		吉田53	39住203
51	6住	鉄片	14	13	4	1.35		吉田54	39住25
52	9住	不明鉄片	31	35	10	8.25	複数鉄片の癒着 繊維巻痕	吉田30	41住60
53	6住	鉄片	16	13.5	3.5	1.5		吉田55	39住38
54	6住	鉄片	35	11	3	2.9		吉田46	39住57
55	6住	鉄片	15	6	5	8.0		吉田56	39住18
56	6住	鉄片	11	5	13	2.0		吉田57	39住22
57	6住	鉄片	38	12	4	3.0		吉田47	39住57
58	6住	刀子	46	13	2	3.4		吉田34	39住26
61	7住	手鎌	80	27	8	16.3		吉田26	44住11
63	8住	鉄片	12	11	5	1.0		吉田58	40住6
67	9住	有茎鉄鏃	40	22	3	4.1		吉田38	41住19
68	9住	手鎌	(35)	36	7	10.8		吉田23	41住59
69	9住	手鎌	41	35	8	7.75	木質有り、刃がかなり磨損する	吉田32	41住61
70	9住	手鎌	(27)	37	6	7.05	木質残存	吉田22	41住57
71	9住	手鎌	(33)	35	1	6.3		吉田24	41住58
72	9住	鉄片集塊	51	33	16	27.5	複数の鉄片の集塊	吉田33	41住20埋土中

第5表　出土遺物計測表

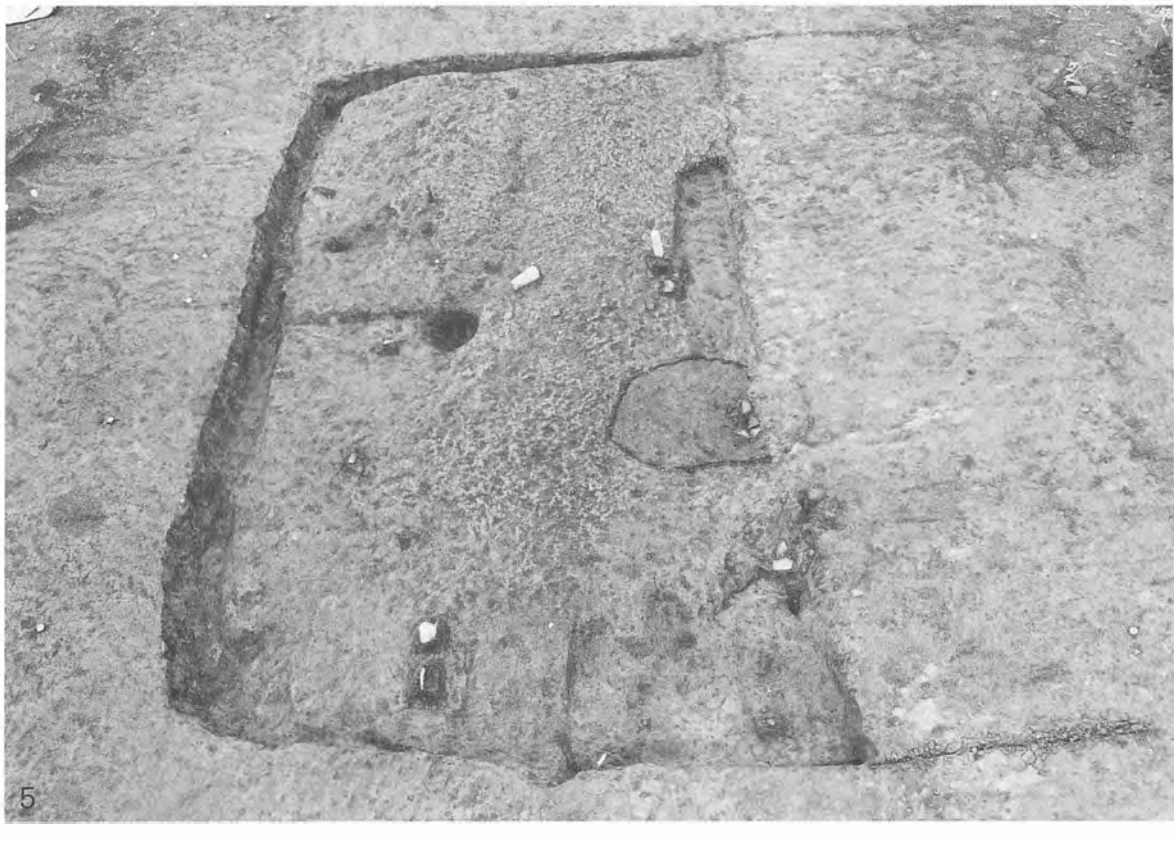
写 真 図 版



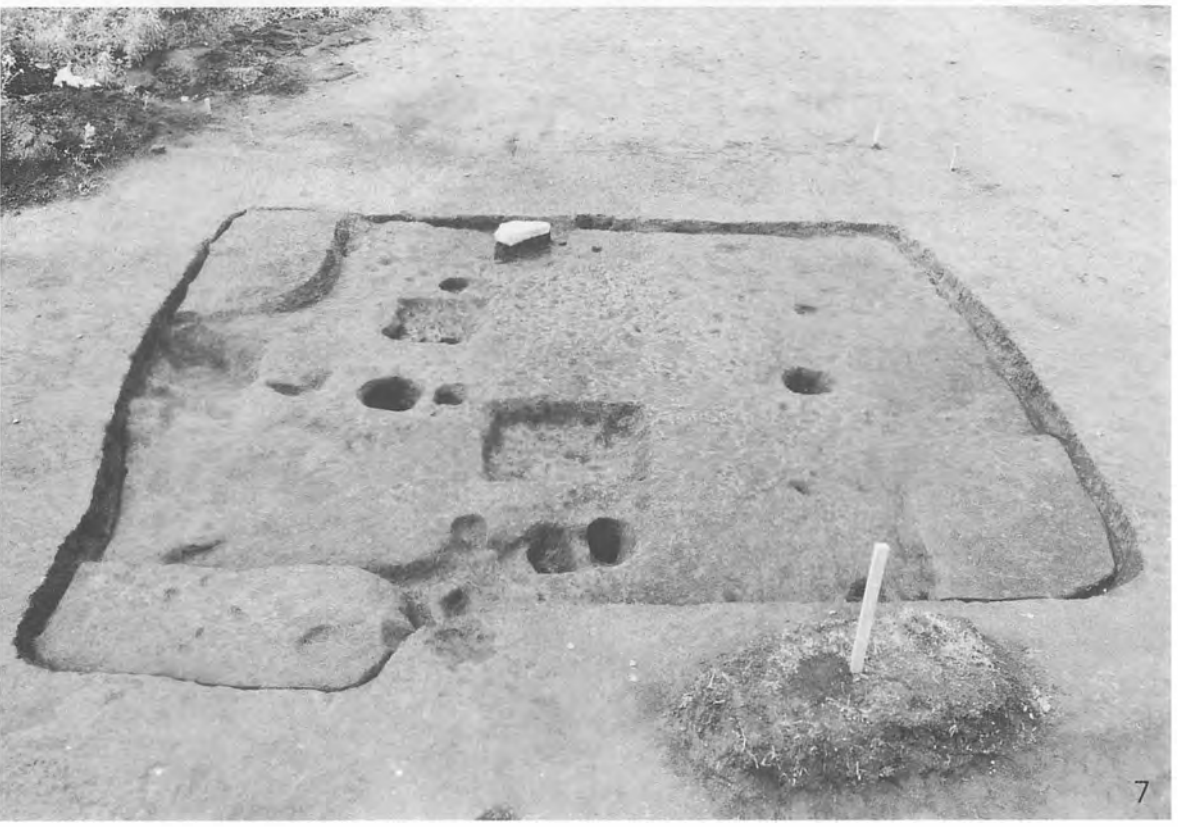
1．遺跡全景



2．１号住居跡
3．１号住居跡（炉）

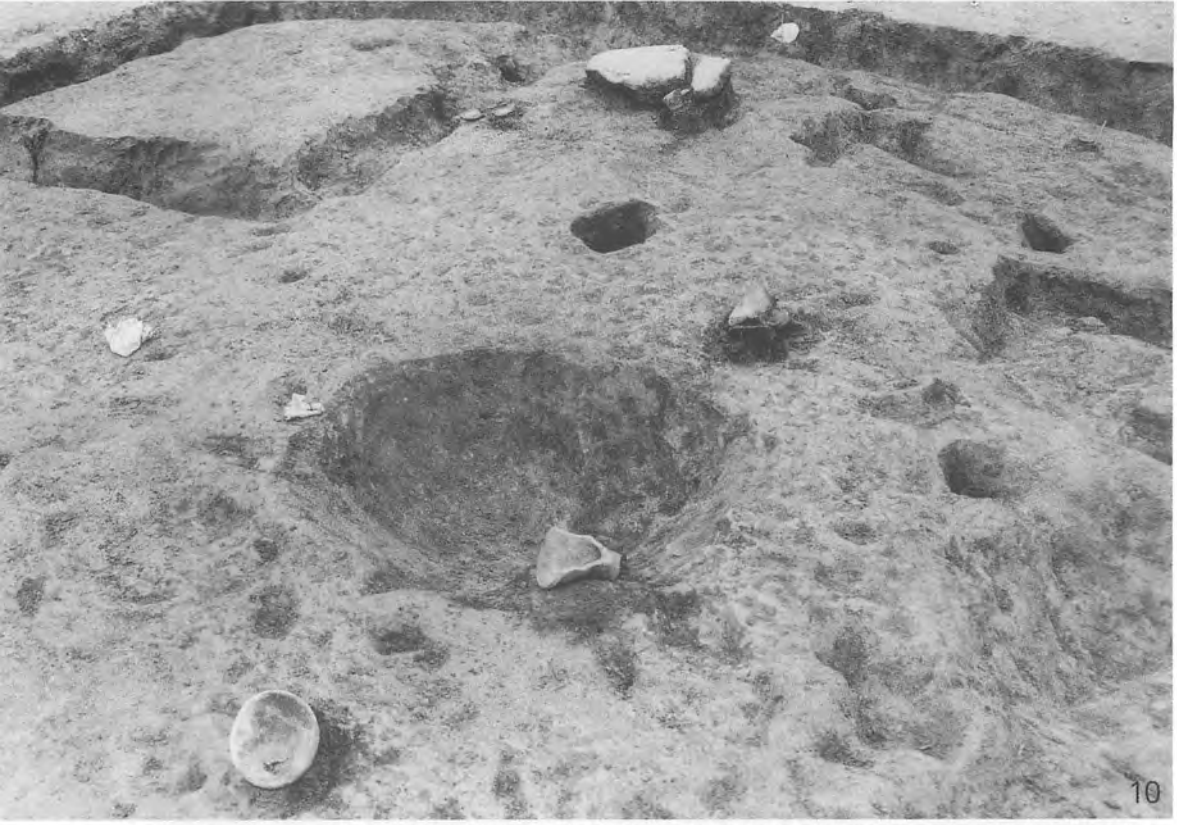


4．3号住居跡
5．5号住居跡

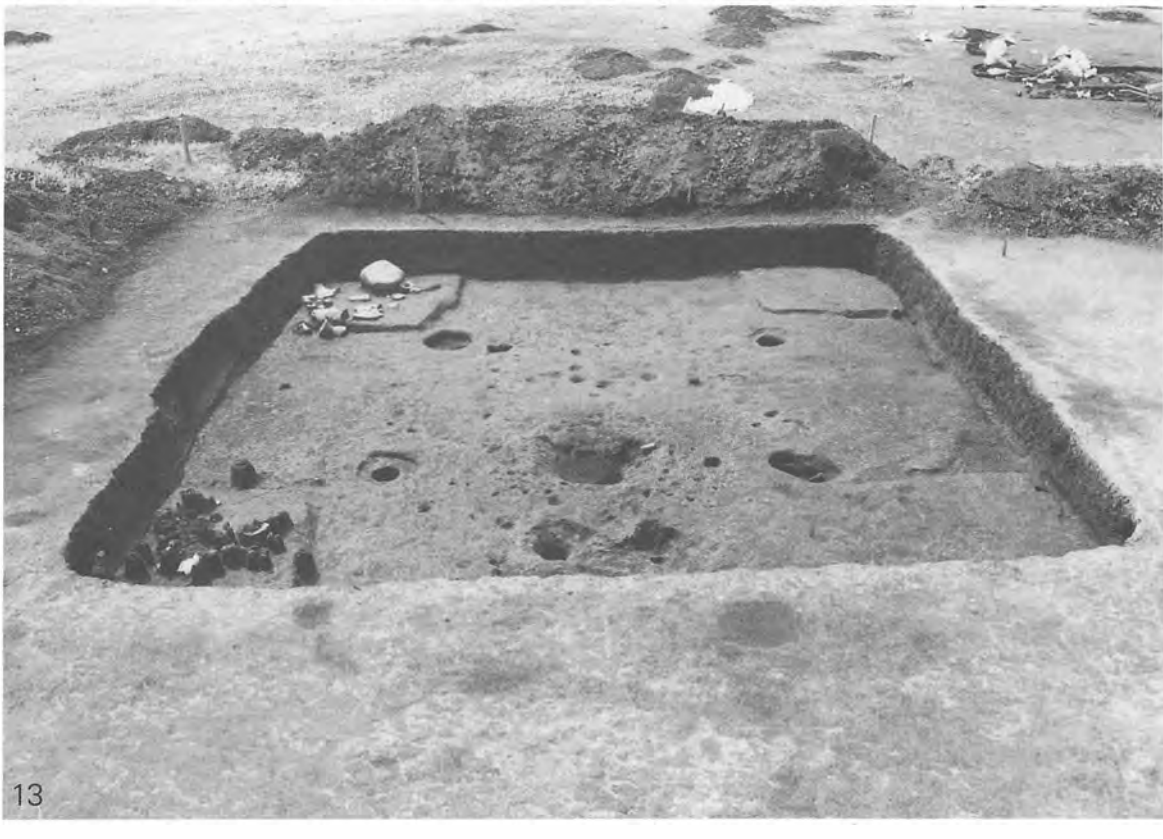


6．３号住居跡（出土状況）
7．３号住居跡（完　　掘）

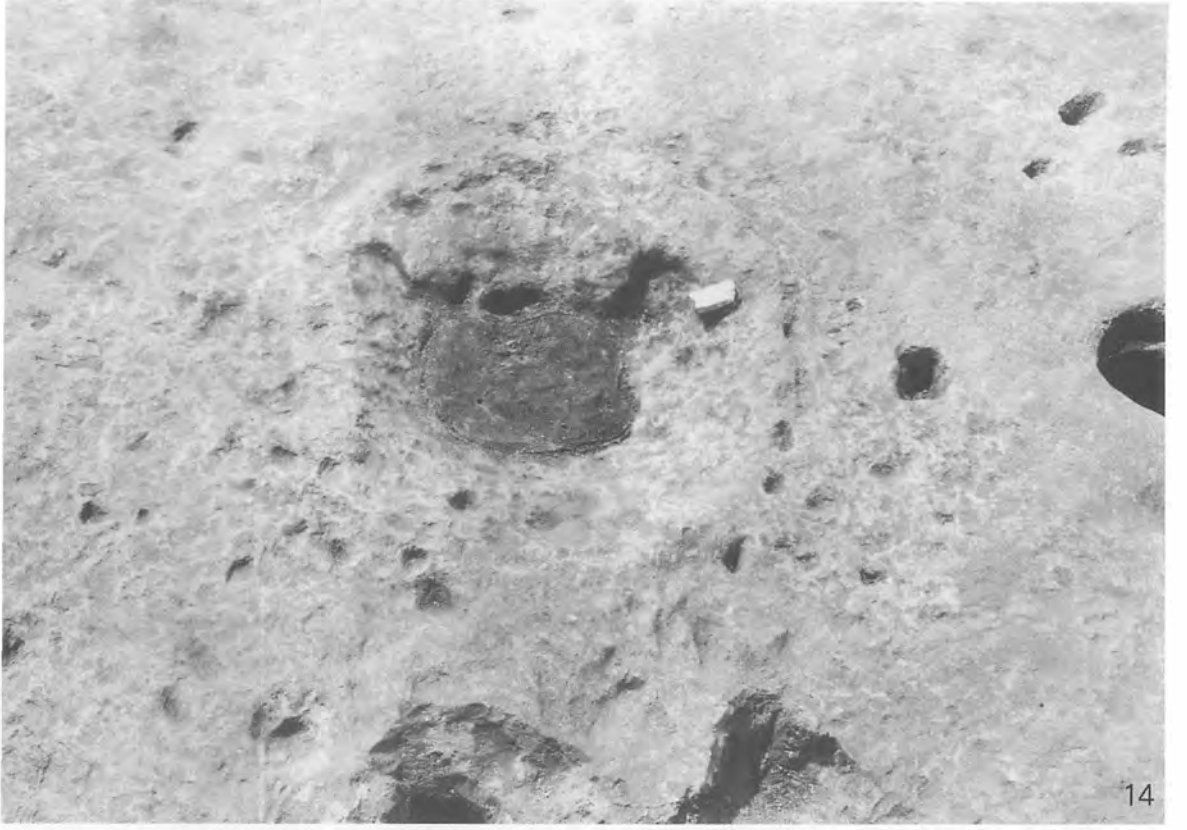
8．４号住居跡（出土状況）
9．４号住居跡（完　　掘）



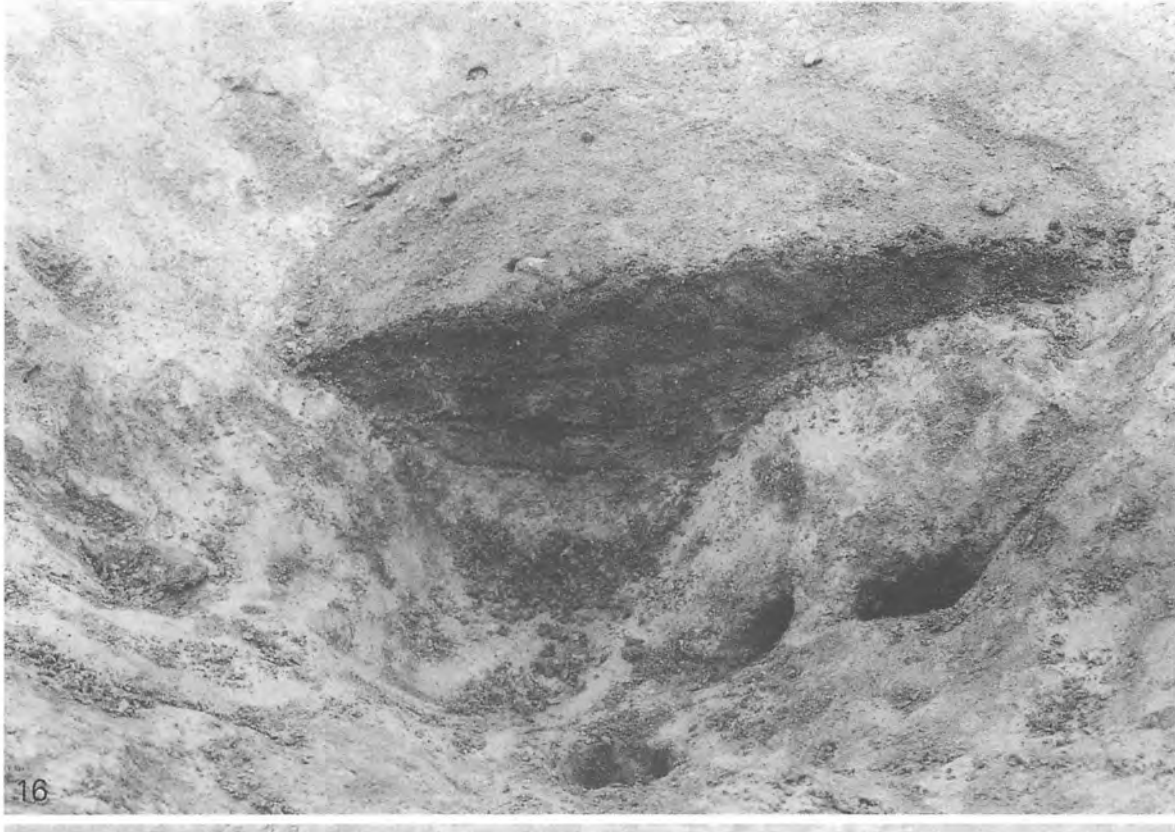
10. 4号住居跡（出土状況・土　器）
11. 4号住居跡（出土状況・炭化物）

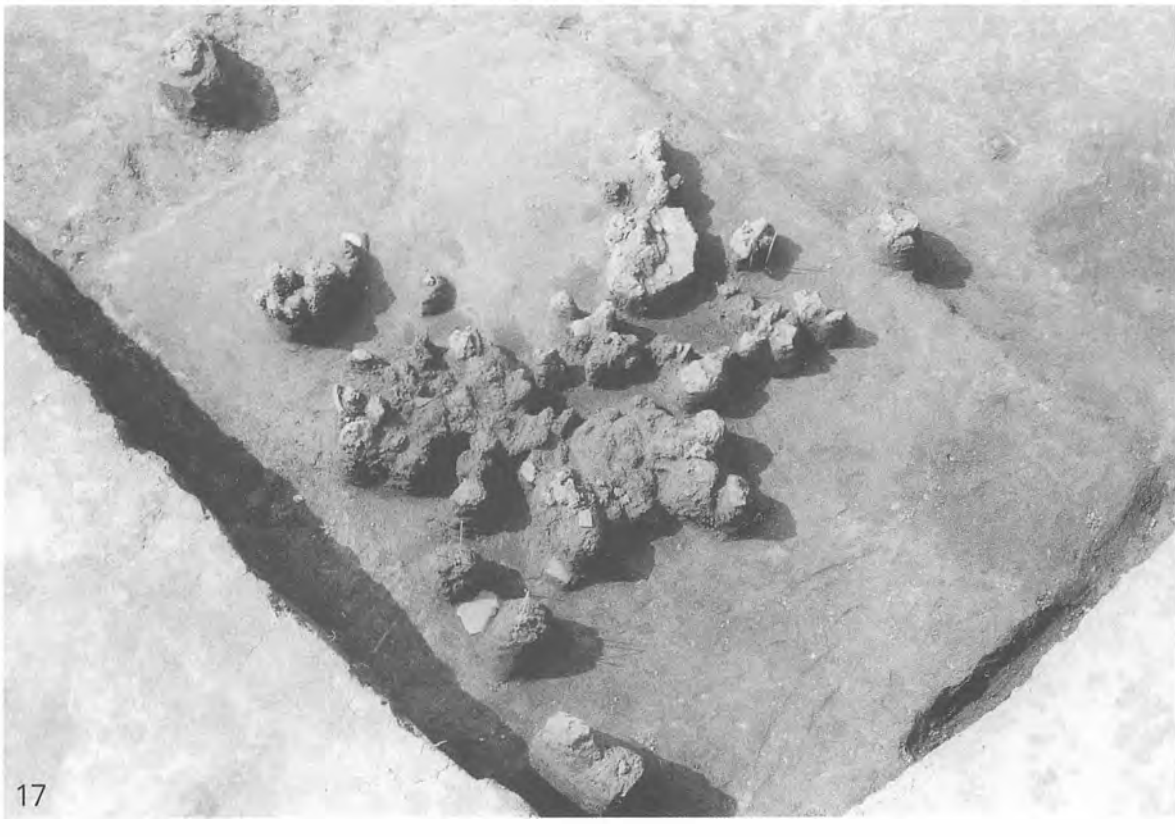


12. 6号住居跡（出土状況）
13. 6号住居跡（完　　掘）



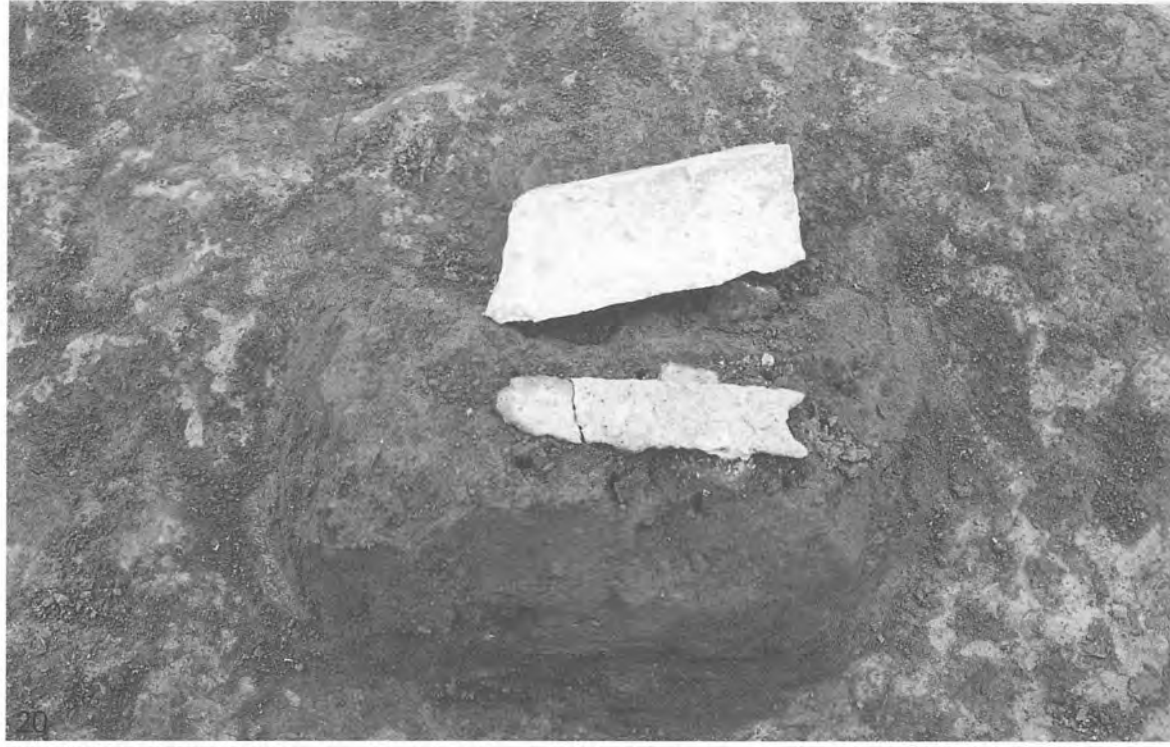
14. 6号住居跡（炉）
15. 6号住居跡（炉底の炭化物層断面）

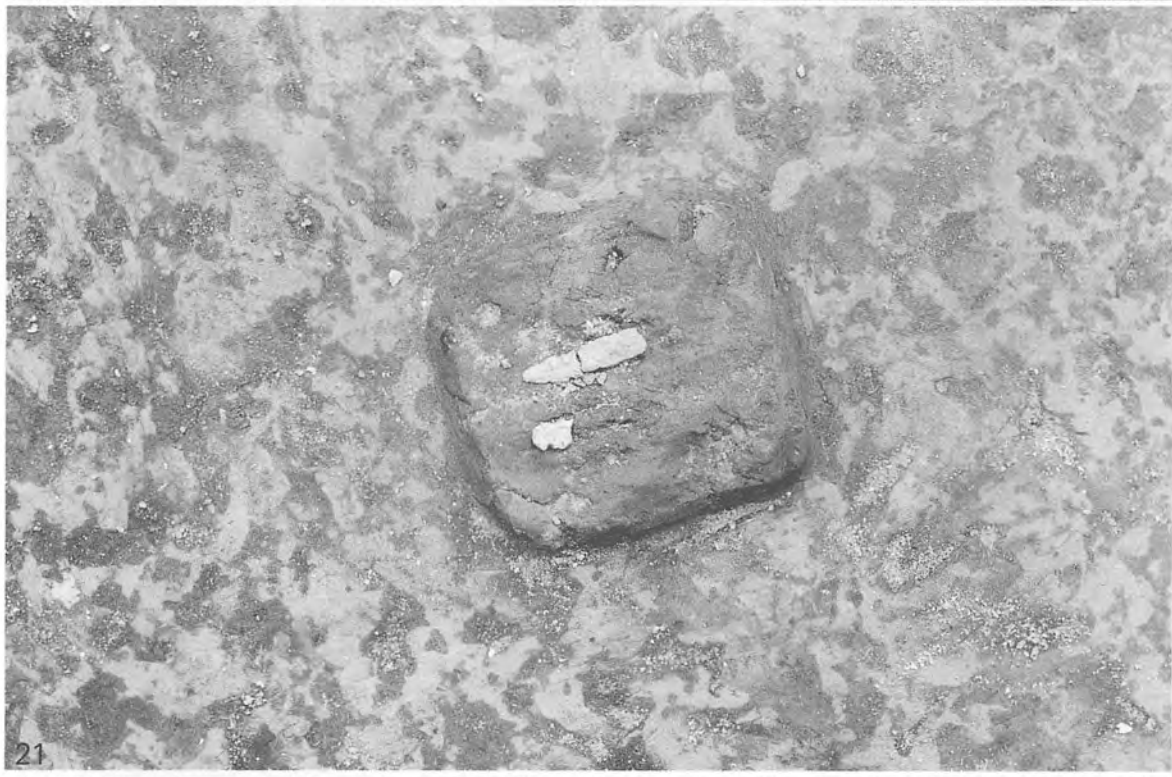




16. 6号住居跡（炉底の炭化物層断面拡大）
17. 6号住居跡（鉄滓出土状況）

18. 6号住居跡（出土状況）
19. 6号住居跡（出土状況）





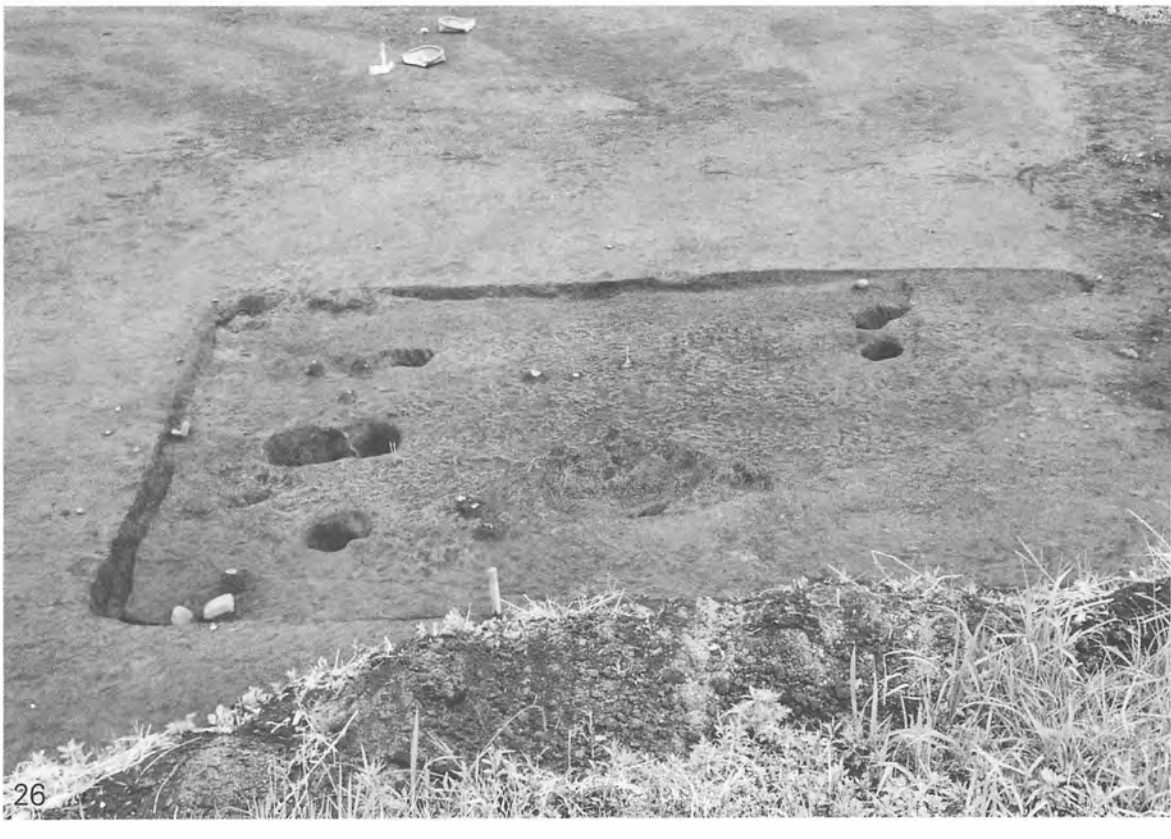
6号住(出土状況)

20. 鉄　鏃

21. 刀　子

22. 鉄　鎌

23. 7号住居跡（出土状況）
24. 7号住居跡（完　　掘）



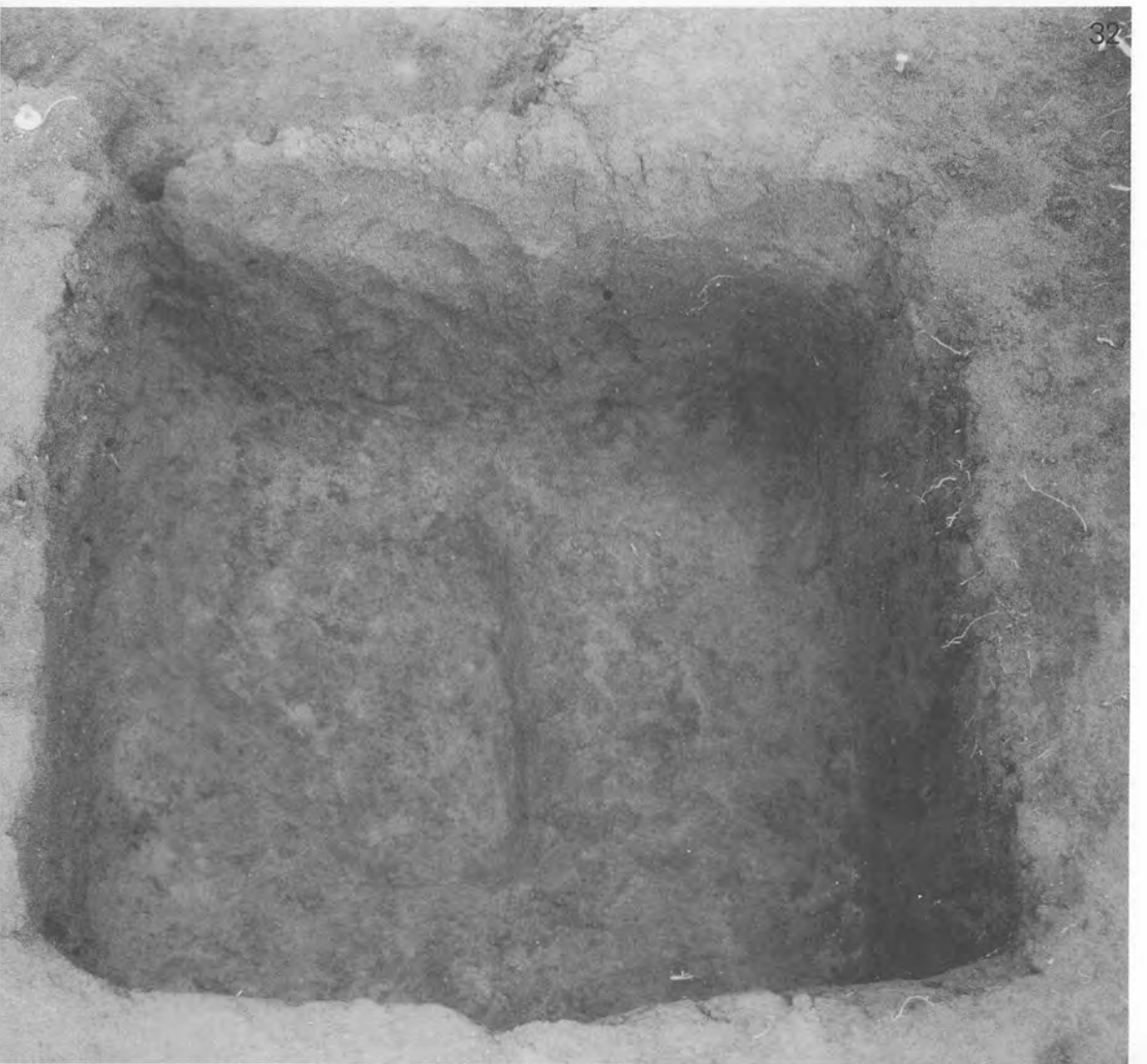
25.　7号住居跡（出土状況）
26.　8号住居跡

27. 9号住居跡（出土状況）
28. 9号住居跡（完　　掘）

29. ９号住居跡（出土遺物）
30. 近世土坑群（北より）

31. 1号土坑

32. 2号土坑

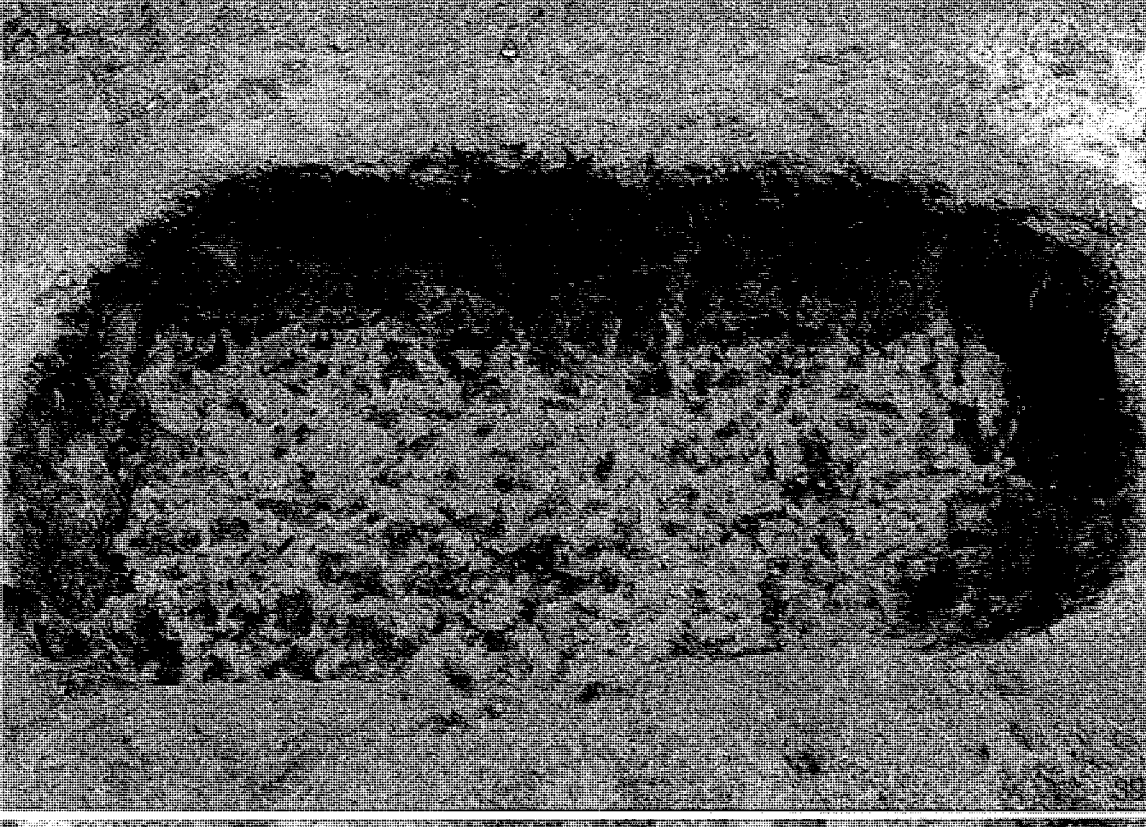


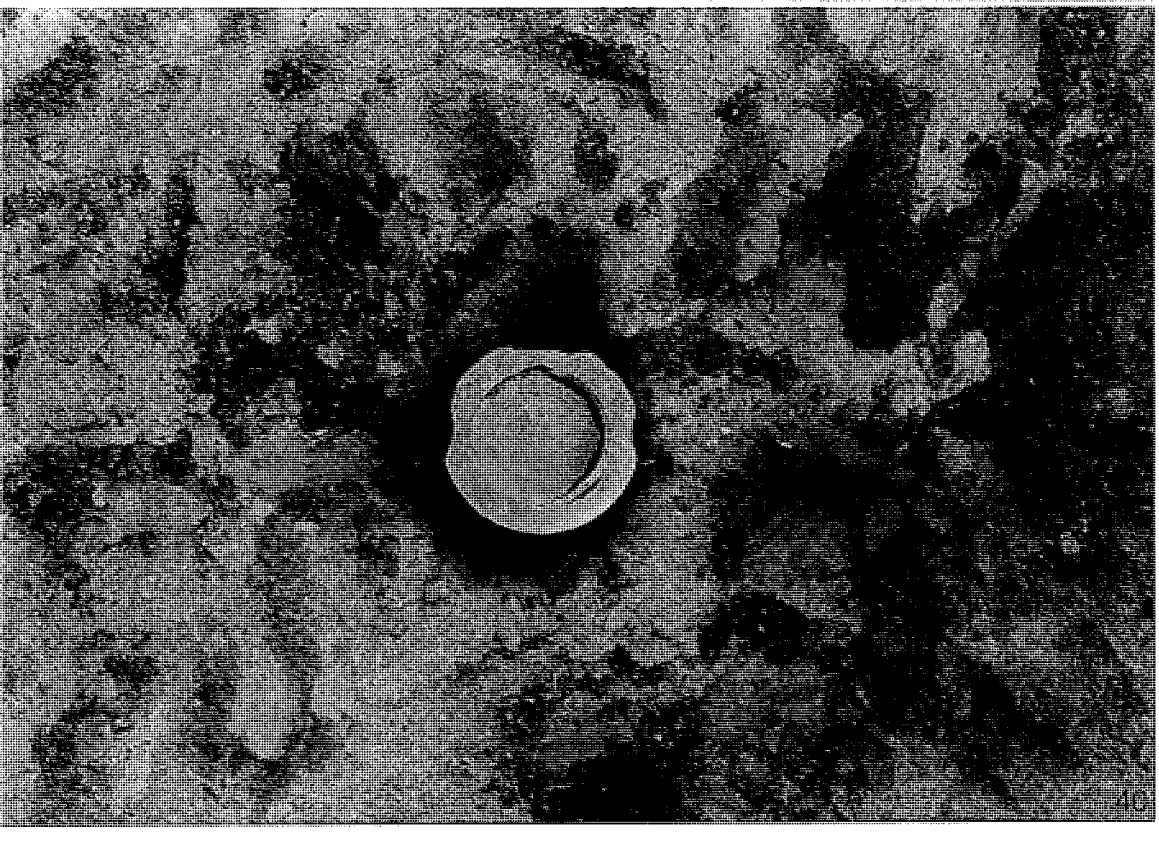
33.　3号土坑

34.　4号土坑

35. 5号、6号、7号、13号、14号土坑
36. 8号土坑

37. 9号土坑
38. 11号土坑

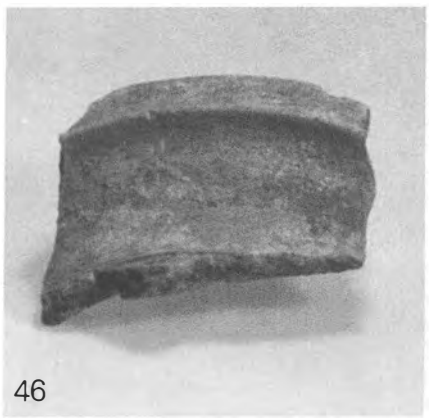


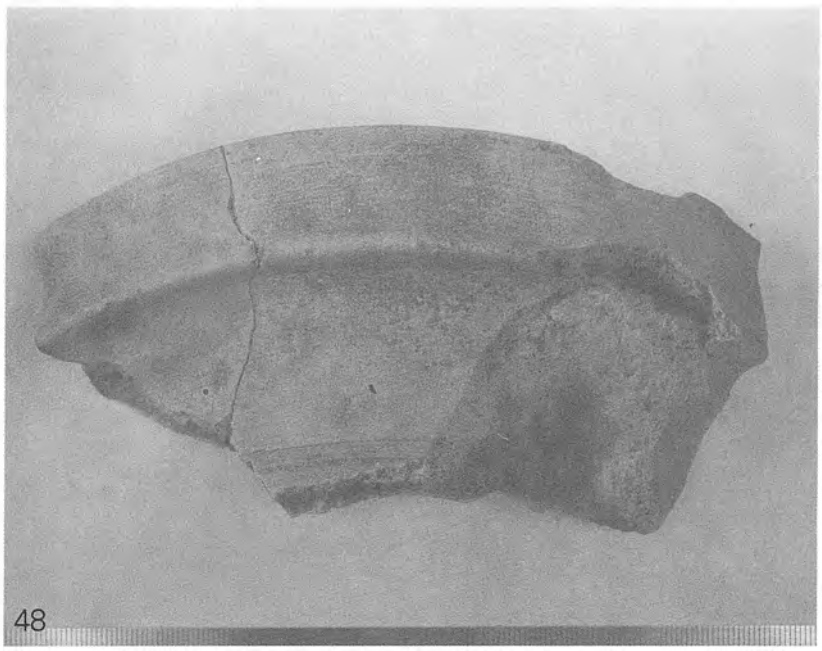


39. 12号土坑
40. 12号土坑（近世陶器出土状況）

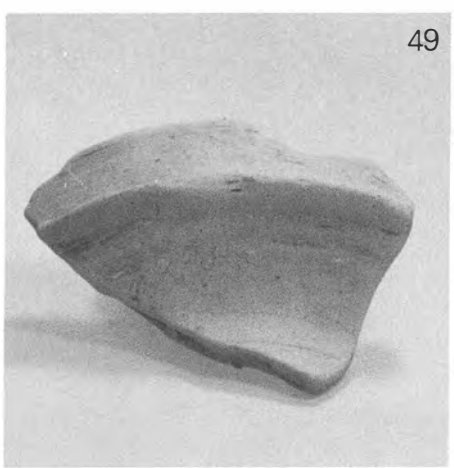
41. 16号土坑
42. 17号土坑

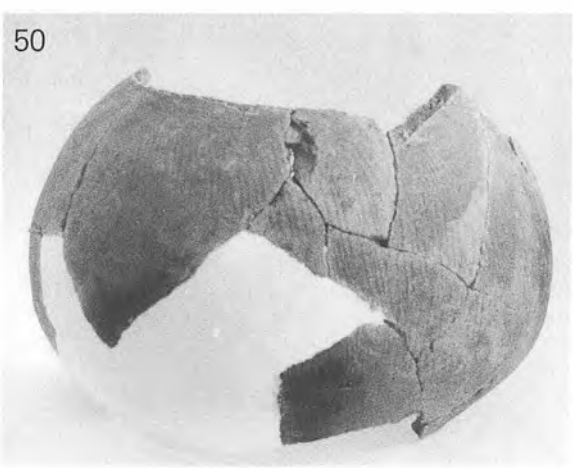
43. 壷形土器（6号住）
44. 壷形土器（6号住）
45. 壷形土器（6号住）

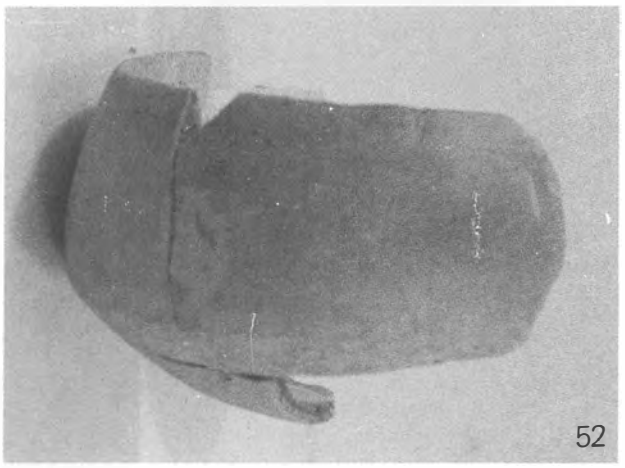


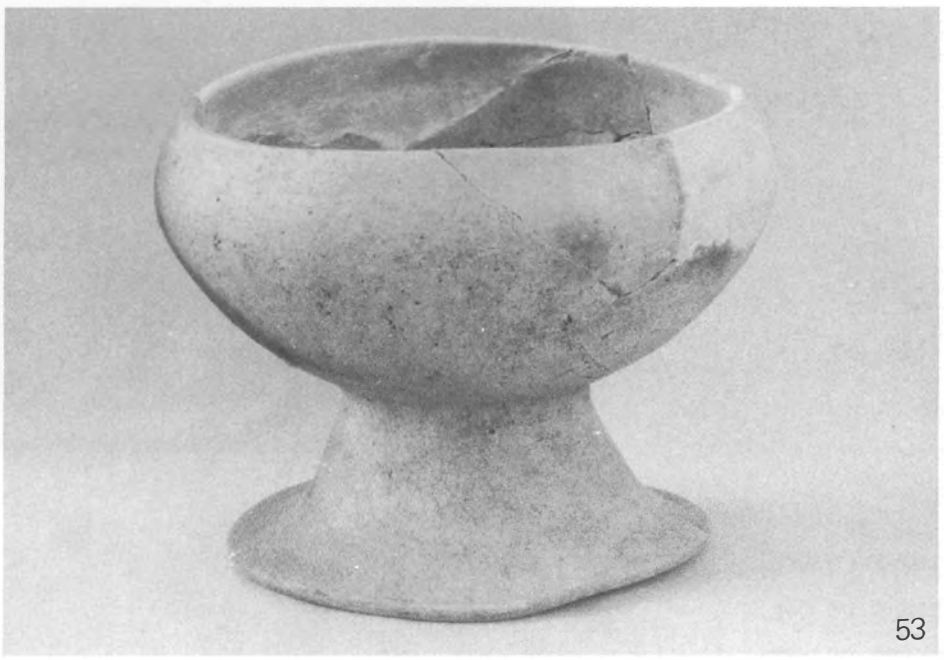


46. 複合口縁壷（７号住）
47. 複合口縁壷（９号住）
48. 複合口縁壷（９号住）
49. 複合口縁壷（９号住）
50. 鉢形土器（６号住）









51. 長頸壷形土器（3号住）
52. 鉢形土器（8号住）
53. 台付鉢（9号住）
54. 高坏形土器（6号住）

55

56

55. 甕形土器（6号住）

56. 甕形土器（6号住）

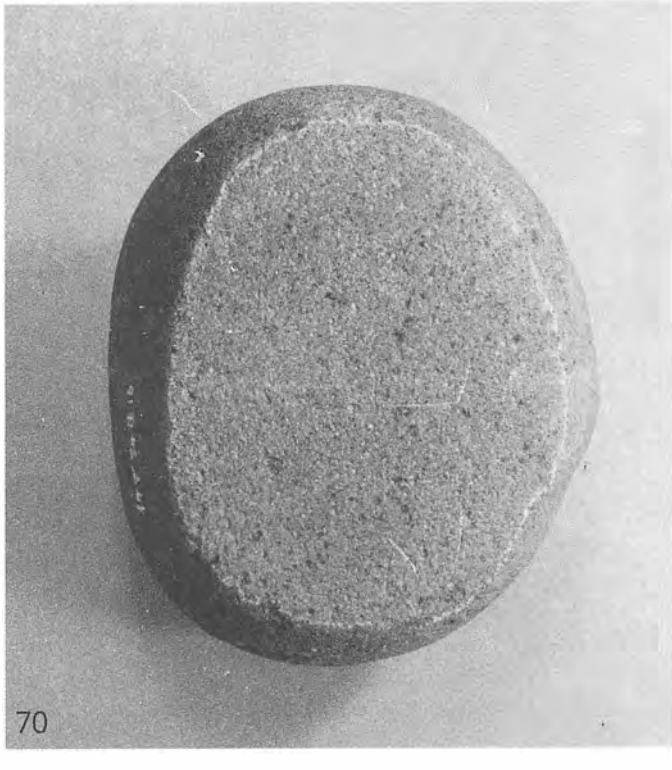
57. 甕形土器（4号住）
58. 甕形土器（5号住）
59. 甕形土器（6号住）
60. 甕形土器（6号住）
61. 甕形土器（4号住）

62. 甕形土器（４号住）

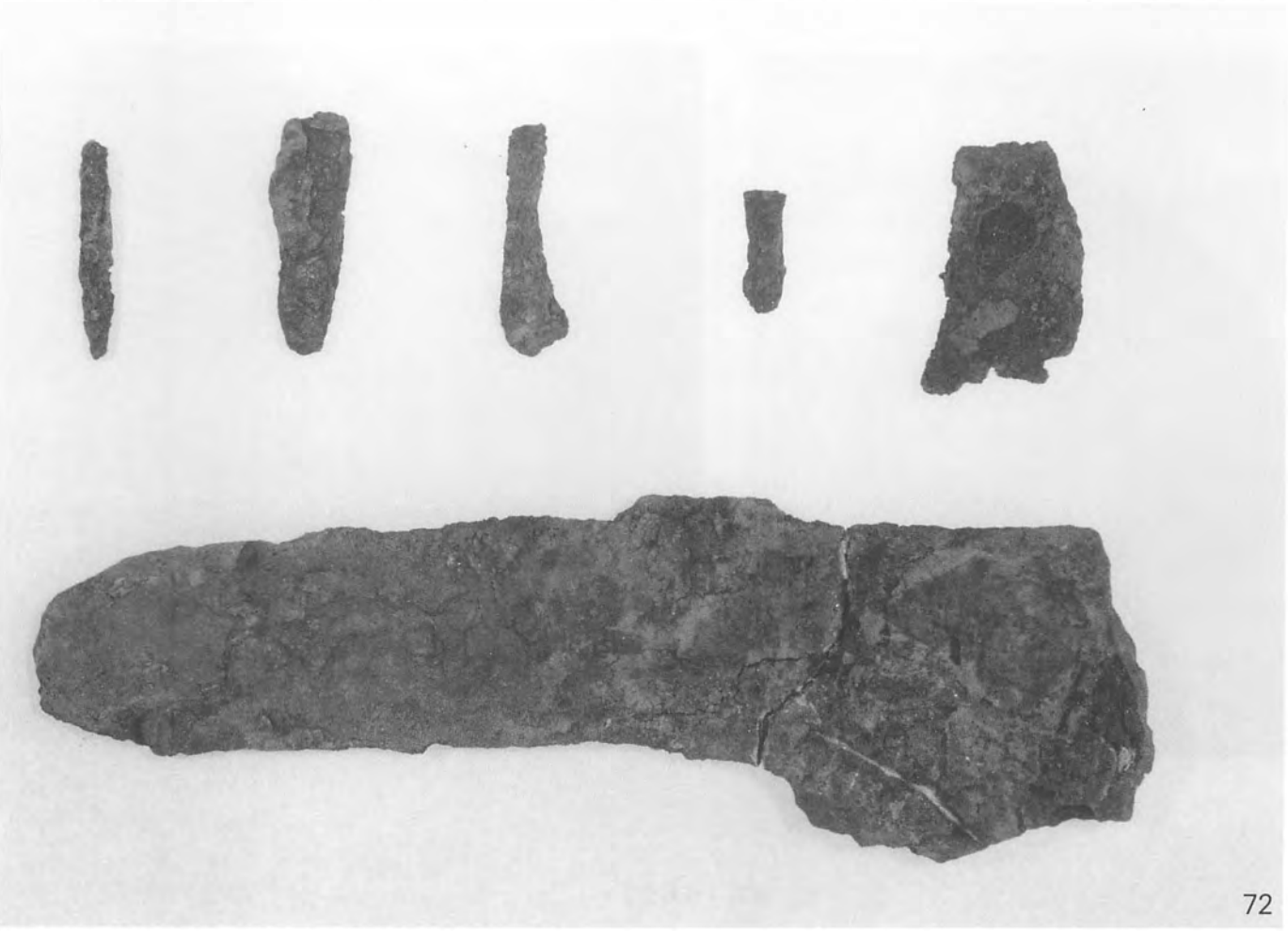
63. 甕形土器（６号住）

64. 甕形土器（６号住）

65. 砥石（6号住）
66. 磨石（6号住）

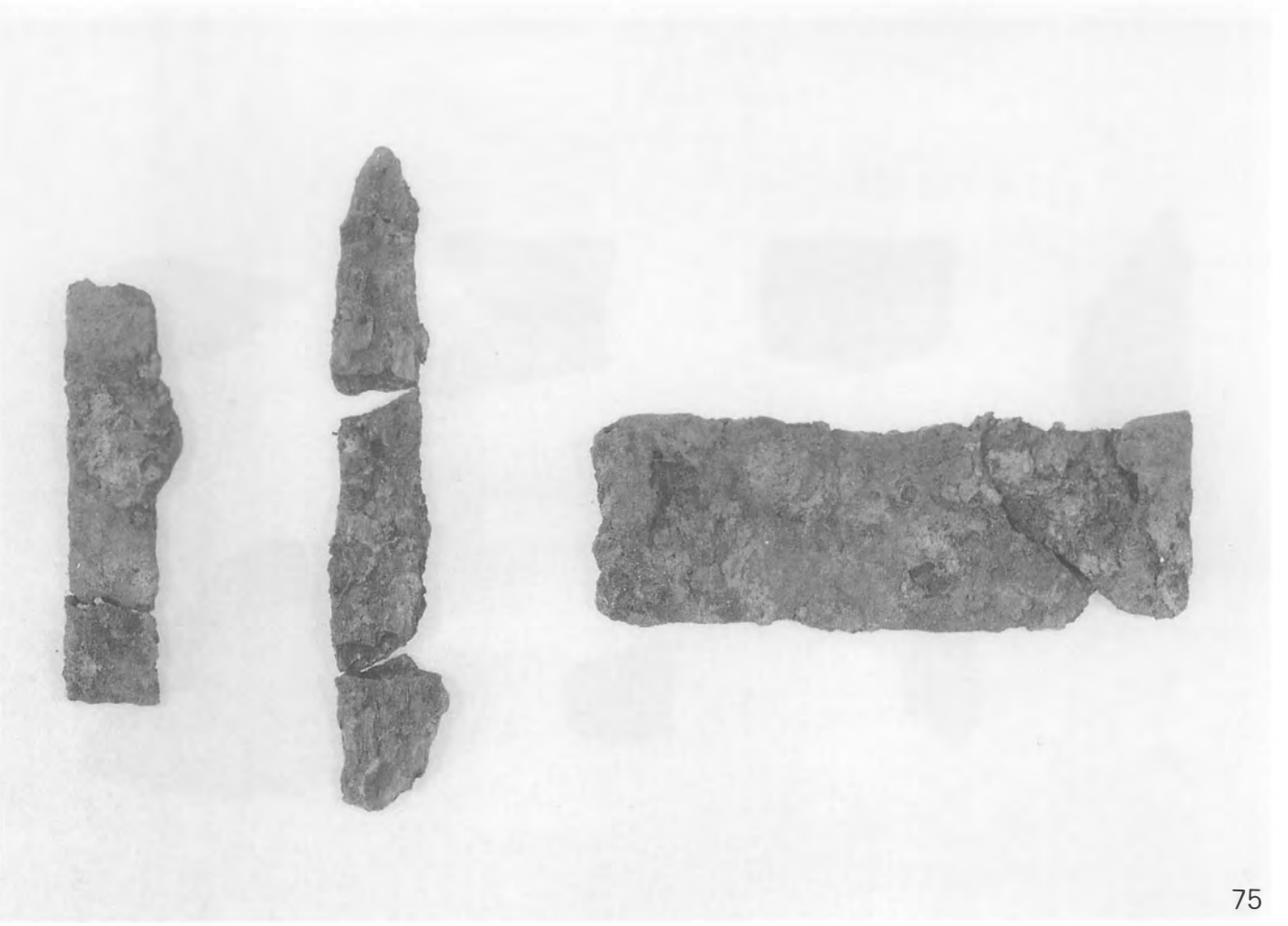


67. 磨石（6号住）
68. 磨石（6号住）
69. 磨石（6号住）
70. 磨石（6号住）

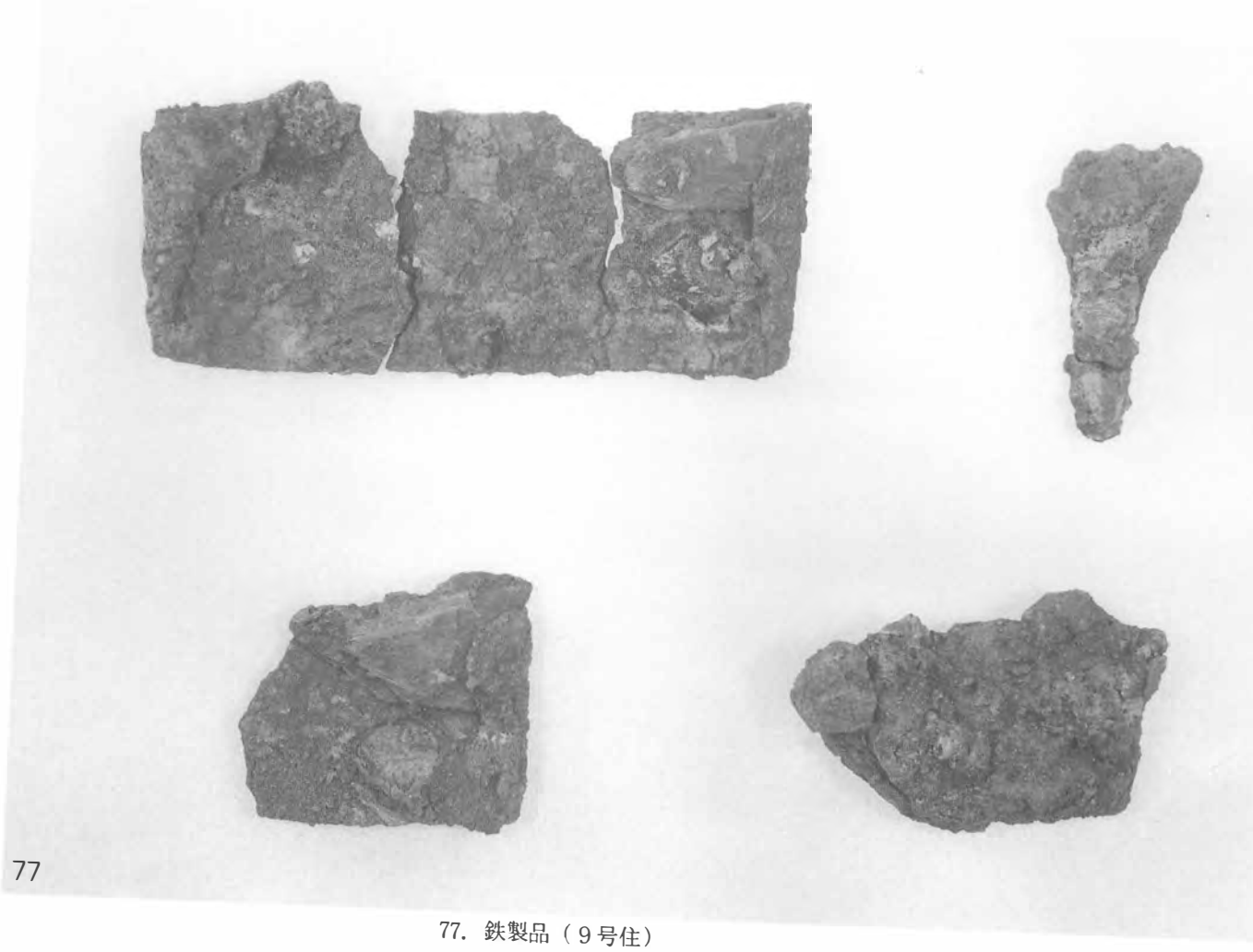


71. 鉄製品（６号住）
72. 鉄製品（６号住）

73. 鉄製品（６号住）
74. 鉄製品（６号住）



75. 鉄製品
76. 鉄製品



77. 鉄製品（９号住）

熊本県文化財調査報告　第140集

池　田　遺　跡

平成６年３月31日

編集　熊本県教育委員会
発行　〒862　熊本市水前寺６

印刷　株式会社　城野印刷所
〒861-22　熊本県上益城郡益城町広崎
1630-1
☎（096）286-3366

小里
内牧
小池
今町
黒流町
小野田一本村
新村
九州自然歩道
阿蘇谷
成川
阿蘇町
小野田町
道尻
道目木
下役原
役犬原
上役犬原
小島
塩塚
北里川
黒川
上西黒川
元黒川
南黒川
東黒川
西黒川
蔵原
竹原
西町
今宿
油町
豊肥本線
永草
乙姫
日森
広瀬
山崎
丁
上小屋
小野
下田代
豊原
水村
新川
草千里ヶ浜
高岳
白水村
05 教委・教文
② 005

この電子書籍は、熊本県文化財調査報告第 140 集を底本として作成しました。閲覧を目的としていますので、精確な図版などが必要な場合には底本から引用してください。

底本は、熊本県内の市町村教育委員会と図書館、都道府県の教育委員会と図書館、考古学を教える大学、国立国会図書館などにあります。所蔵状況や利用方法は、直接、各施設にお問い合わせください。

書名：池田遺跡
発行：熊本県教育委員会
〒862-8609　熊本市中央区水前寺 6 丁目 18 番 1 号
電話：　096-383-1111
URL：http://www.pref.kumamoto.jp/
電子書籍制作日：2015 年 12 月 24 日